

三浦老人昔話

岡本綺堂

青空文庫

桐畑の太夫

一

今から二十年あまりの昔である。なんでも正月の七草すぎの日曜日と記憶している。わたしは午後から半七老人の家をたずねた。老人は彼の半七捕物帳の材料を幾たびかわたしに話して聞かせてくれるので、きょうも年始の礼を兼ねてあわ好くば又なにかの昔話を聞き出そうと巧らんで、から風の吹く寒い日を赤坂まで出かけて行つたのであつた。

格子をあけると、沓ぬぎには新しい日和下駄がそろえてある。この頃はあまり世間と交^く際^{きあい}をしないらしい半七老人の^{うち}家にも、さすがは春だけに来客があると思つていると、わたしの案内を聞いておなじみの老婢^{ばあや}がすぐに出て来た。広くもない家^{うち}であるから、わたしの声が筒ぬけに奥へきこえたらしい。横六畳の座敷から老人は声をかけた。

「さあ、お通りください。あらたまつたお客様じゃありませんから。」

わたしは遠慮なしに座敷へ通ると、主人とむかい合つて一人の年始客らしい老人が坐つ

ていた。主人も老人であるが、客は更に十歳とお以上も老けているらしく、相当に時代のついでいるらしい糸織りの二枚小袖に黒斜くろななこ子の三つ紋の羽織をかさねて、行儀よく坐っていた。お定まりの屠蘇や重詰物もならべられて、主人も客もその顔をうすく染めていた。主人に対して新年の挨拶がすむと、半七老人は更にその客の老人をわたしに紹介した。

「こちらは太久保にお住居すまいの三浦さんとおっしゃるので……。」

初対面の挨拶が型の通りに交換された後に、わたしも主人から屠蘇をすゝめられた。ふたりの老人と一人の青年とがすぐに打解けて話しはじめると、半七老人は更に説明を加えて再び彼の客を紹介した。

「三浦さんも江戸時代には下谷に住まっています、わたしとは古いお馴染ですよ。いえ、同商売じやありませんが、まんざら縁のない方でもないのです……。番所の腰掛では一緒になったこともあるんですよ。はゝゝゝゝ。」

三浦という老人は家主いえぬしで、その時代の詞ことばでいう大屋おおやさんであった。江戸時代にはなにかの裁判沙汰があれば、かならずその町内の家主が関係することになっているので、岡つ引を勤めていた半七老人とはまったく縁のない商売ではなかった。ことに神田と下谷とは土地つゞきでもあるので、半七老人は特にこの三浦老人と親しくしていたらしかった。そ

うして、維新以後の今日まで交際をつづけているのであった。

「むかしは随分おたがいに仲好くしていたんですがね。」と、三浦老人は笑いながら云つた。「このごろは大久保の方へ引込んでしまったもんですから、どうも、出不精になつて……。いくら達者だと云つても、なにしろこの主人にくらべると、丁度一とまわりも上なんですもの、口ばかり強そうなことを云つても、からだやあんよが云うことを肯きませんや。それだもんですから自然御無沙汰勝になつてしまつて、今日もこゝまで出て来るには眼あきの朝顔という形なんですからね。いやもう意気地はありません。」

かれは持っている烟管きせるを握つて、杖をつく形をしてみせた。勿論、そのころの東京にはまだ電車が開通していなかつたのである。

「それでも三浦さんはまったく元気がいい。殊に口の方はむかしよりも達者になつたらしい。」と、半七老人も笑いながらわたしを見かえつた。「あなたは年寄りのむかし話を聴くのが好きだが、おひまがあつたら今度この三浦さんをたずねて御覧なさい。この人はなか／＼面白い話を知っています。わたくしのお話はいつでも十手じってや捕縄とりなわの世界にきまつていますけれども、こちらの方は領分がひろいから、色々の変つた世界のお話を聴かせてくれますよ。」

「いや、面白いお話なんていうのはありませんけれど、時代おくれの昔話で宜しければ、せい／＼お古いところをお聴きに入れます。まことに辺鄙な場末ですけれども、お閑ひまのときには何うぞお遊びにおいでください。」と、三浦老人も打解けて云った。

今とちがつて、その当時の大久保のあたりは山の手の奥で、躑躅つじでも見物にゆくほかには余りに足の向かないところであつたが、わたしはそんなことに頓着しなかつた。わたしは半七老人から江戸時代の探偵ものがたりを聴き出すのと同じような興味を以て、この三浦老人から何かの面白い昔話を聴きたいと思つた。新しい話を聴かせてくれる人は沢山ある、寧ろだん／＼に殖えてゆくくらいであるが、古い話を聴かせてくれる人はあけがた暁方の星のようだん／＼に消えてゆく。今のうちに少しでも余計に聴いて置かなければならないという一種の慾も手伝つて、わたしはあらためて三浦老人訪問の約束をすると、老人は快く承知して、どうで隠居の身の上ですからいつでも遊びにいらつしやいと云つてくれた。

その次の日曜日は陰くもつていた。底冷えのする日で、なんだか雪でも運び出して来そうな薄暗い空模様であつたが、わたしは思い切つて午後から麴町うまの家を出て、大久保百人町くるままで人車に乗つて行つた。車輪のめり込むような霜どけ道を幾たびか曲りまわつて、よう／＼に杉の生垣のある家を探しあてると、三浦老人は自身に玄関まで出て来た。

「やあ、よく来ましたね。この寒いのに、お強いこつてすね。さあ、さあ、どうぞおあがりください。」

南向きの広い庭を前にしている八畳の座敷に通されて、わたしは主人の老人とむかい合った。

二

わたしは自分と三浦老人との関係を説くのに、あまり多くの筆や紙を費し過ぎたかも知れない。早くいえば、前置きがあり長過ぎたかも知れないが、これから次々にこの老人の昔話を紹介してゆくには、それを語る人がどんな人物であるかと云うことも先ず一通りは紹介して置かなければならないのである。しかしこの上に読者を倦ませるのはよくない。わたしはすぐに本文に取りかゝって、この日に三浦老人から聴かされた江戸ものがたりの一つを紹介しようと思う。

三浦老人はこう語った。

今日の人たちは幕末の士風頹廢ということをよく云いますが、徳川の侍だって揃いも揃って腰ぬけの意気地無しばかりではありません。なかには今日でも見られないような、随分しつかりした人物もありました。併し又そのなかには随分だらしない困り者があつたのも事実で、それを証拠にして、さあ何うだどと云われると、まったく返事に詰まるわけです。そのだらしないと云われる仲間のうちには、又こんな風変りもありました。

これはわたくしが子供の時に聞いた話ですから、天保初年のことゝ思ってください。赤坂の桐畑きりばたけのそばに小坂丹下という旗本がありました。千五百石の知行取りで、その先

代はお目附を勤めたとか聞いています。一口に旗本と云つても、身分にはなかゝ高下があります。百石以上は旗本ですけれども、それらは所謂貧乏旗本で、先ずほんとうの旗本らしい格式を保つてゆかれるのは少くも三百石以上でしょう。五百石以上となれば立派なお歴々で、千石以上となれば大身たいしん、それこそ大威張りのお殿様です。そこで、この小坂さんの屋敷は千五百石というのですから、立派なお旗本であることは云うまでもありません。

当主の丹下という人は今年三十七の御奉公盛りですが、病気の届け出いでをして五六年まえから無役の小普請入りをしてしまいました。学問もある人で、若い時には聖堂の吟味に

甲科で白銀三枚の御褒美を貰い、家督を相続してからも勤め向きの首尾もよく、おい／＼出世の噂もきこえていたのですが、二十五六のときから此人にふと魔がさした。というのは、この人が芸事に凝り始めたのです。芸事も色々ありますが、清元の浄瑠璃に凝り固まってしまったのだから些ちつと困ります。なんでもその皮切りは、同役の人の下屋敷へ呼ばれて行ったときに、その酒宴の席上で清元の太夫と知合いになったのだと云いますが、その先代も赤坂あたりの常磐津の女師匠を囲いものにしていたとか云う噂がありますから、遊芸については幾らか下地したじがあるというほどで無くとも、相当の趣味はあったのかも知れません。いずれにしても、その清元の師匠を自分の屋敷へよんでお稽古をはじめたのです。

おなじような理窟ですけれども、これが謡うたいの稽古でもして、熊坂や船弁慶を唸るのならば格別の不思議もないのですが、清元の稽古本にむかっておかる勘平や権八小紫を歌うことになる、どうもそこが妙なことになります。と云って、これがひどく筋の悪いこと、云うほどでもない、奥様や用人も開き直って意見をするわけにも行かず、困った道楽だと苦々しく思いながらも、先ずそのまゝにして置くうちに、主人の道楽はいよく募もつて来て、もう一いっかど廉れんの太夫さん気取りになってしまったのです。

むかしから素人の芸事はあまり上達しないにきまったもので、俗に素人芸、旦那芸、殿

様芸、大名芸などと云つて、先ず上手でないのが当りまえのようになっていたのですが、この小坂という人ばかりは例外で、好きこそ物の上手なりけりと云うのか、それとも一種の天才というのか、素人芸や殿様芸を通り越して、三年五年のうちにめき／＼と上達する。第一に喉が好い。三味線も達者にひく。ふだんは苦々しく思っている奥様や用人も、春雨のしんみりと降る日に、非番の殿様が爪びきで明あけがらす 鴉あけがらす 何かを語っていると、思わずうっとりとしき惚れてしまうと云うようなわけですから、師匠もお世辞を抜きにしてほんとうに褒める。当人は一心不乱に稽古する。師匠も身を入れて教える。それが自然と同役のあいだにも伝わって、下屋敷などで何かの酒宴でも催すというような場合には、小坂をよんで一段語らせようではないかと云うことになる。当人もよろこんで出かけてゆく。それが続いているうちに、世間の評判がだん／＼に悪くなりました。

一方にこれほど浄瑠璃に凝りかたまっていながらも、小坂という人は別に勤め向きを怠るようなこともありませんでした。とんだ三段目の師もろなお直なほですが、勤めるところは屹きつと勤める武蔵守と云った風で、上かみの御用はかゝさずに勤めていたのですが、どうも世間の評判がよろしくない。まえにも云う通り、おなじ歌いものでも弁慶や熊坂とちがって、権八や浦里ではどうも困る。それも小身者の安御家人かお城坊主のたぐいならば格別、なにしろ

千五百石取りのお歴々のお旗本が粹な喉をころがして、「情は売れど心まで」などと遣っているのでは、理窟は兎もあれ、世間が承知しません。武士にあるまじきとか、身分柄をも憚らずとか云うような批難の声がだん／＼に高くなつてくるので、支配頭も聞きながしているわけにも行かなくなりました。勿論、親類縁者の一門からも意見や苦情が出てくるといふ始末。と云つて、小坂丹下、家代々の千五百石の知行をなげ出しても、今更清元をやめることは出来ないので、結局病氣と云い立て、無役の小普請組に這入ることになりました。

小普請に這入れば何をしてまいと云うわけでは勿論無いのですが、それでも小普請となると世間の見る目がずつと違つて来ます。もう一步すゝんで寧ろいっ隠居してしまえば、殆ど何をしてても自由なのですが、家督相続の子供がまだ幼少であるので、もう少し成長するのを待つて隠居するという下したころ心であつたらしく、先ずそれまでは小普請に這入つて、やかましい世間の口を塞ぐ積りで、自分から進んで無役のお仲間入りをしたのでしよう。それについても定めて内外うちそとから色々の苦情があつたことゝ察しられますが、当人が飽きでも遊芸に執着しているのだから仕方がありません。小坂さんはどう／＼自分の思い通りの小普請になつて、さあこれからはおれの世界だとばかりに、大びらで浄瑠璃道楽をはじ

めることになりました。いや、もうその頃は所謂お道楽を通り越して、本式の芸というものになっていたのです。

こうなると、自分の屋敷内で遠慮勝に語ったり、友だちの家へ行つて慰み半分に語ったりしているだけでは済まなくなりました。当人はどこまでも真剣です。だん／＼と修業が積むにつれて、自然と芸人附合をも始めるようになって、諸方のお浚いなどへも顔を出す、それがまったく巧いので誰でもあつと感服する。桐畑の殿様を素人にして置くのは勿体ないなどと云う者もある。当人もいよく乗気になって、浜町の家元から清元喜路太夫という名前まで貰うことになってしまいました。勿論それで飯を食うというわけではありませんが、千五百石の殿様が清元の太夫さんになって、肩衣かたぎぬをつけて床ゆかにあがるというのですから、世間に類の少いお話と云つていいでしょう。清元の仲間では桐畑の太夫さんと呼んでいました。道楽もこゝまで徹底してしまうと誰もなんとも云いようがありません。屋敷内の者も親類縁者の人達も、もう諦めたのか呆れたのか、正面から意見がましいことを云い出す者もなくなつて、唯いたずらに当人の自由行動をながめているばかりでした。

さてこれからがお話の本文で、この喜路太夫の身のうえに一大事件がしゅつたい出しゅつ来たいしたので

す。

三

まえにも申上げた通り、天保初年の三月末のことだそうです。芝の高輪たかなわの川与かわよという料理茶屋で清元の連中のお浚いがありました。今日とちがって、江戸時代の高輪は東海道の出入口というのでなく、繁昌したものです。殊に御殿山のお花見が大層賑いました。お浚いは昼の八つ（午後二時）頃から夜にかけて催されることになって、大きい桜のさいている茶屋の門口かどぐちに、太夫の連名を筆太にかいた立看板が出ているのを見ると、そのうちに桐畑の喜路太夫の名も麗々しく出ていました。

このお浚いは昼のうちから大層な景気で、茶屋の座敷には一杯の人が押掛けています。日がくると門口には紅い提灯をつける。内ばかりでなく、表にも大勢の人が立っている。そこへ通りかゝった七八人連の男は、どれも町人や職人風で、御殿山の花見帰りらしく、真紅まっかに酔った顔をしてよろけながらこの茶屋のまえに來かゝりました。

「やあ、こゝに清元の浚いがある。馬鹿に景気がいゝぜ。」

立ちどまつて立看板をよんでいるうちに、その一人が云いました。

「おい、おい。このなかで清元喜路太夫というのは聞かねえ名だな。どんな太夫だろう。」

「むゝ。おれも聞いたことがねえ。下手か上手か、一つ這入つて聴いて遣ろうじゃねえか。」

酔つてゐるから遠慮はない。この七八人はどやくと茶屋の門^{かど}を這入つて、帳場のまえに来ました。

「もし、喜路太夫と云うのはもうあがりましたかえ。」

「いえ、これからでございます。」と、帳場にいる者が答えました。なんと云つても幾らかの遠慮がありますから、小坂さんの喜路太夫は夜になってから床^{ゆか}にあがることになつていたのです。

「じゃあ、丁度いゝ。わつし等にも聴かせておくんなせえ。」

「皆さんはどちらの方でございます。」

「わつし等はみんな土地の者さ。」

「どちらのお弟子さんで……。」

「どこの弟子でもねえ。たゞ通りかゝつたから聴きに這入つたのよ。」

浄瑠璃のお浚いであるから、誰でも無暗に入れると云うわけには行かない。殊にどの人もみんな酔っているのです、帳場の者は体よく断りました。

「折角でございますが、今晚は通りがかりのお方をお入れ申すわけにはまいりません。どうぞ悪しからず……。」

「わからねえ奴だな。おれ達は土地の者だ。今こゝのまえを通ると清元の浚いの立看板がある。ほかの太夫はみんなお馴染だが、そのなかに唯^たった一人、喜路太夫というのが判らねえ。どんな太夫だか一段聴いて、上手ならば^{ひいき}鼻^{ひいき}肩^{ひいき}にしてやるんだ。そのつもりで通してくれ。」

酔った連中はずん／＼押上ろうとするのを、帳場の者どもはあわてゝ遮りました。

「いけません、いけません。いくら土地の方でも今晚は御免を蒙ります。」

「どうしても通さねえか。そんならその喜路太夫をこゝへ呼んで来い。どんな野郎だか、面をあらためて遣る。」

なにしろ相手は大勢で、みんな酔っているのだから、始末が悪い。帳場の者も持余してると、相手はいよ／＼大きな声で怒鳴り出しました。

「さあ、素直におれ達を通して浄瑠璃を聴かせるか。それとも喜路太夫をこゝへ連れて来

て挨拶させるか。さあ、喜路太夫を出せ。」

この捫着の最中に、なにかの用があつて小坂さんの喜路太夫が生憎に帳場の方へ出て来たのです。しきりに喜路太夫という名をよぶ声が耳に這入ったので、小坂さんは何かと思つて出てみると、七八人の生酔いが入口でがや／＼騒いでいる。帳場のものは小坂さんがなまじいに顔を出しては却つて面倒だと思つたので、一人がそばへ行つて小声で注意しました。

「殿様、土地の者が酔つ払つて来て、何かぐず／＼云つているのでございます。あなたはお構い下さらない方がよろしゅうございます。」

「むゝ。土地の者がぐずりに来たのか。」

むかしは遊芸の浚いなどを催していると、質たちのよくない町内の若い者や小さい遊び人などが押掛けて来て、なんとか引つからんだことを云つて幾らかの飲代のみしろをいたぶつてゆくことが往々ありました。世間馴れている小坂さんは、これも大方その仲間であらうと思つたのです。そう思つたら猶更のこと、帳場の者にまかせて置けばよかつたのですが、そこが矢はり殿様で、自分がつか／＼と入口へ出てゆきました。

「失礼であるが、今夜はこちらも取込んでおります。ゆつくりとこゝで御酒ごしゅをあげている

と云うわけにも行かない。どうかこれで、ほかへ行つて飲んでください。」

小坂さんは紙入から幾らかの銀かねを出して、紙につゝんで渡そうとすると、相手の方ではいよゝ／＼怒り出しました。

「やい、やい。人を馬鹿にしやあがるな。おれたちは錢貰いに來たんじやあねえ。喜路太夫をこゝへ出せというんだ。」

「その喜路太夫はわたしです。」

「むゝ。喜路太夫は手前てめえか。怪しからねえ野郎だ。ひとを乞食あつかいにしやあがつて……」

なにしろ酔っているから堪らない。その七八人がいきなりに小坂さんを土間へひき摺り下して、袋叩きにしてしまったのです。旗本の殿様でも、大小を樂屋にかけてあるから丸腰です。勿論、武芸の心得もあつたのでしようが、この場合、どうすることも出来ないで、おめ／＼と町人の手籠めに逢つた。帳場の者もおどろいて止めに這入つたが間に合わない。その乱騒ぎのうちに、どこか撲ぶち所が悪かつたとみえて、小坂さんは氣をうしなつてしまつたので、乱暴者も流石にびつくりして皆ちり／＼に逃げて行きました。それを追つかけて取押えるよりも、先ず殿様を介抱しなければならぬと云うので、家うちじゅう中は大騒ぎ

になりました。

すぐに近所の医者をやんで来て、いろ／＼の手当をして貰いましたが、小坂さんはどうしても生き返らないで、とう／＼其儘に冷くなつたので、関係者はみんな蒼くなつてしまいました。もうお浚いどころではありません。兎もかくも急病の体にして、死骸を駕籠にのせて、竊^{そつ}と赤坂の屋敷へ送りとゞけると、屋敷でもおどろきましたが、場所が場所、場合が場合ですから、なんとも文句の云い様がありません。旗本の主人が清元の太夫になつて、料理茶屋のお浚いに出席して、しかも町人にぶち殺されたなどと云うことが表沙汰になれば、家断絶ぐらいの御咎めをうけないとも限りませんから、残念ながら泣寝入りにするより外はありません。今年十五になる丹三郎という息子さんは、お父さんが大事にしていた二挺の三味線を庭へ持ち出して、脇差を引きぬいてその棹を真二つに切りました。皮をずた／＼に突き破りました。

「これがせめてもの仇討だ。」

小坂さんは急病で死んだことに届けて出て、表向きは先ず無事に済んだのですが、その初七日のあくる日、八人の若い男が赤坂桐畑の屋敷へたずねて来て、玄関先でこういうことを云い入れました。

「わたくし共は高輪辺に住っております者でございますが、先日御殿山へ花見にまいりまして、その帰り途に川与という料理茶屋のまえを通りますと、その家に清元の俊いがございます、立看板の連名のうちに清元喜路太夫というのがございました。ついで名前を聞いたことのない太夫ですから、一段聴いてみようと言つて這入りますと、帳場の者が入れないという。こつちは酔っておりますので、是非入れてくれ、左もなければその喜路太夫というのをこゝへ出して挨拶させると、無理を云つて押問答をしておりますところへ、奥からその喜路太夫が出て来て、今夜は入れることは出来ないから、これで一杯飲んでくれと云つて、幾らか紙につゝんだものを出しました。くどくも申す通り、こつちも酔っておりますので、ひとを乞食あつかいにするとは怪しからねえと、喧嘩にいよく花が咲いて、とう／＼その喜路太夫を袋叩きにしてしまいました。それでまあ一旦は引きあげたのでございますが、あとでだん／＼うけたまわりますと、喜路太夫と申すのはお屋敷の殿様だそうで、実にびっくり致しました。まだそればかりでなく、それが基で殿様はおなくなり遊ばしましたそうで、なんと申上げてよろしいか、実に恐れ入りました次第でございます。就きましては、その御詫として、下主人一同うち揃つてお玄関まで罷り出しましたから、なにとぞ御存分のお仕置をねがいます。」

小坂の屋敷でも挨拶に困りました。憎い奴等だとは思っても、こゝで八人の者を成敗すれば、どうしても事件が表向きになつて、一切の秘密が露顕することになるので、応対に出た用人は飽までもシラを切つて、当屋敷に於ては左様な覚えは曾て無い、それは何かの間違いであらうと云い聞かせましたが、八人の者はなか／＼承知しない。清元喜路太夫はたしかにお屋敷の殿様に相違ない。知らないことゝは云いながら、お歴々のお旗本を殺して置いて唯そのまゝに済むわけのものでないから、こうして御成敗をねがいに出たのであるが、お屋敷でどうしても御存じないとあれば、わたくし共はこれから町奉行所へ自訴して出るより外はないと云い張るのです。

これには屋敷の方でも持てあまして、いずれ当方からあらためて沙汰をするからと云つて、一旦は八人の者を追い返して置いて、それから土地の岡つ引か何かをたのんで、二百両ほどの内済金を出して無事に済ませたそうです。主人をぶち殺された上に、あべこべに二百両の内済金を取られるなどは、随分ばか／＼しい話のようですけれども、屋敷の名前には換えられません。重々気の毒なことでした。

八人の者は勿論なんにも知らないで、たゞの芸人だと思つて喜路太夫を袋叩きにして、それがほんとうに死んだと判り、しかもそれが旗本の殿様とわかつて、みんなも一時は途

方にくれてしまったのですが、誰か悪い奴が意地をつけて、相手の弱味につけ込んで、逆ねじにこんな狂言をかけたのだと云うことです。わたくしの親父も一度柳橋の茶屋で喜路太夫の小坂さんの浄瑠璃を聴いたことがあるのですが、それはまったく巧いものだったと云うことですから、なまじい千五百石の殿様に生れなかつたら、小坂さんも天晴れの名人になりすましたのかも知れません。そう思うと、たゞ一口にだらしない困り者だと云つてもいられません。なんだか惜しいような気がします。いつの代にも斯ういうことはあるのですが、人間の運不運は判りませんね。

「いや、根っから面白くもないお話で、さぞ御退屈でしたらう。」と、云いかけて三浦老人は耳をかたむけた。「おや、降つて来ましたね。なんだか音がするようです。」

老人は起つて障子をあげると、いつの間にふり出したのか、庭の先は塩をまいたように薄白くなっていた。

「とう／＼雪になりました。」

老人は縁先の軒にかけてある鶯の籠をおろした。わたしもそろ／＼帰り支度をした。

「まあ、いゝじやありませんか。初めてお出でなすつたのですから、なにか温かいものであつた

も取らせましょう。」

「折角ですが、あまり積もらないうちに今日はお暇いとまいたしましょう。いずれ又ゆつくり伺います。」と、私は辞退して起ちかかった。

「そうですか。なにしろ足場の悪いところですから、無理にお引留め申すわけにも行かない。では、又御ゆつくりおいで下さい。こんなお話でよろしければ、なにか又思い出して置きますから。」

「はあ。是非またお邪魔にあがります。」

挨拶をして表へ出る頃には、杉の生垣きぎけがもう真白に塗られていた。わたしは人車くるまを待たせて置かなかつたのを悔んだ。それでも洋傘こうもりを持って来たのを仕合わせに、風まじりの雪のなかを停車場の方へ一足ぬきに辿って行つた。その途中は随分寒かつた。

春の雪——その白い影をみるたびに、わたしは三浦老人訪問の第一日を思い出すのである。

鎧櫃の血

一

その頃、わたしは忙しい仕事を持っていたので、兎かくにどこへも御無沙汰勝であつた。半七老人にも三浦老人にもしばらく逢う機会がなかった。半七老人はもうお馴染でもあり、わたしの商売も知っているのであるから、ちつとぐらい無沙汰をしても格別に厭な顔もされまいと、内々多寡をくくっているのであるが、三浦老人の方はまだ馴染のうすい人で、双方の気心もほんとうに知れていないのであるから、たった一度顔出しをしたぎりいたちで馴染いの道をきめては悪い。そう思いながらも矢はり半日の暇も惜しまれる身のうえで、今日こそはという都合のいゝ日が見付からなかった。

その年の春はかなりに余寒が強くて、二月から三月にかけても天からたびく白いものを降らせた。わたしは軽い風邪をひいて二日ほど寝たこともあった。なにしろ大久保に無沙汰をしていることが気にかゝるので、三月の中頃にわたしは三浦老人にあてゝ無沙汰の

詫言^{わびごと}を書いた郵便を出すと、老人からすぐに返事が来て、自分も正月の末から持病のリユマチスで寝たり起きたりしていたが、此頃はよほど快^よくなったとのことであった。そう聞くと、自分の怠慢がいよゝ悔まれるような気がして、わたしはその返事をうけ取った翌日の朝、病氣見舞をかねて大久保へ第二回の訪問を試みた。第一回の時もそうであったが、今度はいよゝ路がわるい。停車場から小一町をたどるあいだに、わたしは幾たびか雪解のぬかるみに新しい足駄を吸取られそうになった。目おぼえの杉の生垣の前まで行き着いて、わたしは初めてほつとした。天氣のいい日で、額には汗が滲んだ。

「この路の悪いところへ……。」と、老人は案外に元氣よくわたしを迎えた。「粟津の木曾殿で、大変でしたらう。なにしろこゝらは躑躅^{つじ}の咲くまでは、江戸の人の足踏^ぶみするところじゃありませんよ。」

まったく其頃の大久保は、霜解と雪解とで往来難渋の里であった。そのぬかるみを突破してわぎゝ病氣見舞に來たというので、老人はひどく喜んでくれた。リユマチスは多年の持病で、二月中は可なり強く悩まされたが、三月になつてからは毎日起きている。殊にこの四五日は好い日和がつゞくので、大変に体^{からだ}の工合がいゝという話を聴かされて、わたしは嬉しかった。

「でも、このごろは大久保も馬鹿に出来ませんぜ。洋食屋が一軒開業しましたよ。きょうはそれを御馳走しますからね。お午過ぎまで人質ですよ。」

こうして足留めを食わして置いて、老人は打ちくつろいで色々のむかし話をはじめた。次に紹介するのもその談話の一節である。

このあいだは桐畑の太夫さんのお話をしましたが、これもやはり旗本の一人のお話です。これは前の太夫さんとは段ちがいで、おなじ旗本と云つても二百石の小身、牛込の揚場あげばに近いところに屋敷を有もっている今宮六之助という人です。この人が嘉永の末年に御用道中で大阪へゆくことになりました。大阪の城の番士を云い付かつて、一種の勤番の格で出かけたのです。よその藩中と違って、江戸の侍に勤番というものは無いのですが、それでも交代に大阪の城へ詰めさせられます。大阪城の天守が雷火に焚やかれたときに、そこにしまつてある権現様の金の扇の馬うま標しるしを無事にかつぎ出して、天守の頂上から堀のなかへ飛び込んで死んだという、有名な中川帯たてわき刀もやはりこの番士の一人でした。

そんなわけですから、甲府詰などとは違って、江戸の侍の大阪詰は決して悪いことではなかったのだ、今宮さんも大威張りで出かけて行つたのです。普通の旅行ではなく、御用

道中というのですから、道中は幅が利きます。何のなにがしは御用道中で何月何日にはどこを通るということは、前以て江戸の道中奉行から東海道の宿々に達してありますから、ゆく先々ではその準備をして待ち受けていて、万事に不自由するようなことはありません。泊りは本陣で、一泊九十六文、昼飯四十八文というのですから実に廉いものです。駕籠に乗つても一里三十二文、それもこれも御用という名を頂いているおかげで、弥次喜多の道中だつてなか／＼こんなことでは済みません。主人はまあそれでもいゝとして、その家来共までが御用の二字を嵩^{かさ}にきて、道中の宿^{しゆく}々^々を困らせてあるいたのは悪いことでした。早い話が、御用道中の悪い奴に出つくわすと、駕籠屋があべこべに強請^{ゆす}られます。道中で客が駕籠屋や雲助にゆずられるのは、芝居にも小説にもよくあることですが、これはあべこべに客の方から駕籠屋や雲助をゆずるのだから怖ろしい。主人というほどの人は流石^{さすが}にそんなこともしません、その家来の若党や中^{ちゆう}間^{うげん}のたぐい、殊に中間などの悪い奴は往々それを遣つて自分たちの役得と心得ている。たとえば、駕籠に乗った場合に、駕籠のなかで無暗^{むやみ}にからだを揺する。客にゆずられては担いでゆくものが難儀だから、駕籠屋がどうかお静かにねがいますと云つても、知らない顔をしてわざと揺する。云えば云うほど、ひどく揺する。駕籠屋も結局往生して、内所で幾らか掴ませることになる。ゆすると

云う詞はこれことばから出たのか何うだか知りませんが、なにしろ斯ういう風にしてゆけるのだから堪りません。それが又、この時代の習慣で、大抵の主人も見て見ぬ振をしていたようです。それに余りにやかましく云えば、おれの主人は野暮だとか判らず屋だとか云つて、家来どもに見限られる。まことにむずかしい世の中でした。

今宮さんは若党ひとりと中間三人の上下五人で、荷かつぎの人足は宿々で雇うことにしていました。若党は勇作、中間は半蔵と勘次と源吉。主人の今宮さんは今年三十一で、これまで御奉公に不首尾もない。勿論、首尾のわるい者では大阪詰にはなりますまいが、先ずは一通りの武家氣質かたぎの人物。たゞこの人の一つの道楽は食い道楽で、食い物の好みが多きくむずかしい。今度の大阪詰についても、本人はたゞそれだけを苦にしていたが、どうも仕様がな。大阪の食い物にはおいしく馴れるとしても、当座が困るに相違ない。殊に大阪は醤油がよくないと聞いているから、せめては当座の使い料として醤油だけでも持つて行きたいという註文で、銚子の亀甲万一樽を買わせたが、扱さてそれを持つて行くのに差支えました。

武家の道中に醤油樽をかつがせては行かれない。と云つて、何分にも小さいものでないから、何かの荷物のなかに押込んで行くというわけにも行かない。その運送に困った挙句

に、それを鎧櫃に入れて行くということになりました。道中の問屋場といやばにはそれ／＼に公定相場と云うようなものがあつて、人足どもにかつがせる荷物もその目方によって運賃が違ふのですが、武家の鎧櫃にかぎつて、幾らそれが重くても所謂「重た増し」を取らないことになっていましたから、鎧櫃のなかへは色々のものを詰め込んで行く人がありました。今宮さんも多分それから思い付いたのでしょうが、醤油樽は随分思い切っています。殊にその樽を入れてしまえば、もうその上に鎧を入れる余地はありません。鎧が大事か、醤油が大事かと云うことになつても、やはり醤油の方が大切であつたとみえて、今宮さんとはう／＼自分の鎧櫃を醤油樽のかくれ家ときめてしまいました。しかし鎧を持って行かないでは困るので、鎧の袖や草摺をばら／＼に外して、籠手こても脛すねあて当も別々にして、ほかの荷物のなかへ何うにか欺うにか押込んで、先ず表向きは何の不思議も無しに江戸を立つことになりました。

それは六月の末、新暦で申せば七月の土用のうちですから、夏の盛りで暑いことおびただしい。武家の道中は道草を食わないので、はじめの日は程ヶ谷泊り、次の日が小田原、その次の日が箱根八里、御用道中ですから勿論関所のしらべも手輕にすんで、その晩は三島に泊る。こゝまでは至極無事であつたのですが、そのあくる日、江戸を出てから四日目に

三島の宿しゆくを立て、伊賀越の浄瑠璃でおなじみの沼津の宿をさして行くことになりました。上下五人の荷物は両掛かけにして、問屋場の人足三人がかついで行く。主人だけが駕籠に乗って、家来四人は徒歩かちで附いて行く。兎かく説明が多くなるようですが、この人足も問屋場に詰めているのは皆おとなしいもので、決して悪いことをする筈はないのです。もし悪いことをして、次の宿の問屋場にその次第を届け出られれば、すぐに取押えて牢に入れられるか、あるいは袋叩きにされて所払いを食うか、いずれにしても手ひどい祟をうけることになっていくのですから、問屋場にいるものは先ず安心して雇えるわけです。しかしこの問屋場に係り合のない人足で、彼の伊賀越の平作のように、村外れや宿はずれにうろ付いて客待をしている者の中には、所謂雲助根性を発揮して良くないことをする奴もありました。そんなら旅をする人は誰でも問屋場といやばにかゝりそうなものですが、問屋場には公定相場があつて負引まけひきが無いのと、問屋場では帳簿に記入する必要上、一々その旅人の身許や行く先などを取りしらべたりして、手数がなか／＼面倒であるので、少しばかりの荷物を持った人は問屋場の手にかゝらないことになっていました。勿論、お尋ね者や駈落者などは我身にうしろ暗いことがあるから問屋場にはかゝりません。そこが又、悪い雲助などの附込むところでした。

今宮さんの一行は立派な御用道中ですから、大威張りで問屋場の手にかゝって、荷物をかつがせて行つたのですが、間違ひの起るときは仕方のないもので、その前の晩は、三島の宿に幾組かの大名の泊りが落合つて、沢山の人足が要ることになったので、助郷までも狩りあつてくる始末。助郷というのは、近郷の百姓が一種の夫役のように出てくるのです。それでもまだ人数が不足であつたとみえて、宿はずれに網を張っている雲助までも呼びあつめて来たので、今宮さんの人足三人のうちにも平作の若いようなのが一人まじつていました。年は三十前後で、名前はい助と云うのだそうですが、どんな字を書くのか判りません。本人もおそらく知らなかつたかも知れません。なにしろかい助という変な名ではお話が仕にくいから、仮りに平作と云つて置きましょう。そのつもりでお聴きください。

人足どもはそれ／＼に荷物をかつぐ。彼の平作は鎧櫃をかつぐことになりました。担ごうとすると、よほど重い。平作も商売柄ですから、すぐにこれは普通の鎧櫃ではないと睨みました。這奴なか／＼悪い奴とみえて、それをかつぐ時に粗相の振をしてわざと問屋役人の眼のまえで投げ出しました。暑い時分のことですから、醤油が沸いて呑口の筥が自然に弛んでいたのか、それとも強く投げ出すはずみに、樽に割れでも出来たのか、いずれ

にしても、醤油が鎧櫃のなかへ流れ出したらしく、平作が自分の粗相をわびて再びそれを担ぎあげようとする、櫃の外へもその醤油の雫がぽとくと零れ出しました。

「あ。」

人々も顔を見あわせました。

鎧櫃から紅い水が零れ出す筈がない。どの人もおどろくのも無理はありません。あまりの不思議をみせられて、平作自身も呆氣あつけに取られました。

二

まえにも申す通り、武家のよろい櫃の底に色々の物が忍ばせてあることは、問屋場の者といやばもふだんから承知していましたが、紅い水が出るのは意外のことで、それが何であるか鳥ち渡想像よつとが付きません。こうなると役目の表、問屋の者も一応は詮議をしなければならな
いことになりました。今宮さんの顔の色が変ってしまいました。こゝで鎧櫃の蓋をあけて、
醤油樽を見つけ出されたら大変です。鎧の身代りに醤油樽を入れたなどと云うことが表向
きになったら、洒落や冗談では済まされません。お役御免は勿論、どんな御咎をうけるか

判りませんから、家来達までが手に汗を握りました。

問屋場の役人——と云つても、これは武士ではありません。その町や近村の名望家選ばれて幾人かずつ詰めているので、矢はり一種の町役人です。勿論、大勢のうちには岩^{いわな}永も重^{しげたゞ}忠もあるのですが、この役人は幸いにみんな重忠であつたとみえて、その一人がふところから鼻紙を出して、その紅い雪をふき取りました。そうしてほかの役人にも見せて、その匂いを鳥^{ちよつと}渡かぎましたが、やがて笑い出しました。

「はゝ、これは血でござりますな。御具足櫃に血を見るはおめでたい。はゝゝゝゝ。」

入^{いれもの}物が鎧櫃であるから、それに取りあわせて紅い雪を血だという。ほんとうの血ならば猶更詮議をしなければならぬ筈ですが、そこが前にもいう重忠揃いですから、何処までもそれを紅い血だということにして、そのまゝ無事に済ませてしまったので、今宮さん達もほっとしました。

「重ねて粗相をするなよ。」

役人から注意をあたえられて、平作は再び鎧櫃をかつぎ出しました。今宮さんは心のうちで礼を云いながら駕籠に乗つて、三島の宿を離れましたが、どうも胸がまだ鎮まらない。問屋場の者は表向きは無事に済ませてくれたものゝ、蔭では屹^{きつ}と笑っているに相違ない。

それにつけても、おれに恥辱をあたえた雲助めは憎い奴であると、今宮さんは駕籠のなか、
ら駕籠屋に訊きました。

「おれの鎧櫃をかついでいるのは、矢はり問屋場の者か。」

「いえ。あれは宿しゆくはずれに出ているかい助というのでございます。」と、駕籠屋は正直に
答えました。

「そうか。」

実は今宮さんも少し疑っていたことがあるのです。あの人足が鎧櫃を取り落したのは何
うもほんとうの粗相ではないらしい、わざと手ひどく投げ出したようにも思われる——と、
こう疑っている矢先へ、それが問屋場の者でないと聞いたので、いよくその疑いが深く
なりました。一所不定ふじようの雲助め、往來の旅人を苦しめる雲助め、おそらく何かの弱味を
見つけておれを強請ゆすろうという下心であろうと、今宮さんは彼を憎むの念が一層強くなり
ましたが、差当り何うすることも出来ないので、胸をさすって駕籠にゆられて行くと、朝
の五つ半（午前九時）前に沼津の宿に這入って、宿はずれの建場茶屋たてばに休むことになりま
した。朝涼あさすゞのあいだと云つても一里半ほどの路を來たので、駕籠屋は汗びっしょりにな
って、店さきの百日紅さるすべりの木の下でしきりに汗を拭いています。四人の家來たちも茶屋の

女に水を貰つて手拭をしぼったりしていましたが、三人の人足どもはまだ見えないので、若党の勇作は少し不安になりました。

「これ、駕籠屋。あの人足どもは確かなものだろうな。」

「はい。ふたりは大丈夫でございます。問屋場に始終詰めているものでございますから、決して間違いはございません。かい助の奴も、お武家さまのお供で、そばにあの二人が附いておりますから、どうすることもございますまい。やがてあとから追いつきましよう。しばらくこゝでお休みください。」と、駕籠屋は口をそろえて云いました。

「むゝ、こちらは随分足が早かつたからな。」

「はい。こちら様のお荷物はなく／＼重いと云つておりましたから、だん／＼に後おくれてしまつたのでございましょう。」

荷物が重い。――それが店のなかに休んでいる今宮さんの耳にちらりと這入つたので、今宮さんはまた気色を悪くしました。かの鎧櫃の一件を当付けらしく云うようにも聞き取れましたので、すこしく声を暴くして家来をよびました。

「勇作。貴様は駕脇についていながら、荷物のおくれるのになぜ気がつかない。あんな奴等は何をするか判つたものでない。すぐに引返して探して来い。源吉だけこゝに残つて、

半蔵も勘次も行け。あいつ等がぐずぐず云ったら引つくゝって引摺って来い。」

「かしこまりました。」

勇作はすぐに出て行きました。二人の間もつゞいて引返しました。どの人もさっきの鎧櫃のむしやくしやがあるので、なにかを口実に彼の平作めをなぐり付けてゝも遣ろうという腹で、元来た方へ急いでゆくと、二町ばかりのところでは三人の人足に逢いました。平作は並木の松の下に鎧櫃をおろして悠々と休んでいるのを、ふたりの人足がしきりに急ぎ立てゝいるところでした。

「貴様たちはなぜ遅い。宿を眼のまえに見ていながら、こんなところで休んでいる奴があるか。」と、勇作は先ず叱り付けました。

勇作に云われるまでもなく、問屋場の人足どもは正直ですから、もう一息のところだから早く行こうと、さつきから催促しているのですが、平作ひとりになかゝ動かない。こんな重い具足櫃は生れてから一度もかついだことが無いから、この暑い日に照らされながら然う急いではあるかれない。おれはこゝで一休みして行くから、おまえたちは勝手に先へ行けと云って、どつかりと腰をおろしたまゝで何うしても動かない。相手がお武家だからと云って聞かせても、こんな具足櫃をかつがせて行く侍があるものかと、空そらうそぶ嘯いて

取合わない。さりとて、かれ一人を置いて行くわけにも行かないので、人足共も持て余しているところへ、こっちの三人が引返して来たのでした。

その仔細を聴いて、勇作も赫^{かつ}となりました。平作とても大して悪い奴でもない。鎧櫃の秘密を種にして余分の酒手でもいたぶろうという位の腹でしたらうから、なんとか穩かに賺^{すか}して、多寡が二百か三百文も余計に遣ることにすれば、無事穩便に済んだのでしようが、勇作も年が若い、おまけに先刻からのむしゃくしゃ腹で、この雲助めを憎い憎いと思いつめているので、そんな穩便な扱い方をかんがえている余裕がなかったらしい。

「よし。それほどに重いならばおれが担いで行く。」

かれは平作を突きのけて、問題の鎧櫃を自分のうしろに背負いました。そうして、ほかの中間どもに眼くばせすると、半蔵と勘次は飛びかゝって平作の両腕と頭髻^{たづぎ}をつかみました。

「さあ、来い。」

平作は建場茶屋へ引き摺って行かれると、さつきから苛々して待っていた今宮さんは、奥の床几を起つて店さきへ出て来ました。見ると、勇作が鎧櫃を背負っている。中間ふたりが彼の平作を引つ立てゝくる。もう大抵の様子は推量されたので、この人もまた赫となりました。

「これ、そいつがどうしたのだ。」

この雲助めが横着をきめて動かないと云う若党の報告をきいて、今宮さんはいよく怒りました。単に横着というばかりでなく、こんなに重い具足櫃はかついだことが無いとか、こんな具足櫃をかつがせて行く侍があるものかとか云うような、あてこすりの文句が一つ一つの痛いところに触るので、今宮さんはいよく堪忍袋の緒を切りました。

「おのれ不埒な奴だ。この宿場の問屋場へ引渡すからそう思え。」

こゝへ来る途中でも、もう二三度は中間共になぐられたらしく、平作は散らし髪になつて、左の眼のうえを少し腫らしていましたが、這奴こいつなかゝゝ気の強い奴、おまけ中間どもに撲られて、これもむしやくしや腹であつたらしい。立派な侍に叱られても、平気でせゝら笑っていました。

「問屋場へでも何処へでも引渡して貰いましょう。わっしはその荷物が重いから重いと云

ったゞけのことだ。わっしも十六の年から東海道を股にかけて雲助をしているから、具足櫃と云うものはどのくらいが目方があるか知っています。わっしを問屋場へ引渡すときに、その具足櫃も一緒に持つて行つて、どんな重い具足が這入っているのか、役人達にあらためて貰いましょう。」

こうなると、這奴こいつをうっかり問屋場へ引渡すのも考えもので、いわゆる藪蛇のおそれがあります。憎い奴だとは思いつながら何どうすることも出来ない。そのうちに店の者は勿論、近所の者や往來の者がだん／＼にこの店先にあつまつて来て、武家と雲助との押問答を聴いている。中間どもが追い払つても、やはり遠巻きにして眺めている。見物人が多くなつて来たゞけに、今宮さんもいよくそのまゝには済まされなくなりましたが、前にもいう藪蛇の一件があります。こゝの問屋場の役人たちも三島の宿とおなじような重忠揃いなら仔細はないが、万一そのなかに岩永がまじつていて野暮にむずかしい詮議をされたら、あべこべにこつちが大恥をかくなければならぬ。今宮さんは残念ながら這奴こいつを追いかえずより外はありませんでした。

「貴様のような奴等にかゝり合つていては、大切の道中が遅くなる。きょうのところは格別を以てゆるして遣る。早く行け、行け」

もうこつちの内兜を見透しているの、平作は素直に立去らない。かれは勇作にむかつて大きい手を出しました。

「もし、御家来さん。酒手をいたゞきます。」

「馬鹿をいえ。」と、勇作はまた叱り付けました。「貴様のような奴に鏹びた一文でも余分なものが遣られると思うか。首の飛ばないのを有難いことにして、早く立去れ。」

「さあ、行け、行け。」

中間どもは再び平作の腕をつかんで突き出すと、さっきからはら／＼しながら見ていた駕籠屋や人足共も一緒になって、色々になだめて連れて行こうとする。なにしろ多勢に無勢で、所詮腕ずくでは敵わないと思つて、平作は引き摺られながら大きい声で怒鳴りました。

「なに、首の飛ばないのを有難く思え……。は、笑わせやあがる。おれの首が飛んだら、その具足櫃からしたじのような紅い水が流れ出すだろう。」

見物人が大勢あつまっているだけに、今宮さんも捨て、置かれません。この上にも何を云い出すか判らないと思うと、もう堪忍も容赦もない。つか／＼と追つて出て、刀の柄袋を払いました。

「そこ退け。」

刀に手をかけたと見て、平作をおさえていた駕籠屋や人足共は、あつと悸^{おび}えて飛び退きました。

「えゝ、おれをどうする。」

ふり向く途端に平作の首は落ちてしまいました。今宮さんは勇作を呼んで、茶店の手桶の水を柄杓^{ひしゃく}に汲んで血刀を洗わせていると、見物人はおどろいて皆ちり／＼に逃げてしまふ。駕籠屋や人足どもは蒼くなつて顫えている。それでも今宮さんは流石に侍です。この雲助を成敗して、しずかに刀を洗い、手を洗つて、それから矢立の筆をとり出して、ふところ紙にさら／＼と書きました。

「当宿の役人にはおれから届ける。勇作と半蔵は三島の宿へ引返して、この鎧櫃をみせて来い。」

こう云いつけて、勇作は何かさゝやくと、勇作は中間ふたりに手伝わせて、彼の鎧櫃を茶屋のうしろへ運んで行きました。そこには小川がながれている。三人は鎧櫃の蓋をあけてみると、醤油樽の底がぬけているようです。その樽も醤油も川へ流してしまつて、櫃のなかも綺麗に洗つて、それへ雲助の首と胴とを入れました。今度は半蔵がその鎧櫃を背負

つて、勇作が附いて行くことになりました。

三島の宿の間屋場ではこの鎧櫃をとぐけられて驚きました。それには今宮さんの手紙が添えてありました。

先刻は御手数相掛過分に存候。拙者鎧櫃の血汐、いつまでも溢れ出して道中迷惑に御座候間、一応おあらための上、よろしく御取捨被下度、くだされたく右重々御手数ながら御願申上候。早々

問屋場御中

今宮六之助

問屋場では鎧櫃を洗いきよめて、使のふたりに戻しました。これで鎧櫃からこぼれ出した紅い雫も、ほんとうの血であつたと云うことになります。沼津の宿の方の届も型ばかりで済みました。一方は侍、一方は雲助、しかも御用道中の旅先というのですから、可哀そうに平作は殺され損、この時代のことですから何うにも仕様がありません。

今宮さんはその後の道中に変つたこともなく、主従五人が仲よく上つて行つたのですが、彼の一件以来、どうも気が暴あらくなつたようで、左もないことにも顔色を変えて小言を云う

こともある。しかしそれは一時のことで、あとは矢張り元の通りになるので、家来共も別に気にも留めずにいると、京ももう眼の前という草津の宿しゆくに這入る途中、二三日からの雨つゞきで路がひどく悪いので、今宮さんの一行はみな駕籠に乗ることになりました。その時に、中間の半蔵が例の手段で駕籠をゆすぶって、駕籠屋から幾らかの揺すり代をせしめたことが主人に知れたので、今宮さんは腹を立てました。

「貴様は主人の面に泥を塗る奴だ。」

半蔵はさん／＼に叱られました、勇作の取りなしで先ず勘弁して貰って、霧雨のふる夕方に草津の宿に着きました。宿屋に這入って、今宮さんは草鞋をぬいでいる。家来どもは人足にかつがせて来た荷物の始末をしている。その忙しいなかで、半蔵が人足にこんなことを云いました。

「おい、おい。その具足櫃は丁寧にあつかってくれ。今日は危なくおれの首を入れられるところだった。塩かれっ辛え棺桶は感心しねえ。」

それが今宮さんの耳に這入ると、急に顔の色が変りました。草鞋をぬいで玄関へあがりかけたのが、又引返して来て激しく呼びました。

「半蔵。」

「へえ。」

何心なく小腰をかゝめて近寄ると、ぬく手も見せずと云うわけで、半蔵の首は玄関先に転げ落ちました。前の雲助の時とは違って、勇作もほかの中間共もしばらく呆れて眺めていると、不埒の奴だから手討にした、死骸の始末をしろと云いすてて、今宮さんは奥へ這入ってしまいました。

主人がなぜ半蔵を手討にしたか。勇作等大抵は察していましたが、表向きは彼のゆすりの一件から物堅い主人の怒に触れたのだと云うことにして、これも先ず無事に片附きました。

それから大阪へゆき着いて、今宮さんは城内の小屋に住んで、とゞこおりなく勤めていました。かの鎧櫃は雲助の死骸を入れて以来、空のまゝで担がせて来て、空のままで床の間に飾って置いたのです。なんでも九月のはじめだそうで、今宮さんは夕方に詰所から退つて来て、自分の小屋で夕飯を食いました。たんと飲まないのですが、晩酌には一本つけるのが例になつていたので、今夜も機嫌よく飲んでしまつて、飯を食いはじめる。勇作が給仕をする。黄^{きいろ}い行燈が秋の灯らしい色をみせて、床の下ではこおろぎが鳴く。今宮さんは飯をくいながら、今日は詰所でこんな話を聴いたと話しました。

「この城内には入らずの間というのがある。そこには淀殿が坐っているそうだ。」

「わたくしもそんな話を聴きましたが、ほんとうでござりましょうか。」と、勇作は首をかしげていました。

「ほんとうだそうだ。なんでも淀殿がむかしの通りの姿で坐っている。それを見た者は屹と命を取られると云うことだ。」

「そんなことがござりましょうか。」と、勇作はまだ疑うような顔をしていました。

「そんなことが無いとも云えないな。」

「そうでござりましょうか。」

「どうもありそうに思われる。」

云いかけて、今宮さんは急に床の間の方へ眼をつけました。

「論より証拠だ。あれ、みろ。」

勇作の眼にはなんにも見えないので、不思議そうに主人の顔色をうかがっていると、今宮さんは少し乗り出して床の間を指さしました。

「あれ、鎧櫃の上には首が二つ乗っている。あれ、あれが見えないか。えゝ、見えないか。馬鹿な奴だ。」

主人の様子がおかしいので、勇作は内々用心していると、今宮さんは跳るように飛びあがって、床の間の刀掛に手をかけました。これはあぶないと思って、勇作は素早く逃げ出して、台所のそばにある中間部屋へ転げ込んだので、勘次も源吉もおどろいた。だん／＼仔細をきいて、みんなも顔をしかめたが、半蔵の二の舞はおそろしいので、誰も進んで奥へ見とゞけに行くものがない。しかし小半時ほど立っても、奥の座敷はひっそりとしていくらしいので、三人が一緒に繋がって怖々ながら覗きに行くと、今宮さんは鎧櫃を座敷のまん中へ持出して、それに腰をかけて腹を斬っていました。

人參

一

その日は三浦老人の家で西洋料理の御馳走になった。大久保にも洋食屋が出来たという御自慢であつたが、正直のところ余り旨くはなかつた。併しもとく御馳走をたべに來たわけでないから、わたしは硬いパンでも硬い肉でも一切鵜呑みにする覺悟で、なんでも片端から頬張つていると、老人はあまり洋食を好まないらしく、且は病後という用心もあるとみえて、ほんのお附合に少しばかり食つて、やがてナイフとフォークを措いてしまった。「わたしには構わずに喫^たべてください。」

「遠慮なく頂戴します。」と、わたしは喉に支えそうな肉を一生懸命に嚙^のみ込みながら云つた。食道樂のために身をほろぼした今宮という侍に、こんな料理を食わせたなら何というだろうかなどとも考えた。

「今お話をした今宮さんのようなのが其昔にもあつたそうですよ。」と、老人はまた話し

出した。「名は知りませんが、その人は大阪の城番に行くことになったところが、屋敷に鎧が無い。大方売ってしまったか、質にでも入れてしまったのでしょうか。さりとて武家の御用道中に鎧櫃を持たせないというわけにも行かないので、空の鎧櫃に手頃の石を入れて、好加減の目方をつけてい坦ぎ出させると、それが途中で転げ出して大騒ぎをしたことがあるそうです。これも困ったでしょうね。はゝゝゝゝゝゝ。」

老人はそれからつゞけて幕末の武家の生活状態などを色々話してくれた。果し合いや、辻斬や、かたき討の話も出た。

「西鶴の武道伝来記などを読むと、昔はむやみに仇討があつたようですが、太平がつゞくに連れて、それもだん／＼に少くなつたばかりでなく、幕府でも私にかたき討わたくしをすることを禁じる方針を取っていましたし、諸藩でも表向きには仇討の願いを聴きとどけないのが多くなりましたから、自然にその噂が遠ざかつて来ました。それでも確かに仇討とわかれれば、相手を殺しても罪にはならないのですから、武家ばかりでなく、町人、百姓のあいだにも仇討は時々にありました。なにしろ芝居や講釈ではかたき討を盛に奨励していますし、世間でも褒めそやすのですから、やっぱり根切りねきというわけには行かないで、とき／＼には変つた仇討も出て来ました。これもその一つです。いや、これは赤坂へ行つて半七さ

んにお聴きなすった方がいゝかも知れない。あの人の養父にあたる吉五郎という人もかゝり合つた事件ですから。」

「いえ、赤坂も赤坂ですが、あなたが御承知のことだけは今こゝで聴かせて頂きたいもんですが、如何でしょう。」と、わたしは子供らしく強請ねだつた。

「じゃあ、まあお話をしましょう。なに、別に勿体をつけるほどの大事件ではありませんがね。」

老人は笑いながら話しはじめた。

安政三年の三月——御承知の通り、その前年の十月には彼の大地震がありまして、下町は大抵焼けたり潰れたりしましたが、それでももう半年もたつたので、案外に世直しも早く出来て、世間の景気もよくなりました。勿論、仮普請も沢山ありましたが、金廻りのいゝのや、手廻しの好いいのは、もう本普請をすませて、みんな商売をはじめていました。猿若町の芝居も蓋をあげるといふ勢いで、よし原の仮宅かりたくは大繁昌、さすがはお江戸だと諸国の人をおどろかしたくらいでした。

なんでもその三月の末だとおぼえています。日本橋新乗物町ふなみに舟見桂斎という町医者が

ありましたが、^{みたて}診断も調合も上手だというのでなか／＼流行っていました。小舟町三丁目の病家を見舞って、夜の五つ頃（午後八時）に帰ってくると、春雨がしとしと降っている。供の男に提灯を持たせて、^{おやじばし}親父橋を渡りかゝると、あとから跟^つけて来たらしい一人の者が、つか／＼と寄って来て、先ず横合から供の提灯をたゞき落して置いて、いきなりに桂齋先生の左の胸のあたりを突きました。先生はあつと云って倒れる。供はびっくりして人殺し人殺しと呼び立てる。その間に相手はどこへか姿を隠してしまいました。

桂齋先生の疵は脇差のようなもので突かれたらしく、駕籠にのせて自宅へ連れて帰りましたが、手あての甲斐もなしに息を引取ったので、騒^{さわ}ぎはいよ／＼大きくなりました。雨のふる晩ではあり、最初に提灯をたゞき消されてしまったので、供の者も相手がどんな人間であるか、どんな服装^{なり}をしていたか、些^{ちつ}とも知らないと言うのですから、手がかりはありません。しかし前後の模様から考えると、どうも物取りの仕業ではないらしい。桂齋先生に対して何かの意趣遺恨のあるものだろうという鑑定で、^{まちかた}町方でもそれ／＼に探索にかゝりました。さあ、これからは半七さんの縄張りで、わたくし共にはよく判りませんが、なにか抜きさしのならない証拠が挙げたとみえて、その下手人は間もなく召捕られました。それを召捕ったのが前にもいう通り、半七さんの養父の吉五郎という人です。

その下手人はまだ前髪のある年季小僧で、人形町通りの糸屋に奉公している者でした。

名は久松——でつち丁稚小僧で久松というと、なんだか芝居にでも出て来そうですが、本人は明けて十五という割に、からだの大きい、眼の大きい、見るから逞しそうな小僧だったそうです。しかし運のわるい子で、六つの年に男親に死別れて、姉のおつねときょうだい姉弟ふたりは女親の手で育てられたのです。勿論、株家督かぶかどくがあるというでは無し、芳町のうら店だなに逼塞して、おふくろは針仕事や洗濯物をして、細々にその日を送っているという始末ですから、久松は九つの年から近所の糸屋へ奉公にやられ、姉は十三の年から芝口の酒屋へ子守奉公に出ることになって、親子三人が分れくに暮していました。そんなわけで、碌々に手習の師匠に通ったのでも無し、誰に教えられたのでも無く、云わば野育ち同様に育つて来たのですが、不思議にこの姉弟は親思い、姉思い、弟思いで、おたがいに奉公のひまを見てはおふくろを尋ねて行く。姉は弟をたずねる。弟も姉の身を案じて、使の出先などからその安否をたずねに行く。まことに美しい親子仲、姉弟仲でした。

これほど仲が好いいだけに、親子姉弟が別々に暮していると云うことは、定めて辛かったに相違ありません。それでも行末をたのしみに、姉も弟も真面目に奉公して、盆と正月の藪入りにはかならず芳町の家にあつまって、どこへも行かずに一日話し合って帰ることに

きめていたので、その日も暮れかゝって姉弟がさびしそうに帰ってゆくうしろ姿を見送ると、相長屋あいの人達もおのずと涙ぐまれたそうです。

「久ちゃんは男だから仕方もないが、せめておつねちゃんだけは家うちに在るようにして遣りたいものだ。」と、近所でも噂をしていました。

おふくろも然う思わないではなかったでしょうが、おつねを奉公に出して置けば、一口が減った上に一年幾らかの給金が貰える。なにを云うにも苦しい世帯ですから、親子がめでたく寄合う行末を楽しみに、まあ／＼我慢しているというわけでした。どの人も勿論そうでしょうが、取分けてこの親子三人は「行末」という望みのためばかりに生きているようなものだったのです。

ところが、神も仏も見そなわずに、この親子の身のうえに悲しい破滅が起ったのです。その第一はおふくろが病氣になったことで、おふくろはまだ三十八、ふだんから至極丈夫な質だったのですが、安政二年、おつねが十七、久松が十四という年の春から不図煩いついて、三月頃にはもう枕もあがらないような大病人になってしまいました。姉弟の心配は云うまでもありません。おつねは主人に訳を話して、無理に暇を貰って帰って、一生懸命に看病する。久松も近所のことですから、朝に晩に見舞にくる。長屋の人たちも同情して、

共々に面倒を見てくれたのですが、おふくろの容態はいよく悪くなるばかりです。今までは近所の小池玄道という医者にかゝっていたのですが、どうもそれだけでは心もとないと云うので、中途から医者を換えて、彼の舟見桂齋先生をたのむことになりました。評判のいゝ医者ですから、この人のヒ加減でなんとか取留めることも出来ようかと思つたからでした。

桂齋先生は流行^{はやり}医者ですから、うら店などへはなかゝ来てくれないのを、伝^{つて}手を求めてようゝ来て貰うことにしたのですが、先生は病人の容態を篤とみて眉をよせました。

「これは容易ならぬ難病、所詮わたしのヒにも及ばぬ。」

医者にヒを投げられて、姉も弟もがっかりしました。ふたりは病人の枕もとを離れることが出来ないで、長屋の人にたのんで医者を送つて貰つて、あとは互いに顔を見あわせて溜息をつくばかりでした。この頃はめつきり痩せた姉の頬に涙が流れると、弟の大きな眼にも露が宿る。もうこの世の人ではないような母の寝顔を見守りながら、運のわるい姉弟はその夜を泣き明かしました。芝居ならば、どうしてもチョボ入りの大世話場^{おおせわば}というところですよ。

二

それだけで済めば、姉弟の不運は寧ろ軽かったのかも知れませんが、あくる朝になつておつねは長屋の人から斯ういうことを聴きました。その人がゆうべ医者を送つて行く途中で、あのおふくろさんは何うしてもいけないのですかと聞くと、桂斎先生は斯う答えたそうです。

「並一通りの療治では、とてもいけない。人参をのませれば屹きつと癒ると思うが、それを云つて聞かせても所詮無駄だと思つたから、黙つて来ました。」

人参は高価の薬で、うら店だなずまいの者が買い調えられる筈がないから、見殺しは氣の毒だと思ひながらも、それを教えずに歸つて来たというのでした。その話を聴かされて、おつねは喜びもし、嘆きもしました。まったく今の身のうえで高価の人参などを買いとゝのえる力はありません。人参にも色々ありますが、その頃では廉やすくとも三両か五両、良い品になると十両二十両とも云うほどの値ですから、なか／＼容易に手に入れられるものではない。ましてこの姉弟がどんなに工面しても才覚しても、そんな大金の調達の出来ないのは判り切っています。それでも何うかしておふくろを助けたい一心で、おつねは色々にか

んがえ抜いた挙句に、思いついたのが例の身売です。

人参の代にわが身売る——芝居や草双紙にはよくある筋ですが、おつねも差当りその外には思案もないので、とう／＼その決心をきめたのでした。いつそ容貌が悪く生れたら、そんな気にもならなかったかも知れませんでした。おつねは鳥渡ちよつと可愛らしい眼鼻立で、みがき上げれば相当に光りそうな娘なので、自分も自然そんな気になったのかも知れませんが、それでも迂濶きつにそんなことは出来ませんから、念のために医者の家へ行つて、おふくろの命は屹きつと人参で取留められるでしょうかと聞きますと、十に九つまでは請合々と桂齋先生が答えたそうです。おつねは喜んで歸つて来て、弟にその話をする、久松も喜んで嘆いたりで、しばらくは思案に迷つたのですが、姉の決心が固いのと、それより外には人参代を調達する智慧も工夫もないので、これもとう／＼思い切つて、姉に身売をさせることになってしまいました。

おつねは長屋の人にたのんで、山谷さんやあたりにいる女衞ぜげんに話して貰つて、よし原の女郎屋へ年季一杯五十両に売られることになりました。家の名は知りませんが、大町だいちょうこみせ小店で相当に流行る店だったそうです。式かたのごとくに女衞の判代や身付みづきの代を差引かれましたが、残った金を医者のところへ持つて行つて、宜しくおねがい申しますと云うと、桂齋先生は

心得て、そのうちから八両とかを受取つて、すぐに人參を買つて病人に飲ませてくれたが、おふくろの病氣は矢はりよくならない。久松も心配して、色々に医者にせがむので、先生はまた十兩をうけ取つて人參を調剤したのですが、それも験がみえない。おふくろはいよいよ悪くなるばかりで、それから半月ほどの後にとうとう此世の別れになつてしまったので、久松は泣いても泣き尽せない位で、とりあえず吉原の姉のところへ知らせてやりましたが、まだ初店はつみせですから出てくることは出来ません。長屋の人たちの手をかりて、久松は兎もかくもおふくろの葬式をすませました。

こうなると、おつねの身売は無駄なことになつたようなわけで、これから十年の長いあいだ苦界くがいの勤めをしなければならぬのですから、姉思いの久松は身を切られるように情なく思いました。それから惹いて、医者を怨むような氣にもなりました。

「人參をのませれば屹きつと癒ると請合つて置きながら、あの医者はおふくろを殺した。それがために姉さんまでが吉原へ行くようになった。あの医者の嘘つき坊主め。あいつはおふくろの仇だ。姉さんのかたきだ。」

今日こんにちはそんなこともありませんが、病人が死ぬとその医者を怨むのが昔の人情で、川柳にも「見すゝの親のかたきに五分ふんれい礼」などというのがあります。まして斯ういう事情

が色々にからんでいるので、年の行かない久松は一層その医者を怨むようにもなり、自然それを口に出すようにもなったので、糸屋の主人は久松に同情もし、また意見もしました。「人間には寿命というものがある。人参を飲んで屹きつと癒るものならば、高貴のお方は百年も長命する筈だが、そうはならない。公方様くほうでもお大名でも、定命じようみようが尽きれば仕方がない。金の力でも買われないのが人の命だ。人参まで飲ませて癒らない以上は、もうあきらめるの外はない。むやみに医者を怨むようなことを云ってはならない。」

理窟はその通りですが、どうも久松には思い切りが付きませんでした。姉の身売の金はまだ幾らか残っているのを主人にあずけて、自分は相変らず奉公していましたが、おふくろは此世に無し、姉には逢われず、まったく頼りのないような身の上になってしまったので、久松はもう働く張合もぬけて、ひどく元氣のない人間になりました。毎月おふくろの墓まいりに行って、泣いて帰るのがせめてもの慰めで、いつそ死んでしまおうかなどと考えたこともありましたが、姉は生きています。年季が明ければ姉は吉原から帰ってくる。それを楽みに、久松はさびしいながらも矢はり生きていました。

そのうちに、又こんなことが久松の耳に這入りました。初めておふくろの病気をみていた小池という医者が、途中で取換えられたのを面白く思っていなかったのでしょうか、それ

に同商売 忌^{いみがたき} 敵^{かたき} というような意味もまじっていたのでしょう。その後近所の人達にむかつて、あの病人に人参をのませて何になる。いくら人参だと云つても万病に効のあるというものではない。利かない薬をあてがうのは、見す／＼病家に無駄な金を使わせるようなものだ。高価な薬をあたえれば、医者ふところは膨らむが、病家の身代は瘦せる。医は仁術で、金儲け一点張りではいけないなどと云う。それが自然に久松にもきこえましたから、いよ／＼心持を悪くしました。それでは桂齋の医者坊主め、みす／＼利かないのを知つていながら、金儲けのために高い人参を売り付けたのかも知れないという疑いも起つてくる。桂齋先生は決してそんな人物ではないのですが、ふだんから怨んでいるところへ前のような噂が耳にひびくので、年の行かない久松としては、そんな疑いを起すのも無理はありません。商売の累^{わずら}いと云いながら、桂齋先生も飛んだ敵^{かたき}をこしらえてしまいました。それでもまあそれだけのことならば、蔭で怨んでいるだけで済んだのですが、桂齋先生のためにも、久松姉弟のためにも、こゝに又とんでもない事件が 出^{しゅつ} 来^{たい} したのです。それはその年十月の大地震——この地震のことはどなたも御承知ですから改めて申し上げませんが、江戸中で沢山の家が潰れる、火事が起る、死人や怪我人が出来る。そのなかでも吉原の廓^{くるわ}は丸潰れの丸焼けで、こゝだけでもおびたゞしい死人がありました。おつねの勤め

ている店も勿論つぶれて、おつねは可哀そうに焼け死にました。久松の店も潰れたが、幸いに怪我人はありませんでした。桂齋先生の家は半分かたむいたゞけで、これも運よく助かりました。

おふくろは死ぬ、それから半年ばかりのうちに姉もつゞいて死んだので、久松は一人法師つちになつてしまいました。おふくろのないうちは、たゞ一本の杖柱とたのんでいた姉にも死別れて、久松はいよゝゝ力がぬけ果てゝ、自分ひとりの助かったのを却って悔むようになりました。おまけに姉のおつねが以前奉公していた芝口の酒屋は、土台がすっかりしてゐたと見えて、今度の地震にも家根瓦をすこし震い落されたゞけでびくともせず、運よく火事にも焼け残つたので、久松はいよゝゝあきらめ兼ねました。姉も今までの主人に奉公していれば無事であつたものを、吉原へ行つたればこそ非業の死を遂げたのである。姉はなんのために吉原へ売られて行つたのか。高価の人参は母の病を救い得ないばかりか、却つて姉の命をも奪う毒藥になつたのかと思うと、久松は日本朝鮮にあらんかぎりの人参を残らず焼いてゞもしまいたい程に腹が立ちました。その人参を売りつけた医者坊主がますゝ憎い奴のように思われて来ました。

糸屋の店では一旦小梅の親類の家うちへ立退いたので、久松も一緒に附いて行きました。場

所柄だけに、店の方はすぐに仮普請に取りかゝつて、十二月には兎もかくも商売をはじめ
るようになったので、主人や店の者は日本橋へ戻りましたが、焼跡の仮小屋同様のところ
では女子供がこの冬を過されまいというので、主人の女房や娘子供は矢はり小梅の方に残
っていることになりました。それがために小僧もひとり残されることになったので、久松
がその役にあたつて、あくる年の正月を小梅で迎えました。そのうちに三月の花が咲いて、
陽気もだん／＼にあた／＼かくなり、世間の景気も春めいて来たので、主人の家族もみんな
こゝを引払うことになつて、久松もはじめて日本橋の店へ戻つてくると、土地が近いだけ
に憎い怨めしい医者坊主めのが一層強く思い出されます。勿論、小梅にいるあいだも
毎日忘れたことはなかつたのですが、近間へ戻つてくると又一倍にその執念が強くなつて
来ました。

三月末の陰くもつた日に、久松が店の使で表へ出ると、途中で丁度、桂斎先生に逢いました。
はつと思ひながらも、よんどころなしに会釈をすると、先生の方では気が注かなかつたの
か、それともそんな小僧の顔はもう見忘れてしまったのか、素知らぬ風でゆき過ぎたので、
久松は赫かつとなりました。使をすませて主人の店へ一旦帰つて、奥にいる女房のまえに出て、
去年からあずけてある金のうちで一両だけを渡して貰いたいと云いました。なんにするの

だと聞くと、おふくろの一周忌がもう近づいたから、お長屋の人にたのんで石塔をこしらえて貰うのだという返事です。久松の孝行は女房もかねて知っているので、それは奇特のことだと云つてすぐに一両の金を出してやると、久松はそれを持って再び表へ出しましたが、もとの長屋へは行かないで、近所の刀屋へ行つて道中指のような脇差を一本買いました。

その脇差をふところに忍ばせて、久松は新乗物町へ行つて桂斎先生の出入りをうかづつていると、日のくれる頃から春雨が音もせず降つて来ました。先生の出で行くところを狙つたのですが、どうも工合が悪かったので、雨にぬれながら親父橋おやじばしの袂に立つていて、その帰るところを待ちうけて、今年十五の小僧が首尾よく相手を仕留めたのです。

久松はそれから人形町通りの店へ歸つて、平気でいつもの通りに働いていたのですが、間もなく吉五郎という人の手で召捕られました。町奉行所の吟味に対して、あの桂斎という藪医者はおふくろと姉の仇かたきだから殺しましたと、久松は悪びれずに申立てたそうです。なにぶんにもまだ十六にも足りない者ではあり、係りの役人達も大いにその情状を酌量してくれたのですが、理窟の上から云えば筋違いで、そんなことで一々かたき討をされた日には、医者の人種ひとだねが尽きてしまうわけですから、どうしても正当のかたき討と認めることは出来ないのです。

「それにしても、母と姉との仇討ならば、なぜすぐに自訴して出なかったか。」と、係りの役人は聞きました。

かたきを討つてから、久松は川づたいに逃げ延びて、人の見ないところで脇差を川のなかへ投げ込んで、自分もつゞいて川へ飛び込もうとすると、暗い水のうえに姉のおつねが花魁おいらんのような姿でぼんやりあらわれて、飛び込んではならないと云うように頻りに手を振るので、死のうとする気は急に鈍った。かんがえてみると、今こゝで自分が死んでしまえば、おふくろや姉の墓まいりをする者はなくなる。迂濶に死急ぎをしてはならない。生きられるだけは生きているのがおふくろや姉への孝行だと思い直して、早々にそこを立去って、なに食わぬ顔をして主人の店へ戻っていたと、久松はこう申立てたそうです。姉のすがたが見えたか見えないか、それは勿論わかりませんが、或は久松の眼にはほんとうに見えたのかも知れません。

奉行所ではその裁き方によほど困ったようでした。唯の意趣斬にするのも不便、さりとて仇討として赦すわけにも行かないので、一年あまりもそのまゝになっていましたが、安政四年の夏になって、久松はいよく遠島しやということになりました。島へ行ってから何うしたか知りませんが、おそらく赦に逢つて帰つたろうと思います。

置いてけ堀

一

「躑躅^{つぐじ}がさいたら又おいでなさい。」

こう云われたのを忘れないで、わたしは四月の末の日曜日に、かさねて三浦老人をたずねると、大久保の停車場のあたりは早いっじ見物の人たちで賑っていた。青葉の蔭にかい提灯や花のれんをかけた休み茶屋が軒をならべて、紅い襷の女中達がしきりに客を呼んでいるのも、その頃の東京郊外の景物の一つであつた。暮春から初夏にかけては、大久保の躑躅が最も早く、その次が亀戸^{かめいど}の藤、それから堀切^{ほりきり}の菖蒲という順番で、そのなかでは大久保が比較的に交通の便利がいゝ方であるので、下町からわざわざ上^{のぼ}ってくる見物もなかゝ多かつた。藤や菖蒲は単にその風趣を賞するだけであつたが、躑躅には色々の人形細工がこしらえてあるので、秋の団子坂の菊人形と相對して、夏の大久保は女子供をひき寄せる力があつた。

ふだんは寂しい停車場にも、きようは十五六台の人車くるまが列んでいて、つい眼のさきの躑躅園まで客を送って行こうと、うるさいほどに勧めている。茶屋の姐さんは呼ぶ、車夫くるまやは付き纏う、そのそう／＼しい混雑のなかを早々に通りぬけて、つゝじ園のつゞいていゝる小道を途中から横にきれて、おなじみの杉の生垣のまえまで来るあいだに、私はつゝじのかんざしをさしている女たちに幾たびも逢った。

門をあけて、いつものように格子の口へゆこうとすると、庭の方から声をかけられた。

「どなたです。すぐに庭の方へおまわりください。」

「では、御めん下さい。」

わたしは枝折戸をあけて、すぐに庭先の方へまわると、老人は花壇の芍薬の手入れをしているところであつた。

「やあ、いらつしやい。」

袖にまつわる蛇あぶを払いながら、老人は縁さきへ引返して、泥だらけの手を手水鉢ちようずばちで洗つて、わたしをいつもの八畳の座敷へ通した。老人は自分で起つて、忙しそうに茶を淹いれたり、菓子を運んで来たりした。それがなんだか気の毒らしくも感じられたので、私はすゝめられた茶をのみながら訊いた。

「きようはばあやはいないんですか。」

「ばあやは出ましたよ。下町にいるわたくしの娘が孫たちをつれて躑躅を見にくるとこのあいだから云つていたのですが、それが今日の日曜にどや／＼押掛けて来たもんですから、ばあやが案内役で連れ出して行きましたよ。近所でいながら燈台下暗しで、わたくしは一向不案内ですが、今年も躑躅はなか／＼繁昌するそうですね。あなたもこゝへ来がけに御覧になりましたか。」

「いゝえ。どこも覗きませんでした。」と、わたしは笑いながら答えた。

「まつすぐにこゝへ。」と、老人も笑いながらうなずいた。「まあ、まあ、その方がお利口でしょうね。いくら人形がよく出来たところで、躑躅でこしらえた牛若弁慶五条の橋なんぞは、あなた方の御覧になるものじやありませんまいよ。はゝゝゝゝゝ。」

「しかし、お客きやくらい来のところへお邪魔をしましては。」

「なに、構うものですか。」と、老人は打消すように云った。

「決して御遠慮には及びません。あの連中が一軒一軒に口をあいて見物していた日にはどうしても半日仕事ですから、めったに帰ってくる氣づかいはありませんよ。わたくし一人が置いてけ堀ぼりをくつて、退屈しのぎに泥いじりをしているところへ、丁度あなたが来て下

すつたのですから、まあゆつくりと話して行つてください。」

老人はいつもの通りに元氣よく色々なむかし話をはじめた。老人が唯^たつた今、置いてけ堀をくつたと云つたのから思い出して、わたしは彼の「置いてけ堀」なるものに就いて質問を出すと、かれは笑いながら斯う答えた。

置いてけ堀といへば、本所七不思議のなかでも、一番有名になっていますが、さてそれが何処だということは確かに判つていないようです。一体、本所の七不思議というのからして、ほんとうには判つていないのです。誰でも知っているのは、置いてけ堀、片葉の芦、一つ提灯、狸ばやし、足洗い屋敷ぐらいのもので、ほかの二つは頗る曖昧です。ある人は津軽家の太鼓、消えずの行燈だとも云いますし、ある書物には津軽家の太鼓を省いて、松浦家の椎の木を入れています。又ある人は足洗い屋敷を省いて、津軽と松浦と消えずの行燈とをかぞえているようです。この七不思議を仕組んだものには「七不思議葛^{かつしかもの}飾^{がたり}譚^{だん}」という草双紙がありました。それには何々をかぞえてあつたか忘れてしまいました。所詮無理に七つの数にあわせたのでしょうから、一つや二つはどうでもいゝので、その曖昧なところが即ち不思議の一つかも知れません。

そういうわけですから、置いてけ堀だつて何処のことだか確かには判らないのです。御承知の通り、本所は堀割の多いところですから、堀と云つたばかりでは高野山で今道心をたずねるようなもので、なか／＼知れそうもありません。元来この置いてけ堀というにも二様の説があります。その一つは、その辺に悪旗本の屋敷があつて、往来の者をむやみに引摺り込んでいかさま博奕をして、身ぐるみ脱いで置いて行かせるので、自然に置いてけ堀という名が出来たというのです。もう一つは、その辺の堀に何か怪しい主が棲んでいて、日の暮れる頃に釣師が獲物の魚をさげて帰ろうとすると、それを置いて行けと呼ぶ声が水のなかで微かにきこえると云うのです。どっちがほんとうか知りませんが、後の怪談の方が広く世間に伝わっていて、わたくし共が子供のときには、本所へ釣に行つてはいけない、置いてけ堀が怖いぞと嚇かされたものでした。

その置いてけ堀について、こんなお話があります。嘉永二年西歳とりとしの五月のことでした。本所入江町の鐘撞堂の近辺に阿部久四郎という御家人がありまして、非番の時はいつても近所の川や堀へ釣に出る。と云うと、大変に釣道楽のようにもきこえますが、実はそれが一つの内職で、釣つて来た鯉や鮒はみんな特約のある魚屋へ売つてやることになつてゐるのです。武士は食わねど高楊枝などと云つたのは昔のことで、小身の御家人たちは何か

の内職をしなければ立ち行きませんから、みなそれぞれに内職をしていました。四谷怪談の伊右衛門のように傘を張るのもあれば、花かんざしをこしらえるのもある。刀をとぐのもあれば、楊子を削るのもある。提灯を張るのもある。小鳥を飼うのもあれば、草花を作るのもある。阿部という人が釣に出るのも矢はりその内職でしたが、おなじ内職でも刀を磨いたり、魚を釣ったりしているのは、まあ世間体のいゝ方でした。

五月は例のさみだれが毎日じめ／＼降る。それがまた釣師の狙い時ですから、阿部さんはすっかり簑笠のこしらえで、びくと釣竿を持って、雨のふるなかを毎日出かけていますが、今年の夏はどういうものか両国の百本杭^{ぐい}には鯉の寄りがわるい。綾瀬の方まで上るのは少し足場が遠いので、このごろは専ら近所の川筋をあさることにしていました。そこで、五月のなかば、何でも十七八日ごろのことだそうです。その日は法恩寺橋から押上^{おしあげ}の方へ切れた堀割の川筋へ行つて、朝から竿をおろしていると、鯉はめったに当たらないが、鰻^{なます}や鯰が面白いように釣れる。内職とは云うものゝ、もと／＼自分の好きから始めた仕事ですから、阿部さんは我を忘れて釣っているうちに、雨のふる日は早く暮れて、濁った水のうちはだん／＼に薄暗くなつて来ました。

今とちがつて、その辺は一帯の田や畑で、まばらに人家がみえるだけですから、昼でも

随分さびしいところです。まして此頃は雨がふり続くので、日が暮れかゝったら滅多に人通りはありません。阿部さんは絵にかいてある釣師の通りに、大きい川柳をうしろにして、若い芦のしげった中に腰をおろして、糸のさき見えなくなるまで釣っていました。が、やがて気がつく、あたりはもう暮れ切っている。まだ残り惜しいがもうこゝらで切上げようかと、水に入れてあるびくを引きあげると、ずっしりと重い。

きようは案外の獲物があつたなと思う途端に、どこかで微かな哀れな声がきこえました。「置いてけえ。」

阿部さんもぎよつとしました。子供るときから本所に育った人ですから、置いてけ堀のことは勿論知っていました。今までこゝらの川筋は大抵自分の釣場所にしていても、曾て一度もこんな不思議に出逢ったことは無かったのに、きよう初めてこんな怪しい声を聞いたというのはまったく不思議です。しかし阿部さんは今年二十二の血氣ざかりですから、一旦はぎよつとしても、又すぐに笑い出しました。

「はゝ、おれもよつぽど臆病だとみえる。」

平気でびくを片付けて、それから釣竿を引きあげると、はり鉤にはなにか懸っているらしい。川蝦でもあるかと思つて糸を繰りよせてみると、鉤のさきに引つかゝっているのは女の櫛

でした。ありふれた三日月型の黄楊つげの櫛ですが、水のなかに漬かっていたにも似合わず、油で気味の悪い程にねば／＼していました。

「あゝ、又か。」

阿部さんは又すこし厭な心持になりました。実をいうと、この櫛は午前ひるに一度、ひるすぎに一度、やはり阿部さんの鉤にかゝったので、その都度に川のなかへ投げ込んでしまったのです。それがい／＼釣仕舞というときになって、又もや三度目で鉤にかゝったので、阿部さんも何だか厭な心持になって、うす暗いなかでその櫛を今更のように透して見ました。油じみた女の櫛、誰でもあんまり好い感じのするものではありません。殊にそれが川のなかから出て来たことを考えると、ますます好い心持はしないわけです。隠亡堀おんぼうぼりの直助権兵衛という形で、阿部さんはその櫛をじつと眺めていると、どこからかお岩の幽霊のような哀れな声が又きこえました。

「置いてけえ。」

今までは知らなかったが、それではこゝが七不思議の置いてけ堀であるのかと、阿部さんは屹きつと眼を据えてそこらを見まわしたが、暗い水の上にはなんにも見えない、細い雨が音もせずにし／＼と降っているばかりです。阿部さんは再び自分の臆病を笑って、これ

もおれの空耳であろうと思ひながら、その櫛を川のなかへ投げ込みました。

「置いていけと云うなら、返してやるぞ。」

釣竿とびくを持つて、笑いながら行きかけると、どこかで又よぶ声がきこえました。

「置いてけえ。」

それをうしろに聞きながして、阿部さんは平気ですたく帰りました。

二

小身と云つても場末の住居すまいですから、阿部さんの組屋敷は大縄おおなわでかなりに広い空地あきちを持つていました。お定まりの門がまえで、門の脇にはくゞり戸がある。両方は杉の生垣で、丁度唯今のわたくしの家のうちのような恰好に出来ています。門のなかには正面の玄関口へ通うだけの路を取つて、一方はそこで相撲でも取るか、剣術の稽古でもしようかと云うような空地あきち、一方は畑になつていて、そこで汁の實の野菜でも作ろうというわけです。阿部さんはまだ独身で、弟の新五郎は二三年まえから同じ組内の正木という家へ養子にやつて、當時はお幾という下女と主従二人暮しでした。

お幾という女は今年二十九で、阿部さんの両親が生きているときから奉公していたのですが、嫁入先があるというので、一旦ひまを取って国へ帰ったかと思うと、半年ばかりで又出て来て、もとの通りに使つて貰うことになつて、今の阿部さんの代まで ちようねん 長年して いるのでした。容貌はまず一通りですが、幾年たつても江戸の水にしめない山出しで、その代りにはよく働く。女のいない世帯のことを一手に引受けて、そのあいだには畑も作る。もと／＼小身のうえに、独身で年のわかい阿部さんは、友だちの附合や何かで些ちつとは無駄な金もつかうので、内職の鯉や鰻だけではなかく内証が苦しい。したがつて、下女に払う一年一両の給金すらも兎角とゞこおり勝になるのですが、お幾は些とも厭な顔をしてないで、まえにも云う通り、見得にも振りにも構わずに、世帯のことから畑の仕事まで精出して働くのですから、まったく徳用向きの奉公人でした。

「お帰りなさいまし。」

くゞり戸を推して這入る音をきくと、お幾はすぐに傘をさして迎いに出て来て、主人の手から重いびくをうけ取つて水口の方へ持つて行く。阿部さんも簑笠でぐつしより濡れていますから、これも一緒に水口へまわると、お幾は蠟燭をつけて来て、大きい盥に水を汲み込んで、びくの魚を移していたが、やがて小声で「おやつ」と云いました。

「旦那さま。どうしたのでございましょう。びくのなかにこんなものが……。」

手にとって見せたのは黄楊つげの櫛なので、阿部さんも思わず口のうちで「おやつ」と云いました。それはたしかに例の櫛です。三度目にも川のなかへ抛り込んで来た筈なのに、どうしてそれが又自分のびくのなかに這入って来たのか。それとも同じような櫛が幾枚も落ちていて、何かのはずみでびくのなかに紛れ込んだのかも知れないと思ったので、阿部さんは別にくわしいことも云いませんでした。

「そんなものが何うして這入ったのかな。掃溜へでも持って行って捨てゝしまえ。」

「はい。」

とは云ったが、お幾は蠟燭のあかりでその櫛をながめていました。そうして、なんとなく思ったか、これを自分にくれと云いました。

「まだ新しいのですから、捨てゝしまうのは勿体のうございます。」

櫛を拾うのは苦を拾うとか云って、むかしの人は嫌ったものでした。お幾はそんなことに頓着しないとみえて、自分が貰いたいという。阿部さんは別に気にも止めないで、どうでも勝手にするがいと云うことになりました。きようは獲物が多かったので、盥うのなかには鮒や鯰やうなぎが一杯になっている。そのなかには可成りの目方のありそうな鰻もま

じつていたので、阿部さんもすこし嬉しいような心持で、その二三匹をつかんで引きあげて見ているうちに、なんだかちくりと感じたようでしたが、それなりに手を洗って居間へ這入りました。夕飯の支度は出来ているので、お幾はすぐに膳ごしをしろえをしてくる。阿部さんはその膳にむかつて箸を取ろうとすると、急に右の小指が灼けるように痛んで、生血がにじみ出しました。

「痛い、痛い。どうしたのだろう。」

主人がしきりに痛がるので、お幾もおどろいてだん／＼詮議すると、たった今、盥うのなかの鰻をいじくっている時に、なにかちくりと触ったものがあるという。そこで、お幾は再び蠟燭をつけて、台所の盥うをあらためてみると、鰻のなかには一匹のまむし鰻がまじっていたので、びっくりして声をあげました。

「旦那様、大変でございます。鰻が這入っております。」

「鰻が……。」と、阿部さんもびっくりしました。まさかに自分の釣ったのではあるまい。そこらの草むらに棲んでいた鰻がびくのなかに這入りこんでいたのを、鰻と一緒に盥うのなかへ移したのであろう。お幾は運よく咬まれなかったが、自分は鰻をいじくっているうちに、指が触って咬まれたのであろう。これは大変、まかり間違えば命にもかゝわるのだと

思うと、阿部さんも真青になって騒ぎ出しました。

「お幾。早く医者をよんで来てくれ。」

「蝮に咬まれたら早く手当をしなければなりません。お医者くるまで打っちゃって置いては手おくれになります。」

お幾は上総かづさの生れで、こういうことには馴れているとみえて、すぐに主人の痛んでいる指のさきに口をあて、その疵口から毒血をすい出しました。それから小切こぎれを持ち出して来て、指の附根をしっかりと縛くりました。それだけの応急手当をして置いて、雨のふりしきる暗いなかを医者のところへ駆けて行きました。阿部さんは運がよかったのです。お幾がすぐにこれだけの手当をしてくれたので、勿論その命にかゝわるような大事件にはなりませんでした。医者が来て診察して、やはり蝮の毒とわかったので、小指を半分ほど切りました。その当時でも、医者はそのくらいの療治を心得ていたのです。

大難が小難、小指の先ぐらいは吉原の花魁おいらんでも切ります。それで命が助かれば実に仕合せと云わなければなりません。医者もこれで大丈夫だと受合って帰り、阿部さんもお幾も先ずほっとしましたが、なるべく静かに寝ていろと医者からも注意されたので、阿部さんはすぐに床を敷かせて横になりました。本所は蚊の早いところですから、四月の末から

蚊帳を吊っています。阿部さんは蚊帳のなかでうとうとしている、気のせいかな、すこしは熱も出たようです。宵から雨が強くなつたとみえて、庭のわか葉をうつ音がびしょしょこえます。すると、どことも無しに、こんな声が阿部さんの耳にきこえました。

「置いてけえ。」

かすかに眼をあいて見ましたが、蚊帳の外には誰もいないらしい。やはり空耳だと思つて、又しばらくして同じような声がきこえました。

「置いてけえ。」

阿部さんも堪らなくなつて飛び起きました。そうして、あわただしくお幾をよびました。

「おい、おい。早く来てくれ」

広くもない家ですから、お幾はすぐに女部屋から出て来ました。

「御用でございますか。」

蚊帳越しに枕もとへ寄つて来たお幾の顔が、ほの暗い行燈の火に照されて、今夜はひどく美しくみえたので、阿部さんも変に思つてよく見ると、やはりいつものお幾の顔に相違ないのでした。

「誰かそこらに居やしないか。よく見てくれ。」

お幾はそこらを見まわして、誰もいないと云ったが、阿部さんは承知しません。次の間から、納戸から、縁側から、便所から、しまいには戸棚のなかまでも一々あらためさせて、鼠一匹もいないことを確かめて、阿部さんも先ず安心しました。

「まったくいないか。」

「なんにも居りません。」

そういうお幾の顔が又ひどく美しいようにみえたので、阿部さんはなんだか薄気味悪くなりました。まえにも云う通り、お幾は先ず一通りの容きりよう貌で、決して美人というたぐいではありません。殊に見得にも振りにもかまわない山出しで、年も三十に近い。それがどうしてこんなに美しく見えるのか、毎日見馴れているお幾の顔を、今さら見違える筈もない。熱があるのでおれの眼がぼうとしているのかも知れないと阿部さんは思いました。

門のくゞりを推す音がきこえたので、お幾が出てみると、主人の弟の正木新五郎が見舞に來たのでした。お幾は医者へ行く途中で、正木の家の中間に出逢ったので、主人が虻に咬まれたという話をする、中間もおどろいて注進に帰ったのですが、生憎に新五郎はその時不在で、四つ（午後十時）近い頃によく戻って来て、これもその話におどろいて夜中すぐに見舞にかけ着けて來たというわけです。新五郎は今年十九ですが、もう番入り

をして家督を相続していました。兄よりはひとかき一嵩も大きい、見るから強そうな侍でした。

「兄さん。どうした。」

「いや、ひどい目に逢ったよ。」

兄弟は蚊帳越しで話していると、そこへお幾が茶を持って来ました。その顔が美しいばかりでなく、阿部さんの眼のせい、姿までが瘦形で、如何にもしなやかに見えるのです。どうも不思議だと思っていると、阿部さんの耳に又きこえました。

「置いてけえ」

阿部さんは不図かんがえました。

「新五郎。おまえ今夜泊まってくれないか。いや、看病だけならお幾ひとりで沢山だが、おまえには別に頼むことがある。おれの大小や、長押ながしにかけてある檜なんぞを、みんな何処かへ隠してくれ。そうして万一おれが不意にあばれ出すようなことがあったら、すぐに取って押さえてくれ。おとなしく云うことを肯かなかったら、縄をかけて嚴重に引く、つてくれ。かならず遠慮するな。屹きつとたのむぞ。」

なんの訳かよく判らないが、新五郎は素直に受合つて、兄の指図通りに大小や檜のたぐいを片付けてしまいました。自分はこゝに泊り込むつもりですから新五郎は兄と一つ蚊帳

に這入る。用があつたら呼ぶからと云つて、お幾を女部屋に休ませる。これで家のなかもひっそりと鎮まつた。入江町の鐘が九つ（午後十二時）を打つ。阿部さんはしばらくとく／＼していましたが、やがて眼がさめると、少し熱があるせいか、しきりに喉が渴いて来しました。女部屋に寝ているものをわざ／＼呼び起すのも面倒だと思つて、阿部さんとはなりに寝ている弟をよびました。

「新五郎、新五郎。」

新五郎はよく寝入っているとみえて、なか／＼返事をしません。

よんどころなく大きい声でお幾をよびますと、お幾はやがて起きて来しました。主人の用を聞いて、すぐに茶碗に水を入れて来ましたが、そのお幾の寝みだれ姿というのが又一層艶つぽく見えました。と思うと、また例の声が哀れにきこえます。

「置いてけえ。」

心の迷いや空耳とばかりは思つていらなくなりました。眼のまえにいるお幾は、どうしてもほんとうのお幾とは見えません。置いてけの声も、こうしてたび／＼聞える以上、どうしても空耳とは思われません。阿部さんは起き直つて蚊帳越しに訊きました。

「おまえは誰だ。」

「幾でございます。」

「嘘をつけ、正体をあらわせ。」

「御冗談を……。」

「なにが冗談だ。武士に崇ろうとは怪しからぬ奴だ。」

阿部さんは茶碗を把^とつて叩き付けようとすると、その手は自由に働きません。さつきから寝入った振りをして兄の様子をうかゞっていた新五郎が、いきなり跳ね起きて兄の腕を取押さえてしまったのです。押さえられて、阿部さんはいよく焦れ出しました。

「新五郎。邪魔をするな。早く刀を持って来い。」

新五郎は聴かない振りをして、黙って兄を抱きすくめているので、阿部さんは振り放そうとして身を藻掻きました。

「えゝ、放せ、放せ。早く刀を持って来いというのに……。刀がみえなければ、槍を持って来い。」

さつきの云い渡しがあるから、新五郎は決して手を放しません。兄が藻掻けば藻掻くほど、しっかりと押さえ付けている。なにぶんにも兄よりは大柄で力も強いのですから、いくら焦っても仕方がない。阿部さんは無暗に藻がき狂うばかりで、おめくと弟に押さえ

られていました。

「放せ。放さないか。」と、阿部さんは氣ちがいのように怒鳴りつゞけている。その耳の端では「置いてけえ。」という声がきこえています。

「これ、お幾。兄さんは蝮の毒で逆上したらしい。水を持って来て飲ませろ。」と、新五郎も堪りかねて云いました。

「はい、はい。」

お幾は阿部さんの手から落ちた茶碗を拾おうとして、蚊帳のなかへからだを半分くぐらせる途端に、その髪の毛が蚊帳に触つて、何かぱらりと畳に落ちたものがありました。それは彼の黄楊^{つげ}の櫛でした。

「お話は先ずこゝ迄です。」と、三浦老人は一息ついた。「その櫛が落ちると、お幾はもとの顔にみえたそうです。それで、だん／＼に阿部さんの氣も落ちつく。例の置いてけえも聞えなくなる。先ず何事もなしに済んだということです。お幾は初めに櫛を貰つて、一旦は自分の針箱の上にのせて置いたのですが、蝮の療治がすんで、自分の部屋へ戻つて来て、その櫛を手にとって再び眺めているところを、急に主人に呼ばれたので、あわてゝそ

の櫛を自分の頭にさして、主人の枕もとへ出て行つたのだそうです。」

「そうすると、その櫛をさしているあいだは美しい女に見えたんですね。」と、わたしは首をかしげながら訊いた。

「まあ、そういうわけです。その櫛をさしているあいだは見ちがえるような美しい女にみえて、それが落ちると元の女になつたというのです。」と、老人は答えた。「どうしてもその櫛になにかの因縁話がありそうですよ。しかしそれは誰の物か、とう／＼判らずじまいであつたということです。その櫛と、置いてけえと呼ぶ声と、そこにも何かの関係があるのか無いのか、それもわかりません。櫛と、蝮と、置いてけ堀と、とんだ三題話のようですが、そこに何にも纏まりのついていないところが却つて本筋の怪談かも知れませんよ。それでも阿部さんが早く気がついて、なんだか自分の気が可怪おかしいようだと思つて、前以て弟に取押方をたのんで置いたのは大出来でした。左もなかったら、むやみ矢鱈に刀でも振りまわして、どんな大騒ぎを仕出しでかしたかも知れないところでした。阿部さんはそれに懲りたとみえて、その後は内職の釣師を廃業したということです。」

なるほど老人の云つた通り、この長い話を終るあいだに、躑躅見物の女連は帰つて来なかつた。

落城の譜

一

「置いてけ堀」の話が一席すんでも、女たちはまだ帰らない。その帰らない間にわたしは引揚げようと思つたのであるが、老人はなかく帰さない。色々の話がそれからそれへはずんで行つた。

「いや、あなたが昨日おいでになると、丁度こゝに面白い人物が来ていたのですがね。その人は森垣幸右衛門と云つて——明治以後はその名乗りを取つて、森垣道信みちのぶというむずかしい名に換えてしまいましたが——わたくしの久しいお馴染なんです。維新後は一時横浜へ行つていたのですが、その時にかんがえ付いたのでしょう。東京へ歸つて来てから時計屋をはじめ、それがうまく繁昌して、今では大森の方へ別荘のようなものをこしらえて、まあ楽隠居という体で気楽に暮しています。なに、わたくしと同じようだと仰しやるか。どうして、どうして、わたくしなどは何うにか斯うにか息をついていると云うだけで、

とても森垣さんの足もとへも寄附かれませんよ。その森垣さんが躑躅見物ながら昨日久しぶりで尋ねてくれて、色々のむかし話をしました。その人にはこういう変った履歴があるのです。まあ、お聴きなさい。」

わたくしはもうその年月を忘れてしまったのですが、きのう森垣さんに云われて、はつきりと思い出しました。それは文久元年の夏のこと、その頃わたくしは何うも毎晩よく眠られない癖が付きましてね、まあ今日こんにちならば神経衰弱とでも云うのでしょうか、なんだか頭が重く苦しくて気が鬱ふさいで、なにをする元氣もないので、気晴しのために近所の小さい講釈場へ毎日通ったことがありました。今も昔もおなじことで、講釈場の昼席などへ詰めかけている連中は、よつぽどの閑人ひまじんか怠てあいけ者か、雨にふられて仕事にも出られないという人か、まあそんな手合てあいが七分でした。

わたくしなどもそのお仲間、特別に講釈が好きというわけでもないのですが、前に云ったような一件で、家うちにいてもくさくさする、さりとて的あてなしに往来をぶら／＼してもいられないと云うようなことで、半分は昼寝をするような積りで毎日出かけていたのです。それでも半月以上もつゞけて通っているうちに、幾人も顔なじみが出来て、家にいるより

は面白いということになりました。昼席には定連が多いので、些とつゞけて通っていると、自然と懇意の人が殖えて来ます。その懇意のなかに一人のお武家がありました。

お武家は三十二三のお国風の人で、袴を穿いていませんが、いつも行儀よく薄羽織をきていました。勤番の人でもないらしい。おそらく浪人かと思っていました。この人もよほど閑な体だともえて、大抵毎日のように詰めかけている。しかもわたくしの隣に坐っていることも屢あるので、自然特別に心安くなりましたが、どこの何ういう人だか云いもせず聞きもせず、たゞ一通りの時候の挨拶や世間話をするくらいのことでした。ところが、ある日の高座で前講のなんとかいいう若い講釈師が朝鮮軍記の碧蹄館の戦いを読んだのです。

明の大軍三十万騎が李如松を大將軍として碧蹄館へくり出してくる。日本の方では小早川隆景、黒田長政、立花宗茂と云ったような九州大名が陣をそろえて待ちうける。いや、とてもわたくしが修羅場をうまく読むわけには行かないから、張扇をたゝき立てるのは先ずこのくらいにして、さて本文に這入りますと、なにを云うにも敵の大軍が野にも山にも満ち／＼しているので、さすがの日本勢もそれを望んで少しく気怯れがたらしい。大將の小早川隆景が早くもそれを見て取って、味方の勇気を挫かせないために、わざと後向

きに陣を取らせた。こうすれば敵はみえない。なるほど巧いことをかんがえたと講釈師は云いますが、嘘かほんとうか、それはあなたの方がよく御承知でしょう。そこで小早川は貝をふく者に云いつけて、出陣の貝を吹かせようとしたが、こいつも少し怯おびえているとみて、貝を持つ手がふるえている。これはいけない。勇気をはげます貝の音が万一つもよりも弱いときは、ますく土気を弱める基もとであると思ったので、小早川自身がその法螺貝を取つて、馬上で高くふき立てると、それが北風に冴えて、味方は勿論、敵の陣中までもひびき渡る。明の三十万騎は先ずこれに胆をひしがれて、この戦いに大敗北をするという一条。それを上手な先生がよんだらば定めて面白いのでしょうか、なにしろ前講の若い奴が、横板に飴で、途切れ途切れに読むのですから遣切れません。その面白くないことおびたゞしい。

おまけに夏の暑い時、日の長い時と来ているのですから、大抵のものは薄ら眠くなつて、いゝ心持そうにうとうと居睡りを始める。そのなかで、彼のお武家だけは膝もくずさないで聴いています。尤もふだんから行儀のいゝ人でしたが、とりわけて今日は行儀を正しくして一心に聴きすましているばかりか、小早川がいよく貝をふくという件くだりになると、親の遺言を聴くか、ありがたい和尚様のお説教でも聴くときのように、じつと眼をすえて、

息をのみ込んで、一心不乱に耳をすましているという形であるので、わたくしも少し不思議に思いました。しかし根がお武家であるので、こういう軍談には人一倍の興を催しているのかとも思つて、深くは氣にも留めませんでした。

七つ（午後四時）過ぎに席がはねて、わたくしはそのお武家と一緒に表へ出て、小半町ほども話しながら来ると、このごろの空の癖で、大粒の雨がぽつり／＼と降り出して来ました。西の方には夕日が光っているのですから、大したことはあるまいとは思ひながらも、丁度わたくしの家の路地のそばでしたから、兎もかくも些^{ちつ}とのあいだ雨やどりをしてお出でなさいと、相手が辞退するのを無理に誘つて路地のなかにあるわたくしの家へ連れ込みました。連れて来ていゝ事をしました。ふたりが家の格子をくぐると、ゆう立はぶち撒けるように強く降つて来ました。

「おかげさまで助かりました。」

お武家はあつく礼を云つて、雨の晴れるまで話していました。やがて時分時になったので、奴豆腐に胡瓜揉みと云つたような台所料理のゆう飯を出すと、お武家はいよく／＼氣の毒そうに、幾たびか礼を云つて箸をとりました。その時の話に、そのお武家は奥州の方角の人で、仔細あつて江戸へ出て、遠縁のものが下谷の竜称寺という寺にいたので、それを

頼つてこの間から厄介になつてゐることでした。そのうちに雨もやんで、涼しそうな星がちら／＼と光つて來たので、お武家は繰返して礼を云つて歸りました。

唯それだけのことで、こつちでは左のみ恩にも被せていなかったのですが、そのお武家はひどく義理がたい人とみえて、あくる日の早朝に菓子折を持って礼に來たので、わたくしもいさゝか恐縮しました。奥へ通して色々の話をしてゐるうちに、双方がますます打解けて、お武家は自分の身の上話をはじめました。このお武家が前に云つた森垣幸右衛門という人で、その頃はまだ内田という苗字であつたのです。

森垣さんは奥州のある大藩の侍で、貝の役をつとめていたのです。いくさの時に法螺貝をふく役です。一口にほらを吹くと云いますけれど、本式に法螺を吹くのはなか／＼むずかしい。山伏の法螺でさえ容易でない、まして軍陣の駈引に用いる法螺と来ては更にむずかしいことになっていました。やはり色々の譜があるので、それを専門に学んだものでなければ滅多に吹くことは出来ません。拙者は貝をつかまつると云えば、立派に武士の云い立てになつたものです。森垣さんはその貝の役の家に生まれて去年の秋までは無事につとめていたのですが、人間というものは判らないもので、なまじいに貝が上手であつたために、飛んでもないことを仕出來すようになったのです。

二

貝の役はひとりではなく、幾人もあります。わたくしも素人で詳しいことは知りませんが、やはり貝の師範役というものがあつて、それについて子供のときから稽古するのだそうです。森垣さんの藩中では大館宇兵衛おおだてという人が師範役でした。その人は貝の名人で、この人が貝を吹くと六里四方にきこえるとか、この人が貝を吹いたら羽黒山の天狗山伏が聴きに来たとか、いろ／＼の云い伝えがあるそうです。年を取っても不思議に息のつく人でしたが、三年まえに七十幾歳とかいう高齢で死にました。この人に子はありましたが、齒が悪くて貝の役は勤められず、若いときから他の役にまわされていたので、その家にある貝の秘曲を伝え受けることが出来ませんでした。

わが子にゆずることの出来ないのは初めから判つていたので、宇兵衛という人は大勢の弟子のなかから然るべきものを見たてて置きました。見立てられたのが森垣さんで、宇兵衛は自分の死ぬ一年ほど前に、森垣さんを自分の屋敷へよびよせて、貝の秘曲を伝授しました。伝授すると云つても、その譜をかいてある巻物まきものをゆずるのです。座敷のまん中に

むかい合つて、弟子はその巻物をひろげて一心に見ていると、師匠が一度ふいて聞かせる。たゞそれだけのことですが、秘曲をつたえられるほどの素養のある者ならば、その譜を見ただけでも十分に吹ける筈だそうです。笙の秘曲なぞを伝えるのも矢はりそれだそうです、例の足柄山で新羅三郎義光が笙の伝授をする図に、義光と時秋とがむかい合つて笙を吹いているのは間違つていて、義光は笙をふき、時秋は秘曲の巻まきを見ているのが本当だということです、どうでしょうか。

宇兵衛は三つの秘曲を伝授して、その二つだけは吹いて聞かせましたが、最後の一つは吹かないで、たゞその譜のかいてある巻物をあたえただけでした。

「これは一番大切なものであつて、しかも妄りに吹くことは出来ぬものである。万一の場合のほかは決して吹くな。おれも生涯に一度も吹いたことは無かった。おまえも吹く時のないように神仙に祈るがよい。」

それは落城の譜というのでありました。城がいよく落ちるといふときに、今が最後の貝をふく。なるほど、これは大切なものに相違ありません。そうして、めつたに吹くことの出来ないものです。これを吹くようなことがあつては大変です。貝の役としては勿論心得ていなければならぬのですが、それを吹くことの無いように祈つていなければなりま

せん。

「万一の場合のほかには決して吹くな。」

師匠はくり返して念を押すと、森垣さんもかならず吹かないと誓を立て、その譜の巻物をゆずられました。それも畢竟は森垣さんの伎倆が師匠に見ぬかれたからで、芸道の面目、身の名譽、森垣さんも人に羨まれているうちに、その翌年には師匠の宇兵衛が歿しました。こうなると森垣さんの天下で、ゆく／＼は師匠のあとを嗣いで師範役をも仰せつけられるだろうと噂されていましたが、前にも云った通り、こゝに飛んでもない事件が^{しゅっ}出^{たい}来^{たい}したのです。

森垣さんは師匠から三つの秘曲をつたえられましたが、そのなかで最も大切に心得ると云われた例の落城の譜——それはどうしても吹くことが出来ない。泰平無事のときに落城の譜をふくと云うことは、城の滅亡を歌うようなもので、武家に取っては此上もない不吉です。ある意味に於いては主人のお家を呪うものとも見られます。師匠が固く戒めたのもその理窟で、それは森垣さんも万々心得ているのですが、そこが人情、吹くなど云われると何うも吹いて見たくて堪らない。それでも三年ほどは辛抱していたのですが、もう我慢が仕切れなくなつて来ました。うっかり吹いたらばどんなお咎めをうけるかも知れない、

まかり間違えば死罪になるかも知れない。それを承知していながら、何分にも我慢が出来ない。どうも困ったことになったものです。

それでも初めのうちは一生懸命に我慢して、巻物の譜を眺めるだけで堪えていたのですが、仕舞にはどうしても堪え切れなくなってきました。なんでも八月十四日の晩だそうです。あしたは十五夜で、今夜も宵から月のひかりが皎々と冴えている。森垣さんは縁側に出来てその月を仰いでいると、空は見果てもなしに高く晴れている。露のふかい庭では虫の声がきこえる。森垣さんはしばらくそこに突っ立っているうちに、例の落城の譜のことを思い出すと、もう矢も楯も堪らなくなりました。今夜こそはどうしても我慢が出来なくなりました。

「その時は我ながら夢のようでござった。」と、森垣さんはわたくしに話しました。

まったく夢のような心持で、森垣さんは奥座敷の床の間にうやくしく飾ってある革の手箱のなかから彼の巻物を取り出して、それを先ずふところに押込み、ふだんから大切にしている法螺の貝をかゝえ込んで、自分の屋敷をぬけ出しました。夢のようだとは云つても、さすがに本性は狂いません。城下でむやみに吹きたてると大変だと思つたので、なるべく遠いところへ行つて吹くつもりで、明るい月のひかりをたよりに、一里あゆみ、二里

あゆみ、とう／＼城下から三里半ほど距れたところまで行き着くと、そこはもう山路でした。路の勝手はかねて知っているので、森垣さんはその山路をのぼって、中腹の平なところへ出ると、そこには小さい古い社やしうがあります。うしろには大木がしげり合っていますが、東南は開けていて、今夜の月を遮るようなものはありません。城の櫓も、城下の町も、城下の川も、夜露のなかにきら／＼と光ってみえます。それを遠くながめながら、森垣さんは社の縁に腰をおろしました。

「こゝなら些ちとぐらい吹いても、誰にも覺られることはあるまい。」

譜はもう暗記するほどに覚えているのですが、それでも念のためにその巻物を膝の上にひろげて、森垣さんは大きい法螺の貝を口にあてました。その時は、もう命はいらないほどに嬉しかったそうです。前に云った足柄山の新羅三郎と時秋とを一人で勤めるような形で、森垣さんはしずかに吹きはじめました。夜ではあり、山路ではあり、こゝらを滅多に通る者はありません。たまに登ってくる者があつたところで、それが何という譜を吹いているのか、とても素人に聞き分けられる筈はないので、森垣さんも多寡をく／＼っていました。

それでもやはり気が咎めるので、初めの中は努めて低く吹いていたのですが、月はいよ

く明るくなる、吹く人もだんく興に乗ってくる。森垣さんは我をわすれて、喉一ぱいに高くく吹き出すと、夜がおいくに更けて、世間も鎮まって来たので、その貝の音は三里半をへだてた城下まで遠くきこえました。

その晩は月がいゝので、殿様は城内で酒宴を催していました。もう夜がふけたからと云つて席を起とうとしたときに、彼の貝の音がきこえたので、殿様も耳をかたむけました。家来達も顔を見合せました。幕末で世間がなんとなく騒がしくなっていました、まさかに隣国から不意に攻めよせて来ようとは思われないので、今ごろ何者が貝をふくのかと、いずれも不思議に思いました。家来達がすぐに櫓にかけ上つて、貝の音のきこえる方角を聞きさだめると、それは城下から三里あまりを隔てゝいる山の方角であることが判りました。なんにもせよ、夜陰に及んで妄りに貝をふきたてゝ城下をさわがす曲^{くせもの}者は、すぐ召捕れという下知があつたところへ、家老のなにがしが俄に殿の御前へ出て、容易ならぬことを言上しました。

「唯今きこえまする貝の音は一通りの音色ともおぼえませぬ。」

勿論、それが落城の譜であるか何うかは確かに判らなかつたのですが、さすがは家老でも勤めている人だけに、それが尋常の貝の音ではないことだけは覺つたとみえたのです。

扱そうになると、騒ぎはいよ／＼大きくなつて、召捕の人数がすぐに駆け向かうことになりました。

そんなことゝは些^{ちつ}とも知らない森垣さんは、吹くだけ吹いて満足して、年来の胸のかたまりが初めて解けたような心持で、足も軽く戻つて来る途中、召捕の人数に出逢いました。貝を持つているのが証拠で、なんとも云いぬけることが出来ず、森垣さんはその場から城内へ引つ立てられました。これはしまったと、森垣さんももう覚悟をきめたのですが、それでも途中で気がついて、ふところに忍ばせてある落城の譜の一卷を竊^{そつ}と路ばたの川のなかへ投げ込みました。夜のことで、幸いに誰にも覺られず、殊にそこは山川の流れがうず巻いて、深い淵のようになっていた所であつたので、巻物は忽ちに底ふかく沈んでしまいました。

三

城内へ引つ立てられて、森垣さんは嚴重の吟味をうけましたが、月のよいのに浮かれて山へのぼり、低く吹いているつもりの貝の音が次第に高くなつて、お城の内外をさわがし

たる罪は重々おそれ入りましたと申立てたばかりで、落城の譜のことはなんにも云いませんでした。家老はどうも普通の貝の音でないと云うのですが、所詮は素人で、それがなんの譜であるかと云うことは確かに判りません。もとく秘曲のことですから、ほかに知っている者のあろう筈はありません。もしそれが落城の譜であると知れたら、どんな重い仕置をうけるか判らなかつたのですが、何分にも無証拠ですから、森垣さんはどうく強情を張り通してしまいました。それでも唯では済みません。夜中みだりに貝を吹きたて、城下をさわがしたという廉で、お役御免のうえに追放を申渡されました。

森垣さんは飛んだことをしたと今更後悔しましたが、どうにも仕方がない。それでも独り身の気安さに、ふだんから親くしている人達から内証で恵んでくれた饒別の金をふところにして、兎にかくも江戸へ出て来たというわけです。落城の譜が祟って森垣さん自身が落城することになったのも、なにかの因縁かも知れません。

「いや、一生の不覚、面目次第もござらぬ。」と、森垣さんも額を撫でていました。

こう判つてみると、わたくしも気の毒になりました。屋敷をしくじつたと云つても、別に悪いことをしたと云うのでもない。この先、いつまでも浪人しているわけにも行くまいから、なんとか身の立つようにしてあげたいと思つてだんく相談すると、森垣さんは再

び武家奉公をする気はないという。しかしこの人は字をよく書くので、手習の師匠でもはじめは何うだろうと云うことになりました。幸いわたくしの町内に森垣さんという手習の師匠があつて、六七十人の弟子を教えていましたが、これはもう老人、先年その娘のお政というのに婿を取ったのですが、折合がわるくて離縁になり、二度目の婿はまだ決らないので、娘は二十六になるまで独身でいる。こゝへ世話をしたら双方の都合もよからうと、わたくしが例のお世話焼きでこつちへも勧め、あつちをも説きつけて、この縁談は好い塩配にまとまりました。森垣さんはそれ以来、本姓の内田をすてゝ養家の苗字を名乗ることになったのです。

「朝鮮軍記の講釈で、小早川隆景が貝を吹く件くだりをきいている時には、自分のむかしが思い出されて、もう一度貝をふく身になりたいと思いましたが、それはその時だけのことで、武家奉公はもう嫌です。まったく今の身の方が気楽です。」と、その後に森垣さんはしみ／＼と云いました。

そういう関係から森垣さんとは特別に近しく附合つて、今日では先方は金持、こちらは貧乏人ですが、相変らず仲よくしているわけです。わたくしは世話ずきで、むかしから色々の人の世話もしましたが、森垣さんのような履歴を持つているのは、まあ変った方です。

ね。

森垣さんのお話はこれぎりですが、この法螺の貝について別に可笑しいお話があります。それはある与力のわかい人が組頭の屋敷へ逢いに行った時のことです。御承知でもありませんが、旗本でも御家人でも、その支配頭や組頭には毎月幾度という面会日があつて、それをお逢いの日といいます。組下のもので何か云い立てることがあるものは、その面会日にたずねて行くことになつていますが、ほかに云い立てることはありません、なにかの芸を云い立てゝ役附にして貰うように頼みに行くのです。定めてうるさいことだろうと思われませんが、自分の組内から役附のものが沢山出るのはその組頭の名誉になるので、組頭は自分の組下の者にむかつて何か申立てると催促するくらいで、面会日にたずねて行けば、よろこんで逢つてくれたそうです。

そこで、その与力は組がしらの屋敷に逢いに行つたのです。こう云うことを頼みに行くのは、いずれも若い人ですから、組頭のまえに出てやゝ臆した形で、小声で物を云つていました。

「して、お手前の申立ては。」と、組頭が訊きました。

「手前は貝をつかまつります。」

組頭は老人で、すこしく耳が遠いところへ、こつちが小声で云っているので能く聴き取れない。二度も三度も訊きかえし、云い返して、両方がじれ込んで来たので、組頭は自分の耳を扇で指して、おれは耳が遠いから傍へ来て大きい声で云えと指図したので、若い与力はすゝみ出てまた云いました。

「手前は貝をつかまつる。」

「なに。」と組頭は首をかしげた。

まだ判らないらしいので、与力は顔を突き出して怒鳴りました。

「手前は法螺をふく。」

「馬鹿。」

与力はいきなりにその横鬢を扇でぴしやりと撲ぶたれました。撲たれた方はびっくりして、いると、撲った方は苦り切つて叱りつけました。

「たわけた奴だ。帰れ、帰れ。」

相手が上役だから何うすることも出来ない。ぶたれた上に叱られて、若い与力は烟けむにまかれて早々に帰りました。すると、その晩になって、組がしらから使が来て、なにがしにもう一度逢いたいから来てくれと云うのです。今度行ったらどんな目に逢うかと思ったの

ですが、上役からわざ／＼の使ですから断るわけにも行かないので、内心びく／＼もので出かけて行くと、昼間とは大違いで、組頭はにこ／＼しながら出て来ました。

「いや、先刻は気の毒。どうも年をとると一徹になつてな。はゝゝゝゝ。」

だん／＼聴いてみると、この組がしらの老人、ほらを吹くと云つたのを、俗に所謂ほらを吹くの意味に解釈して、大風呂敷をひろげると云うことゝ一図に思い込んでしまったのでした。武士は法螺をふくとは云わない、貝を吹くとか、貝をつかまつるとか云うのが当然で、その与力も初めはそう云つたのですが、相手にいつまでも通じないらしいので、世話に砕いて「ほらを吹く」と云つたのが間違いの基でした。役附を願うには何かの芸を申立てなければならぬが、その申立ての一芸が駄法螺を吹くと云うのでは、あまりに人を馬鹿にしている、怪しからん奴だと組頭も一時は立腹したのですが、あとになってから流石にそれと気がついて、わざ／＼使を遣つて呼びよせて、あらためてその挨拶に及んだわけでした。

組がしらも気の毒に思つて、特別の推挙をしてくれたのでしょう、その与力は念願成就、間もなく貝の役を仰せ附かることになりました。それを聞きつたえて若い人たちは、「あいつは旨いことをした。やつぱり人間は、ほらをふくに限る。」と笑つたそうです。なん

だか作り話のようですが、これはまったくの実録ですよ。

老人の話が丁度こゝまで来たときに、表の門のあく音がして三四人の跽音がきこえた。女や子供の声もきこえた。躑躅のお客がいよく帰って来たらしい。わたしはそれと入れちがいに席を起つことにした。

権十郎の芝居

一

これも何かの因縁かも知れない。わたしは去年の震災に家を焼かれて、目白に逃れ、麻布に移って、更にこの三月から大久保百人町に住むことになった。大久保は三浦老人が久しく住んでいたところで、わたしが屢こゝに老人の家をたずねたことは、読者もよく知っている筈である。

老人は已にこの世にいない人であるが、その当時にくらべると、大久保の土地の姿もまったく変った。停車場の位置もむかしとは変ったらしい。そのころ繁昌した躑躅園は十余年前から^{すた}廃れてしまつて、つゝじの大部分は日比谷公園に移されたとか聞いている。わたしが今住んでいる横町に一軒の大きい植木屋が残っているが、それはむかしの躑躅園の一つであるということを土地の人から聞かされた。してみると、三浦老人の旧宅もこゝから余り遠いところではなかった筈であるが、今日ではまるで見当が付かなくなった。老人の

歿後、わたしは滅多にこの辺へ足を向けたことがないので、こゝらの土地がいつの間にもどう変つたのか些ちつともわからない。老人の宅はむかしの百人組同心の組屋敷を修繕したもので、そこには杉の生垣に囲まれた家が幾軒もつゞいていたのを明かに記憶しているが、今日その番地の辺をたずねても杉の生垣などは一向に見あたらない。あたりにはすべて当世風の新しい住宅や商店ばかりが建ちつゞいている。町が発展するにしたがつて、それらの古い建物はだん／＼に取毀されてしまったのであろう。

昔話——それを語った人も、その人の家も、みな此世から消え失せてしまつて、それを聴いていた其当時の青年が今やこゝに移り住むことになつたのである。俯仰今昔の感に堪えないとはまったく此事で、この物語の原稿をかきながらも、わたしは時々ペンを休めて色々の追憶に耽ることがある。むかしの名残で、今でもこゝらには躑躅が多い。わたしの庭にも沢山に咲いている。その紅い花が雨にぬれているのを眺めながら、今日もその続稿をかきはじめると、むかしの大久保があり／＼と眼のまえに浮んでくる。

いつもの八畳の座敷で、老人と青年とが向い合っている。老人は「権十郎の芝居」という昔話をしているのであつた。

あなたは芝居のことを調べていらつしやるようですから、今のことは勿論、むかしのことも好く御存じでしょうが、江戸時代の芝居小屋というものは実に穢い。今日の場末の小劇場だつて昔にくらべれば遙かに立派なものです。それでもその当時は、三芝居だとか檜舞台だとか云つて、むやみに有難がつていたもので、今から考えると可笑おかしいくらい。なにしろ、芝居なぞというものは町人や職人が見るもので、所謂知識階級の人たちは立ち寄らないことになつていたのですから、今日とは万事が違います。

それでは学者や侍は芝居を一切見物しないかと云うと、そうではない。芝居の好きな人は矢張り覗きに行くのですが、まったく文字通りに「覗き」に行くので、大手をふつて乗り込むわけには行きません。勿論、武家法度はつとのうちにも武士は歌舞伎を見るべからずという個条はないようですが、それでも自然にそういう習慣が出来てしまつて、武士は先ずそういう場所へ立寄らないことになつてゐる。一時はその習慣もよほど廃れかゝつていたのですが、御承知の通り、安政四年四月十四日、三丁目の森田座で天竺徳兵衛の狂言を演じている最中に、棧敷に見物していた肥後の侍が、たとい狂言とはいえ、子として親の首を打つということがあろうかというので、俄に逆上して棧敷を飛び降り、舞台にいる天竺徳兵衛の市蔵に斬つてかゝつたという大騒ぎ。その以来、侍の芝居見物ということが又やか

ましくなりまして、それまでは大小をさしたまゝで芝居小屋へ這入ることも出来たのですが、以来は大小をさして木戸をくぐることに堅く無用、腰の物はかならず芝居茶屋にあずけて行くことに触れ渡されてしまいました。

それですから、侍が芝居を見るときには、大小を茶屋にあずけて、丸腰で這入らなければならぬ。つまり吉原へ遊びに行くのと同じことになったわけですから、物堅い屋敷では藩中の芝居見物をやかましく云う。江戸の侍もおのずと遠慮勝になる。それでもやつぱり芝居見物をやめられないと云う熱心家は、芝居茶屋に大小をあずけ、羽織もあずけ、そこで縞物の羽織などに着かえるものもある。用心のいゝのは、身ぐるみ着かえてしまつて、双子の半纏ふたこなどを引っかけて、手拭を米屋かぶりなどにして土間の隅の方で竊そつと見物しているものもある。いずれにしても、おなじ錢を払いながら小さく見物している傾きがある。どこへ行つても威張っている侍が、芝居へくると遠慮をしているというのも面白いわけでした。

前置がちつと長くなりましたが、その侍の芝居見物のときのお話です。市ヶ谷の月桂寺のそばに藤崎余一郎という人がありました。二百俵ほど取っていた組与力で、年はまだ二十一、阿母おつかさんと中ちゆうげん間と下女と四人暮しで、先ず無事に御役をつとめていたのですが、

この人に一つの道楽がある。それは例の芝居好きで、どこの座が最良だとか、どの俳優が最良だとか云うのでなく、どこの芝居でも替り目ごとに覗きたいというのだから大変です。ほかの小遣いはなるたけ儉約して、みんな猿若町へ運んでしまふ。侍としてはあまり好い道楽ではありません。いつぞやお話をした桐畑の太夫——あれよりはずっと優しけれども、やはり世間からは褒められない方です。

それでも阿母おつかさんは案外に捌けた人で、いくら侍でも若いものには何かの道楽がある。

女狂いよりは芝居道楽の方がまだ始末がいゝと云つたようなわけで、さのみにやかましく云いませんでしたから、本人は大手をふつて屋敷を出てゆく。そのうちに一つの事件が起しつた。

来きした。というのは、文久二年の市村座の五月狂言は「菖蒲しやうぶ合あ仇あだ討うち講こう談だん」で、

合あつぽう邦くわヶが辻つじに亀山の仇討を綴じあわせたもの。俳優やくしやは関三せきさんに団蔵、糸三郎、それに売

出しの芝翫、権十郎、羽左衛門というような若手が加わっているのだから、馬鹿に人氣が好い。二番目は堀川の猿まわしで、芝翫の与次郎、糸三郎のおしゆん、羽左衛門の伝兵衛、おつきあいに関三と団蔵と権十郎の三人が掛取りを勤めるといふのですから、これだけでも立派な呼び物になります。その辻番附をみただけでも、藤崎さんはもうぞく／＼して初日を待っていました。

なんでも初日から五六日目の五月十五日であつたそうです。藤崎さんは例の通りに猿若町へ出かけて行きました。さつきも申す通り、家から着がえを抱えて行く人もあり、前に芝居町の近所の知人の家へあずけて置いて、そこで着かえて行く人もありましたが、藤崎さんはそれほどのこともしないで、やはり普通の帷子かたびらをきて、大小に雪踏せったばきという袴え、しかし袴は着けていません。茶屋に羽織と大小をあずけて、着ながしの丸腰で木戸を這入る。兎も角も武家である上に、毎々のおなじみですから茶屋でも粗略には扱います。若い衆に送られて、藤崎さんは土間のお客になりました。

たつた一人の見物ですから、藤崎さんは無論に割込みです。そのころの平土間一枀は七人詰ですから、ほかに六人の見物がいる。たとい丸腰でも、髪のかい方や風俗でそれが武家か町人か十分に判りますから、おなじ枀の人たちも藤崎さんに相当の敬意を払って、なるだけ楽に坐らせてくれました。ほかの六人も一組ではありません、四人とふたりの二組で、その一組は町家の若夫婦と、その妹らしい十六七の娘と、近所の人かと思われる二十一二の男、ほかの一組は職人らしい二人連でした。この二組はしきりに酒をのみながら見物している。藤崎さんも少しは飲みました。

いつの代の見物人にも俳優やくしやの好き嫌いはありますが、とりわけて昔はこの好き嫌いが

烈しかったようで、自分の鼯眞俳優は親子兄弟のように可愛がる。自分の嫌いな俳優は仇のように憎がるというわけで、俳優の鼯眞争いから飛んでもない喧嘩や仲違たがいを生じることも屢ありました。ところで、この藤崎さんは河原崎権十郎が嫌いでした。権十郎は家柄がいゝのと、年が若くて男前がいゝのとで、御殿女中や若い娘達には人氣があつて「権ちゃん、権ちゃん」と頻りに騒がれていたが、見巧みこう者連のあいだには余り評判がよくなかつた。藤崎さんも年の割には眼が肥えているから、どうも権十郎を好かない。いや、好かないのを通り越して、あんな俳優は嫌いだと不断から云つていくくらいでした。

その権十郎が今度の狂言では合がつぽう邦と立場たてばの太平次をするのですから、権ちゃん鼯眞は大漚れですが、藤崎さんは少し納まりません。権十郎が舞台へ出るたびに、顔をしかめて舌打をしていましたが、仕舞にはだんゝに夢中になつて、口のうちに、「あゝまずいな、まずいな。下手な奴だな。この大根め」などと云うようになった。それが同じ枡の人たちの耳に這入ると、四人連れのうちの若いおかみさんと妹娘とが顔の色を悪くしました。この女たちは大の権ちゃん鼯眞であつたのです。そのとなりに坐つていて、権十郎はまずいの、下手だのとむやみに罵っているのだから堪りません。おかみさんも仕舞には鼯こめかみ鼯こめかみに青い筋をうねらせて、自分の亭主にさゝやくと、めん鶏勧めて雄鶏が時を作つたのか、そ

れとも亭主もさつきから癪に障っていたのか、藤崎さんにむかつて「狂言中はおしずかに願います。」と咎めるように云いました。

藤崎さんも逆らわずに、一旦はおとなしく黙ってしまったのですが、少し経つと又夢中になつて「まずいな、まずいな。」と口のうちに繰返す。そのうちに幕がしまると、その亭主は藤崎さんの方へ向き直つて、切口上で訊きました。

「あなたは先程から頻りに山崎屋をまずいの、下手だの、大根だのと仰しやつておいで、ございましたが、どう云うところがお氣に召さないのでございますか。」

前にも申す通り、その当時の鼯鼠というものは今日とはまた息込みが違つていて、たといその俳優やくしやに一面識が無くとも、自分が蔭ながら鼯鼠している以上、それを悪く云う奴等は自分のかたきも同様に心得ている時節ですから、この男も眼の色をかえて藤崎さんを詰問したわけです。こういう相手は好い加減にあしらつて置けばいゝのですが、藤崎さんも年がわかい、おまけに芝居氣ちがいと来ている。まだその上に、町人のくせに武士に向つて食つてかゝるとは怪しからん奴だという肚もある。かた／＼我慢が出来なかつたのみえて、これも向き直つて答弁をはじめました。むかしの芝居は幕間まくあいが長いから、こんな討論会にはおあつらえ向きです。

権十郎の芸がまずいか、拙くないか、いつまで云い合っていたところで、所詮は水かけ論に過ぎないのですが、両方が意地になって云い募りました。ばか／＼しいと云ってしまえばそれ迄ですが、この場合、両方ともに一生懸命です。相手の連の男も加勢に出て、藤崎さんを云い籠めようとする。おかみさんや妹娘までが泣声を出して食ってかゝる。近所となりの土間にいる人達もびつくりして眺めている。なにしろ敵は大勢ですから、藤崎さんもなか／＼の苦戦になりました。

ほかの二人づれの職人はさつきから黙って聴いていましたが、両方の議論がいつまでも果しがないので、その一人が横合から口を出しました。

「もし、皆さん。もう好い加減にしたらどうです。いつまで云い会ったところで、どうで決着は付きやありませんや。第一、御近所の方達も御迷惑でしょうから。」

藤崎さんは返事もしませんでした、一方の相手はさすがに町人だけに、のぼせ切っているなかでも慌てゝ挨拶しました。

「いや、どうも相済みません。まったく御近所迷惑で、申訳もございません。お聴きの通りのわけで、このお方があんまり判らないことを仰しやるもんですから……。」

「うつつちゃってお置きなせえ。おまえさんが相手になるからいけねえ。」と、もう一人の

職人が云いました。「山崎屋がほんとうに下手か上手か、ぼんくらに判るものか。」

「そうさな。」と、前の一人が又云いました。「あんまりからかっていると、仕舞には舞台へ飛びあがつて、太平次にでも咬くいつくかも知れねえ。あぶねえ、あぶねえ。もうおよしなせえ。」

職人ふたりは藤崎さんを横目に視ながらせゝら笑いました。

二

この職人たちも権十郎鼻肩とみえます。さつきから黙って聴いていたのですが、藤崎さんが飽までも強情を張って、意地にかゝって権十郎をわるく云うので、ふたりももう我慢が出来なくなつて、四人連の方の助太刀に出て来たらしい。口では仲裁するように云っているが、その実は藤崎さんの方へ突つかかっている。殊に舞台へ飛びあがつて太平次にくらい付くなどというのは、例の肥後の侍の一件をあて付けたもので、藤崎さんを武家とみでの悪口でしょう。それを聞いて、藤崎さんもむつとしました。

いくら相手が町人や職人でも、一桝のうちで六人がみな敵では藤崎さんも困ります。町

人たちの方では味方が殖えたので、いよく威勢がよくなりました。

「まったくでございますね。」と、亭主の男もせゝら笑いました。「なにしろ芝居とお能とは違いますからね。一年に一度ぐらい御覧になつたんじやあ、ほんとうの芸は判りませんよ。」

「判らなければ判らないで、おとなしく見物していращしやれば好いんだけれど……。」「と、若いおかみさんも厭^{いや}に笑いました。「これでもわたし達は肩揚のおりないうちから、替り目ごとに欠さずに見物しているんですからね。」

かわる／＼に藤崎さんを嘲弄するようなことを云つて、しまいには何がなしに声をあげてどつと笑いました。藤崎さんはいよく癩に障つた。もうこの上はこんな奴等と問答無益、片っ端から花道へひきずり出して、柔術の腕前をみせてやろうかとも思つたのですが、どうしても、そんなことは出来ない。侍が芝居見物にくる、単にそれだけならば兎もかくも黙許されていますが、こゝで何かの事件をひき起したら大變、どんなお咎めを蒙るかも知れない。自分の家にも疵が付かないとは限らない。いくら残念でも場所が悪い。藤崎さんは胸をさすつて堪えているより外はありません。そこへ好い塩梅に茶屋の若い衆が来てくれました。

若い衆もさつきから此のいきさつを知っているのです、いつまでも咬み合わして置いて何かの間違いが出来てはならないと思つたのでしょう。藤崎さんを宥めるように連れ出して、別の土間へ引越させることにしました。ほかの割込みのお客と入れかえたのです。藤崎さんもこんなところにいるのは面白くないので、素直に承知して引越しましたが、今度の場所は今までよりも三四間あとのところで、喧嘩相手のふた組は眼のまえに見えます。その六人が時々はこちらを振返つて、なにか話しながら笑っている。屹度おれの悪口を云っているに相違ないと思うと、藤崎さんはますます不愉快を感じたのですが、根が芝居好きですから中途から帰るのも残り惜しいので、まあ我慢して二番目の猿まわしまで見物してしまつたのです。

芝居を出たのは彼^{かれ}是れ五つ（午後八時）過ぎで、贅沢な人は茶屋で夜食を食つて帰るものもありますが、大抵は浅草の広小路辺まで出て来て、そこから何か食つて帰ることになつてゐる。御承知の奴^{やつこ}うなぎ、あすこの鰻めしが六百文、大どんぶりでなか／＼立派でしたから、芝居がえりの人達はあすこに寄つて行くのが多い。藤崎さんもその奴^{やつこ}うなぎの二階で大どんぶりを抱え込んでゐると、少しおくれて這入つて来たのが喧嘩相手の四人で、職人は連でないから途中で別れたのでしょう。町人夫婦と妹娘と、もう一人の男とが繋が

つて来たのです。二階は芝居帰りの客がこみ合っているのです、どちらの席も余程距れていました、藤崎さんの方ではすぐに気がつきました。

きょうの芝居は合邦ヶ辻と亀山と、かたき討の狂言を二膳込みで見せられたせい、藤崎さんの頭にも「かたき討」という考えが余ほど強くしみ込んでいたらしく、こゝで彼の四人連に再び出逢ったのは、自分の尋ねる仇にめぐり逢ったようにも思われたのです。たんと飲まないが、藤崎さんの膳のまえには徳利が二本ならんでいる。顔もぼうと紅くなっていました。

そのうちに、彼の四人連もこつちを見つけたとみえて、のび上って覗きながら又なにか囁きはじめたようです。そうして、時々には笑い声もきこえます。

「怪しからん奴等だ。」と、藤崎さんは鰻を食いながら考えていました。かえり討やら仇討やら、色々の殺伐な舞台面がその眼のさきに浮び出しました。

早々に飯を食ってしまった、藤崎さんはこゝを出ました。かの四人連が下谷の池の端から来た客だということを芝居茶屋の若い衆から聞いているので、藤崎さんは先廻りをして広徳寺前のあたりにうろくしていると、この頃の天気癖で細かい雨がぼつ／＼降って来ました。今と違って、あの辺は寺町ですから夜はさびしい。藤崎さんはある寺の門の下に

這入つて、雨宿りでもしているようにたゞずんでいると、時々提灯をつけた人が通ります。その光をたよりに、来る人の姿を一々あらためてみると、やがて三四人の笑い声がきこえました。それが彼の四人づれの声であることをすぐに覺つて、藤崎さんは手拭で顔をツツみました。

人は四人、提灯は一つ。それがだん／＼に近寄つてくるのを二三間やり過して置いて、藤崎さんはうしろから足早に附けて行つたかと思うと、亭主らしい男はうしろ袈裟に斬られて倒れました。わつと云つて逃げようとするおかみさんも、つゞいて其場に斬り倒されました。連の男と妹娘は、人殺し人殺しと怒鳴りながら、跣足になつて前とうしろへ逃げて行く。どつちを追おうかと少しかんがえているうちに、その騒ぎを聞きつけて、近所の珠数屋が戸をあけて、これも人殺し人殺しと怒鳴り立てる。ほかからも人のかけてくる足音が聞える。藤崎さんも我身があやういと思つたので、これも一目散に逃げてしまいました。

下谷から本郷、本郷から小石川へ出て、水戸様の屋敷前、そこに松の木のある番所があつて、俗に磯馴そなれの番所といいます。その番所前も無事に通り越して、もう安心だと思つと、藤崎さんは俄にがっかりしたような心持になりました。だんだんに強くなつてくる雨

に濡れながら、しずかに歩いているうちに、後悔の念が胸先を衝きあげるように湧いて来ました。

「おれは馬鹿なことをした。」

当座の口論や一分の意趣で刃傷沙汰に及ぶことはめずらしくない。しかし仮にも武士たるものが、歌舞伎役者の上手下手をあらそつて、町人の相手をふたりまでも手にかけることは、まことに類の少い出来事で、いくら仇討の芝居を見たからと云つて、とんだ仇討をしてしまったものです。藤崎さんも今となつては後悔のほかはありません。万一これが露顕しては恥の上塗りであるから、いつそ今のうちに切腹しようかとも思つたのですが、先ず兎もかくも家へ歸つて、母にもそのわけを話して暇乞いをした上で、しずかに最期を遂げても遅くはあるまいと思ひ直して、夜のふけるころに市ヶ谷の屋敷へ歸つて来ました。

奉公人どもを先ず寝かしてしまつて、藤崎さんは今夜の一件をそつと話しますと、阿母^{おつか}さんも一旦はおどろきましたが、はやまつて無暗に死んではならない、組頭によくその事情を申立て、生きるも死ぬもその指図を待つがよかうと云うことになつて、その晩はそのまゝ寝てしまいました。夜が明けてから藤崎さんは組頭の屋敷へ行つて、一切のことを正直に申立てると、組がしらも顔をしかめて考えていました。

当人に腹を切らせてしまえばそれ迄のことですが、組頭としては成るべく組下の者を殺したくないのが人情です。殊に事件が事件ですから、そんなことが表向きになると、当人ばかりか組頭の身の上にも何かの飛ばつちりが降りかゝって来ないとも限りません。そこで組頭は藤崎さんに意見して、先ず当分は素知らぬ顔をして成行を窺っている。いよく詮議が嚴重になつて、お前のからだに火が付きそうになつたらば、おれが内証で教えてやるから、その時に腹を切れ。かならず慌てゝはならないと、くれ／＼も意見して帰しました。

母の意見、組頭の意見で、藤崎さんも先ず死ぬのを思いとまつて、内心びく／＼もので幾日を送っていました。斬られたのは下谷の紙屋の若夫婦で、娘はおかみさんの妹、連の男は近所の下駄屋の亭主だつたそうです。斬られた夫婦は即死、ほかの二人は運よく逃れたので、町方でもこの二人について色々詮議をしました。何分にも暗いのと、不意の出来事に度をうしなつていたので、何がなにやら一向わからないと云うのです。それでも芝居の喧嘩の一件が町方の耳に這入つて、芝居茶屋の方を一応吟味したのですが、茶屋でも何かのかゝり合を恐れたとみえて、そのお武家は初めてのお客であるから何処の人だか知らないといひ切つてしまつたので、まるで手がかりがありません。第一、その侍が果し

て斬ったのか、それとも此頃流行る辻斬のたぐいか、それすら確かに見きわめは付かないので、紙屋の夫婦はとう／＼殺され損と云う事になってしまいました。

それを聞いて、藤崎さんも安心しました。組頭もほっとしたそうです。それに懲りて、藤崎さんは好きな芝居を一生見ないことに決めまして、組頭や阿母おつかさんの前でも固く誓ったと云うことです。それは初めにも申した通り、文久二年の出来事で、それから六年目が慶応四年、すなわち明治元年で、江戸城あけ渡しから上野の彰義隊一件、江戸中は引っくり返るような騒ぎになりました。そのとき藤崎さんは彰義隊の一人となって、上野に立籠りました。六年前に死ぬべき命を今日まで無事に生きながらえたのであるから、こゝで徳川家のために死のうという決心です。

官軍がなぜ彰義隊を打ちやって置くのか、今に戦争がはじまるに相違ないと江戸中에서도頻りにその噂をしていました。わたくしも下谷に住んでいましたから、前々から荷作りをして、さあと云ったらすぐに立退く用意をしていたくらいです。そのうちに形勢がだん／＼切迫して来て、いよ／＼明日あすか明後日あさってには火蓋が切られるだろうという五月十四日の午前ひるから、藤崎さんはどこかへ出て行って、日が暮れても帰って来ません。

「あいつ気怯れがして脱走したかな。」

隊の方ではそんな噂をしていると、夜が更けてから柵を乗り越して帰って来ました。聞いてみると、猿若町の芝居を見て来たというのです。こんな騒ぎの最中でも、猿若町の市村座と守田座はやはり五月の芝居を興行していて、市村座は例の権十郎、家橘、田之助、仲藏などという顔ぶれで、一番目は「八犬伝」中幕は田之助が女形で「大晏寺堤」の春藤次郎右衛門をする。二番目は家橘——元の羽左衛門です——が「伊勢音頭」の貢をするというので、なか／＼評判は良かったのですが、時節柄ですから何うも客足が付きませんでした。藤崎さんは上野に立籠つていながら、その噂を聴いてかんがえました。

「一生の見納めだ。好きな芝居をもう一度みて死のう。」

隊をぬけ出して市村座見物にゆくと、なるほど景気はよくない。併しこゝで案外であったのは、あれほど嫌いな河原崎権十郎が八犬伝の犬山道節をつとめて、藤崎さんをひどく感心させたことでした。しばらく見ないうちに、権十郎はめつきり腕をあげていました。これほどの俳優やくしやを下手だの、大根だのと罵つたのを、藤崎さんは今更恥しく思いました。やっぱり紙屋の夫婦の眼は高い。権十郎は偉い。そう思うにつけても藤崎さんはいよく自分の昔が悔まれて、舞台を見ているうちに自然と涙がこぼれたそうです。そうして、権十郎と紙屋の夫婦への申訳に、どうしても討死をしなければすまないと、覚悟ほぞの臍をかた

めたそうです。

そのあくる日は官軍の総攻撃で、その戦いのことは改めて申すまでもありません。藤崎さんは真先に進んで、一旦は薩州の兵を三橋のあたりまで追いまくりましたが、とう／＼黒門口で花々しく討死をしました。それが五月十五日、丁度彼の紙屋の夫婦を斬った日で、しかも七回忌の祥月命日にあたっていたと云うのも不思議です。

もう一つ変っているのは、藤崎さんの死骸のふところには市村座の絵番附を入れていたと云うことです。彰義隊の戦死者のふところに経文をまいていたのは沢山ありました。これは上野の寺内に立籠っていた為で、なるほど有りそうなことですが、芝居の番附を抱いていたのは藤崎さん一人でしょう。番附の捨てどころがないので、何ということなしに懷^ふ中へ捻じ込んで置いたのか、それとも最後まで芝居に未練があつたのか、いずれにしても江戸っ子らしい討死ですね。

河原崎権十郎は後に日本一の名優市川団十郎になりました。

春色梅ごよみ

一

思い出すと、そのころの大久保辺はひどく寂しかった。躑躅つじのひと盛りを過ぎると、まるで火の消えたように鎮まり返って、唯やかましく聞えるのはそらの田に啼く蛙の聲ばかりであった。往来のまん中にも大きな蛇のたが蜿くつていて、わたしは時々におどろかされたことを記憶している。幾度もいうようであるが、まったくこゝらは著しく変った。

それでも幾分か昔のおもかげが残っていて、今でも比較的に広い庭園や空地を持つている家では、一種の慰み半分に小さい野菜畑などを作って素人園芸を楽しんでいるのも少ない。わたしの家のあき地うちにも唐もろこしを栽うえてあって、このごろはよほど伸びた長い葉があさ風に青く乱れているのも、又おのずからなる野趣がないでもない。三浦老人の旧宅にも唐蜀黍とうもろこしが栽えてあって、秋の初めにたずねてゆくと、老人はその出来のいゝのを幾分か御自慢の気味で、わたしを畑へ案内して見せたこともあった。焼いて食わせてくれ

たこともあった。家へのみやげにと云つて大きいのを七八本も抱えさせられて、少々有難迷惑に感じたこともあった。

それも今では懐しい思い出の一つとなつた。わたしはこのごろ自分の庭のあき地を徘徊して、朝に夕にめつきりと伸びてゆく唐もろこしの青い姿を見るたびに、三浦老人その人のすがたや、その当時はまだ青二才であつた自分の若い姿などが見かえられて、今後更に二十余年を経過したらば、こゝらのありさまも又どんなに変化するかなどと云うことも考えさせられる。

これから紹介するのは、今から二十幾年前の秋、その唐もろこしの御馳走になりながら、縁さきにアンペラの座蒲団をしいて、三浦老人とむかい合つていたときに聴かされた昔話の一つである。その頃に比べると、こゝらの藪蚊はよほど減つた。それだけは土地繁昌のおかげである。

老人は語つた。

これはこゝから余り遠くないところのお話で、新宿の新屋敷——と云つても、あなた方にはお判りにならないかも知れませんが、つまり今日の千駄ヶ谷の一部を江戸時代には新

屋敷と唱えていました。そこには大名の下屋敷もある、旗本の屋敷もある。ほかに御家人の屋敷も沢山ありましたが、なんと云つても場末ですから随分さびしい。往来のところ／＼に草原がある、竹藪がある。うら手の方には田圃がみえる、田川が流れているという道具立ですから、大抵お察しく下さい。その六軒町というところに高松勘兵衛という二百俵取りの御家人が住んでいました。

いつぞやは御家人たちの内職のお話をしたことがありましたが、この人は槍をよく使うので近所の武家の子供たちを弟子にとっている。流儀は木下流——木下淡路守利常としつねという人が槍術の一流をはじめたので、それを木下流というのです。この人は内職でなく、もと／＼武芸が好きで、慾を離れて弟子を取立てゝいたのですから、人間は律儀一方で武士氣質の強い人、御新造はおみのさんと云つて夫婦のあいだに姉弟の子どもがある。姉さんはお近さんと云つて二十四、弟は勘次郎と云つて十八歳、そのまん中にまだひとり女の子があつたのですが、それは早くに死んだそうです。お父さんとつはまだ四十五六の勤め盛りですから、息子の部屋住みは当然でしたが、姉さんのお近さんはもう二十四にもなつてなぜ自分の家に居残っているかと云うと、これはこの春まで御奉公に出ていたからです。

武家の娘でも奉公に出ます。勿論、町人の家に奉公することはありませんが、自分の上

役の屋敷に奉公するのは珍しくありません。御家人のむすめが旗本屋敷に奉公するなどは幾らもありました。一つは行儀見習いの為で、高松のお近さんも十七の春から薙刀の出来るのを云い立てに、本郷追分の三島信濃守という四千石の旗本屋敷へ御奉公にあげられて、お嬢さま附となりました。旗本も四千石となると立派なもので、殆ど一種の大名のようなものです。大名はどんなに小さくとも大名だけの格式を守って行かなければならず、参覲交代もしなければなりませんから、内証はなか／＼苦しい。したがって、一万石や二万石ぐらいの木葉大名よりも、四千石五千石の旗本の方がその生活は却って豊なくらいでした。

三島の屋敷も評判の物堅い家風でした。高松さんもそれを知って自分の娘を奉公に出したのですが、まったく奥も表も行儀が正しく、武道の吟味が強い。お近さんはお嬢さまのお相手をして薙刀の稽古を励む。ほかの腰元たちも一緒になって薙刀や竹刀しな撃の稽古をする。まるで鏡山の芝居を観るようです。奥さまは勿論ですが、殿さまも時々奥へお入りになって、女どもの試合を御覧になるのですから、女たちも一層熱心に稽古をする。女でさえも其通りですから、まして男でこの屋敷に奉公するほどのものは、足軽仲間にいるまで竹刀の持ち様は確かに心得ているというわけで、まことに武張った屋敷でした。

「武家に奉公するものは武芸を怠つてはならぬ。まして今の時世であるから、なんどき何事が起らないとも限らぬ。男も女もその用心を忘れまいぞ。」

これが殿さまや奥さまの意見で、屋敷のもの一統へ常日頃から嚴重に触れ渡されているのです。お近さんという娘は子供のときからお父さんとうの仕付をうけていますから、こういう屋敷にはおあつらえ向きで、主人の首尾もよく、自分も満足して、忠義一図に幾年のあいだを勤め通して、薙刀や竹刀撃に娘ざかりの月日を送っていました。これはお近さんに限らず、御殿奉公をする者はみなそうでしたろうが、取りわけてこの屋敷は武芸専門というのですから、勤め向きも余計に骨が折れたろうと思われます。併しどの奉公人もそれを承知で住み込んだものばかりですから、別に苦勞とも思わなかつたのです。お近さんなどは宿下りで自分の家へ歸つたときに、それを自慢らしく両親に吹聴し、親たちも一緒になつて喜んでいたくらいでした。

それで済めば天下泰平、いや、些ちつとぐらいの騒動が起つても大丈夫であつたのですが、こゝに一つの事件がしゅつたい出来た。というのは、この屋敷のお嬢さまが病氣になつたのです。なにしろ殿さまも奥さまも前に云つたような氣風の人たちですから、どうも今時のわかい者は氣に入らない。したがつて、今日までに縁組の相談があつても、あんな柔弱な奴

のところへは嫁に遣れないとか、あんな不心得の人間を婿には出来ないとか、色々むずかしいことを云つて断つてしまうので、自然に縁遠い形になって、お嬢さまは二十一になるまで親の手許にいて、相変らず薙刀や竹刀撃の稽古をつづけている。そのうちに何という病気が判らない、その頃の詞で云うとぶら／＼病ことばというのに罹つて、どうも気分がすぐれない、顔の色もよくない。どつと寝付くほどの大病でもないが、なにしろ半病人のすがたで、薙刀のお稽古もこの頃は休み勝になりました。

「これは静かなところでゆる／＼と御養生遊ばすに限ります。」

医者もこう勧め、両親もそう思つて、お嬢さまはしばらく下屋敷の方に出養生ということになりました。大きい旗本はみな下屋敷を持っています。三島家の下屋敷は雑司ヶ谷にありました。お近さんもお嬢さまのお供をして雑司ヶ谷へゆくことになったのは、安政四年の桜の咲く頃で、そこらの畑に菜の花が一面に咲いているのをお嬢さまは珍しがったということでした。

どこでも下屋敷は地所を沢山に取っていますから庭も広い、空地も多い。庭には桜や山吹が咲きみだれている。天気の良い日にはお嬢さまも庭に出て、木の陰や池のまわりなどをそぞろ歩きして、すこしは気分も晴れやかになるだろうと思いの外、うららかな日に庭へ出て、あたゝかい春風に吹かれていると、却って頭が重くなるとか云って、お嬢様はめったに外へも出ない。たゞ垂れ籠めて鬱陶しように春の日永を暮している。殊に花時の癖で、今年の春も雨が多い。そばに附いている者までが自然に気が滅入って、これもお嬢さま同様にごらく病にでもなりそうになって来ました。医者は三日目に一度ずつ見まわりに来てくれるが、お嬢さまは何うもはつきりしない。するとある日のことでした。きょうも朝から絹糸のような春雨が音も無しにしとくと降っている。お嬢さまは相変らず鬱陶しように黙っている。お近さんをはじめ、そばに控えている二三人の腰元もたゞぼんやりと黙っていました。

こんなときには琴を弾くとか、歌でも作るとか、なにか相当の日ぐらしもある筈ですが、屋敷の家風が例の通りですから、そんな方のことは誰もみな不得手です。屋敷奉公のものは世間を知らないから世間話の種もすくない。勿論、こゝでは芝居の噂などが出そうもない。たゞ詰らなそうに睨み合っているところへ、お仙という女中がお茶を運んで来ました。

お仙は始終この下屋敷の方に詰めているのです。

「どうも毎日降りまして、さぞ御退屈でいらせられましょう。」

みんなも退屈し切っているところなので、このお仙を相手にして色々の話をしているうちに、なにかの切っかけからお仙はそのころ流行の草双紙の話をはじめました。それは例の種^{たね}員の「しらぬ^{もの}ひ譚^{がたり}」で、どの人も生れてから殆ど一度も草双紙などを手に取ったこともない人達なので、その面白さに我を忘れて、皆うつとりと聴き惚れていました。

お嬢様もその草双紙の話がひどく御意に入ったとみえて、日が暮れてからも又その噂が出ました。

「仙をよんで、さっきの話のつゞきを聴いてはどうであらう。」

誰も故障をいう者はなくて、お仙はお嬢さまの前によび出されました。そうして、五つ（午後八時）の時計の鳴る頃まで、青柳春之助や鳥山秋作の話をしたのですが、それが病み付きになってしまつて、それからはお仙が毎日「しらぬひ譚」のお話をする役目をうけたまわるようになりました。お仙がどうしてこんな草双紙を読んでいたかというところ、この女は三島家の知行所から出て来た者ではなくて、下谷の方から——実はわたくしの家の近所のもので、この話もその女から聞いたのです。——奉公にあがっている者ですから、家

にいたときに草双紙も読んでいる。芝居もとき／＼には覗いている。そういうわけですから、例の「しらぬひ譚」も知っていて、測らずもそれがお役に立ったのです。

一体お仙はどんな風にその話をしたのか知りませんが、なにしろ聴く人たちの方は薙刀や竹刀のほかには今までなんにも知らなかった連中ばかりですから、初めて聴かされた草双紙の話が馬鹿に面白い。みんな口をあいて聴いているという始末。しかしお仙も「しらぬひ譚」を暗記しているわけでもないのですから、話に曖昧なところも出て来る。聴いている方では焦^{しれ}つたくなる。それが高じて、とう／＼その「しらぬひ譚」の草双紙を借りて読もうということになって、お仙がそのお使いを云い付かって、牛込辺のある貸本屋に入ることになりました。

どこの大名でも旗本でも下屋敷の方は取締りがずっと緩^{ゆる}やかで、下屋敷ではまあ何をしてもいゝと云うことになっていました。殊にそれがお嬢さまの気保養にもなると云うので、下屋敷をあずかっている侍達もその貸本屋の出入りを大目に見ていたらしいのです。くどくも云う通り、お嬢様をはじめ、お附の女たち一同は生れてから初めて草双紙などというものを手に取ったので、先ず第一に絵が面白い、本文も面白い。みんな夢中になって草双紙の話ばかりしている。貸本屋の方では好いお得意が出来たと思って、色々の草双紙を持

ち込んでくる。それでもまあ「田舎源氏」や何かのうちは好かったのですが、だん／＼進んで来て、人情本などを持ち込むようになる。先ず「娘節用」むすめせつようが序開きで、それから「春色梅ごよみ」「春色辰巳園」たつみのそのなどというものが皆んなの眼に這入って、お近さんまでが狂訓亭主人の名を識るようになると、若い女の多いこの下屋敷の奥には一種の春色が漲って来ました。今迄は半病人であつたお嬢さまの顔色も次第に生々して、とき／＼には笑い声もきこえる。このごろは貸本屋があまりに繁く出入りをするので、困ったものと内々は顔をしかめている侍たちも、それがたにお嬢さまの御病気がだん／＼によくなると云うのですから、押切つてそれを遮るわけにも行かないで、まあ黙つて観ているのでした。

そうして、夏も過ぎ、秋も過ぎましたが、お嬢さまはまだ本郷の屋敷へ戻ろうと云わない。お附の女中達も本郷へお使に行つたときには、好い加減の嘘をこしらえて、お嬢さまの御病気はまだほんとうに御本復にならないなどと云っている。本郷へ帰れば殿様や奥様の監視の下に又もや薙刀や竹刀をふり廻さなければならぬ。それよりも下屋敷に遊んでいて、夏の日永、秋の夜永に、狂訓亭主人の筆の綾をたどつて、丹次郎や米八の恋に泣いたり笑つたりしている方が面白いというわけで、武芸を忘れてはならぬという殿様や奥様

の教訓よりも、狂訓亭の狂訓の方が皆んなの身にしみ渡ってしまったのです。

そのなかでもその狂訓に強く感化されたのは、彼のお近さんでした。どうしたものか、この人が最も熱心な狂訓亭崇拜者になり切ってしまったて、読んでいるばかりでは堪能が出来なくなつたとみえて、わざ／＼薄葉うすようの紙を買つて来て、それを人情本所謂小本の型に切つて、原本をそのまゝ透き写しにすることになったのです。お近さんは手筋が好い、その器用と熱心とで根気よく丹念に一枚ずつ写して行つて、幾日かゝつたのか知りませんが、兎も角もその年の暮までに梅暦四編十二冊、しかも口絵から挿絵まで残らず綺麗に写しあげてしまつたそうです。今のお近さんの宝というのは、御奉公に出るときにお父さんとつから譲られた二字国俊——おそらく真物ほんものではあるまいと思われませんが——の短刀と、「春色梅ごよみ」十二冊の写本とで、この二つは身にも換えがたいと云うくらい大切なものでした。

「どうも困つたものだ。」と、下屋敷の侍達はいよく眉をひそめました。

いくら下屋敷だからと云つて、あまりに猥な不行儀なことが重なると、打つちやつて置くわけには行かない。殊に三島の屋敷は前にも申す通り、武道の吟味の強い家風ですから、そんなことが上屋敷の方へきこえると、こゝをあずかっている者どもの越度おちどにもなるので、

もう何とかしなければなるまいかと内々評定しているうちに、貸本屋の方ではいよく増長して、このごろは春色何とかいうもの以上に春色を写してあるらしい猥な書物をこつそりと持ち込んで来るのを発見したので、侍達ももう猶予していらなくなつて、貸本屋は出入りを差止められてしまいました。お仙もあやうく放逐されそうになつたが、これはお嬢さまのお声がかりで僅かに助かりました。

貸本屋の出入りが止まるとなると、お近さんの写本がいよく大切なものになつて、お近さんは内証でそれを読んで聞かせて皆んなを楽しませていました。——野にすてた笠に用あり水仙花、それならなくに水仙の、霜除けほどなる佗住居——こんな文句は皆んなも暗記してしまうほどになりました。そうしているうちに、こんなことが自然に上屋敷の方へ洩れたのか、或は侍たちも持て余して密告したのか、いずれにしてもお嬢様を下屋敷に置くのは宜しくないというので、病氣全快を口実に本郷の方へ引き戻されることになりました。それは翌年の二月のことで、丁度出代り時であるのでお近さんともう一人、お冬とかいう女中がお暇いとまになりました。下屋敷の方ではお仙がとう／＼放逐されてしまいました。普通の女中とは違つて、お近さんはお嬢さまのお嫁入りまでは御奉公する筈で、場合によつてはそれのお嫁入り先までお供するかも知れないくらいであつたのに、それが突然にお

暇になった。表向きはお人^{ひと}減^{へら}しというのであるが、どうも彼の貸本屋一件が祟りをなして、お近さんともう一人の女中がその主謀者と認められたらしいのです。それは彼のお仙の放逐をみても察しられます。

いつの代でもそうでしょうが、取分けてこの時代に主人が一旦暇をくれると云い出した以上、家来の方ではどうすることも出来ません。お近さんはおとなしくこの屋敷をさがりより外はないので、自分の荷物を取りまとめて新屋敷の親許へ帰りました。その葛籠^{つづら}の底には彼の「春色梅ごよみ」の写本が忍んでいました。

三

お父^{とつ}さんの高松さんは物堅い人物ですから、娘が突然に長の暇を申渡されたに就てすこしく不審をいただきました。一応はお近さんを詮議しました。

「どうも腑に落ちないところがある、奉公中に何かの越度^{おとど}でもあつたのではないか。」

「そんなことは決してござりません。」と、お近さんは堅く云い切りました。「時節柄、お人減しと申すことで、それは奥様からもよくお話がござりました。」

まったくこの時節柄であるから、諸屋敷で人減しをすることも無いとは云えない。殊に三島の屋敷のことであるから、武具馬具を調えるために他の物入りを儉約する、その結果が人減しとなる。そんなことも有りそうに思われるので、高松さんも娘の詮議は先ずそのくらいにして置きました。阿母さんおつかも正直な人ですから、別にわが子を疑うようなことなく、それで無事に済んでしまったのですが、それから三月四月と過ぎるうちに、お父さんの氣に入らないようなことが色々出来たのです。

高松さんの屋敷では槍を教えるので、毎日十四五人の弟子が通ってくる。そのなかで肩あげのある子供達が来たときには、お近さんはその稽古場を覗いても見ませんが、十八九から二十歳ぐらいの若い者が来ると、お近さんは出て行って何かの世話を焼く。時には冗談などを云うこともあるので、お父さんは苦い顔をして叱りました。

「稽古場へ女などが出てくるには及ばない。」

それでも矢はり出て来たり、覗きに来たりするので、その都度に高松さんは機嫌を悪くしました。ある時、久振りで薙刀を使わせてみると、まるで手のうちは乱れている。もとゝゝ薙刀を云い立てに奉公に出たくらいで、その後も幾年のあいだ、お嬢さまに附いて稽古を励んでいたというのに、これは又どうしたものだと高松さんも呆れてしまいました。

そればかりでなく万事が浮ついて、昔とはまるで別の人間のようにみえるので、お父さんはいよく機嫌を悪くしました。

「どうも飛んだことをした。こうと知ったら奉公などに出すのではなかった。」

高松さんは時々顔をしかめて、御新造に話すこともありましたが、そのうちに六月の末になる。旧暦の六月末ですから、土用のうちで暑さも強い。師匠によると土用休みをするのもあるが、高松さんは休まない。きょうも朝の稽古をしまつて、汗を拭きに裏手の井戸端へ出ました。場末の組屋敷ですから地面は広い。うらの方は畑になって矢はり唐蜀黍^{とうもろこし}などが栽えてある。その畑のなかに白地の単衣をきた女が忍ぶように立っている。それがお近さんであることは、高松さんにはすぐに判ったのですが、向うでは些^{ちっ}とも気が注かないで、何か一心に読み耽^ふっているらしい。以前ならばそのまゝに見過してしまつたのでしようが、此頃はひどく信用を墜しているお近さんがわざ／＼畑のなかへ出て、唐蜀黍のかげに隠れるようにして何か読んでいる。それがお父さんの注意をひいたので、高松さんは拔足^{そつ}をして竊^{そつ}とそのうしろへ廻つて行きました。

目を避け、人目をよけて、お近さんが唐蜀黍の畑のなかで一心に読んでいたのは例の写本の一冊でした。こんなものが両親の眼に止まつては大変ですから、お近さんは自分の葛^つ

籠ぐらの底ふかく秘めて置いて、人に見付からないようなところへ持ち出して、そつと読んでいる。そこを今朝は運悪くお父さんに見付けられたのです。

「これはなんだ。」

だしぬけにその本を取り上げられてしまったので、お近さんはもう何うすることも出来ない。しかし「春色梅ごよみ」という外題を見ただけでは、お父さんにもその内容は一向わからないのですから、お近さんも何とか頓智をめぐらして、巧く誤魔かしたいと思つたのですが、困つたことには本文ばかりでなく、男や女の挿絵が這入っている。それをみただけでも大抵は想像が付く筈です。お近さんも返事に支えておどくしてしていると、高松さんは娘の襟髪をつかみました。

「怪しからん奴だ。こんなものを何うして持っている。さあ、来い。」

内へ引摺つて来て、高松さんは嚴重に吟味をはじめました。お近さんは強情に黙つていますが、それでお父さんが免す筈がない。弟の勘次郎を呼んで、姉の葛籠をあらためて見ろという。もう斯うなつては運の尽きで、お近さんの秘密はみな暴露してしまいました。なにしろその写本があわせて十二冊もあるので、高松さんも一時は呆れるばかりでしたが、やがて両の拳を握りつめながら、むすめの顔を睨みつけました。

「いや、これで判った。三島の屋敷から不意に暇を出されたのも、こういう不埒があるからだ。女の身として、まして武家の女の身として、かような猥な書物を手にするなどは、呆れ返った奴だ。」

さん／＼叱り付けた上で、高松さんは弟に云いつけて、その写本全部を庭さきで焼き捨てさせました。お近さんが丹精した「春色梅ごよみ」十二冊は、炎天の下で白い灰になつてしまつたのです。お近さんは縁側に手をついたまゝで黙っていました。それがみんな灰になつてゆくのを見たときには、涙をほろ／＼とこぼしたそうです。それを横眼に睨んで、お父さんは又叱りました。

「なにが悲しい。なにを泣く。たわけた奴め。」

阿母さんはさすがに女で、なんだか娘がいじらしいようにも思われて来たのですが、問題が問題ですから何とも取りなす術もない。その場は先ずそれで納まつたのですが、高松さんは苦り切つていて、その日一日は殆ど誰とも口をきかない。お近さんは自分の部屋に這入つて泣いている。今日の詞でことば云えば、一家は暗い空氣に包まれているとでもいう形で、その日も暮れてしまいました。

その夜なかの事です。昼間の一件でむしゃくしゃするのと、今夜は悪く蒸暑いので、

高松さんは夜のふけるまで眠られずにいると、裏口の雨戸をこじ明けるような音がきこえたので、もしや賊でも這入ったのかと、すぐに蚊帳をくぐって出て、長押なげしにかけてある手槍の鞘を払って、台所の方へ出てみると、一つの黒い影が今や雨戸をあけて出ようとするところでした。生憎に今夜は暗い晩でその姿もよくは判らないが、兎もかくも台所の広い土間から表へ出てゆく影だけは見えたので、高松さんはうしろから声をかけました。

「誰だ。」

相手はなんにも返事もしないで、土間に積んである薪の一つを把とって、高松さんを目がけて叩き付けると、暗いので避け損じて、高松さんはその薪ざっぽうで左の腕を強く打たれました。名をきいても返事をしない、しかも手向いをする以上は、もう容赦はありません。高松さんは土間に飛び降りて追いかけると、相手は素疾く表へぬけて出る。なにしろ暗いので、もし取逃すといけないと思ったので、高松さんはその登音をたよりに、持っている槍を投げ付けると、さすがは多年の手練で、その投槍に手堪えがあつたと思うと、相手は悲鳴をあげて倒れました。

この騒ぎに家中の者が起きてみると、ひとりの女が投槍に縫われて倒れていました。背から胸を貫かれたのですから、勿論即死です。それはお近さんで、着換え二三枚を入れた

風呂敷づつみを抱えていました。

お近さんは家出をして、どこへ行こうとしたのか、それは判りません。併しお仙の話によると、それより五六日ほど前に、お仙が大木戸の親類まで行ったとき、途中でお近さんに逢ったそうです。お近さんはひどく懷しそうに話しかけて、わたしは再び奉公に出たいと思うが、どこかに心当りはあるまいか。屋敷にはかぎらない、町家でもいゝと云うので、町家でもよければ心あたりを探してみようと答えて別れたことがあると云いますから、或いはお仙のところへでも頼って行く積りであつたかも知れません。別に男があつたというような噂はなかつたそうです。

お父さんに声をかけられた時、こつちの返事の仕様によつては真逆に殺されもしなかつたでしょうに、手向いをしたばかりに飛んでもないことになつてしまいました。しかしお近さんの身になつたら、その薪ざつぼうを叩き付けたのが、せめてもの腹癒せであつたかも知れません。

「これもわたしが種を蒔いたようなものだ。」

お仙はあとで切りに悔んでいました。三島のお嬢さまはその後どうしたか知りません。お近さんのお父さんは十五代將軍の上洛のお供をして、明治元年の正月、彼の伏見鳥羽の

戦いで討死したと云うことです。

旗本の師匠

一

あるときに三浦老人がこんな話をした。

「いつぞや『置いてけ堀』や『梅暦』のお話をした時に、御家人たちが色々の内職をするといいましたが、その節も申した通り、同じ内職でも刀を磨い^とだり、魚を釣ったりするのは、世間体のいゝ方でした。それから、髪を結うのもいゝことになっていました。陣中に髪結いはいないから、どうしてもお互いに髪を結い合うより外はない。それですから、武士が他人の髪を結つても差支えないことになっている。勿論、女や町人の頭をいじるのはいけない。更に上等になると、剣術柔術の武芸や手習字問を教える。これも一種の内職のようなものですが、こうなると立派な表芸で、世間の評判も好し、上のおぼえもめでたいのですから、一挙両得ということにもなります。」

「やはり月謝を取るのですか。」と、わたしは訊いた。

「所詮は内職ですから月謝を取りますよ。」と、老人は答えた。

「小身の御家人たちは内職ですが、御家人も上等の部に属する人や、または旗本衆になると、大抵は無月謝です。旗本の屋敷で月謝を取ったのは無いようです。武芸ならば道場が要る、手習学問ならば稽古場が要る。したがって炭や茶もいる、第一に畳が切れる。まだそのほかに、正月の稽古はじめには余興の福引などをやる。歌がるたの会をやる。初午^{うま}には強飯^{こわめし}を食わせる。三月の節句には白酒をのませる。五月には柏餅を食わせる。手習の師匠であれば、たなばた祭もする。煤はらいには甘酒をのませる、餅搗きには餅を食わせるといのですから、師匠は相当の物入りがあります。それで無月謝、せい／＼が盆正月の礼に半紙か扇子か砂糖袋を持って来るぐらいのことですから、慾得づくでは出来ない仕事です。ことに手習子^{てならいこ}でも寄せるとなると、主人ばかりではない、女中や奥様までが手伝って世話を焼かなければならないようになります。毎日随分うるさいことです。」

「そういうのは道楽なんでしょうか。」

「道楽もありましょうし、人に教えてやりたいという奇特の心掛けの人もありましょうし、上のお覚えをめでたくして自分の出世の蔓にしようと考えている人もありましょうし、それは其人によつて違つているのですから、一概にどうと云うわけにも行きますまい。又そ

のなかには、自分の屋敷を道場や稽古場にしてしまうと云うのを口実に、知行所から余分のものを取立てるのもある。むかしの人間は正直ですから、おれの殿様は剣術や手習を教え、大勢の世話をしていらつしやるのだから、定めてお物入りも多かろうと、知行所の者共も大抵のことは我慢して納めるようになる。こういうのは、弟子から月謝を取らないで、知行所の方から月謝を取るようなわけですが、それでも知行所の者は不服を云わない。江戸のお屋敷では何十人の弟子を取っていらつしやるそうだななどと、却って自慢をしている位で、これだけでも今とむかしとは人氣が違いますよ。いや、その無月謝のお師匠様について、こんなお話があります。」

赤坂一ツ木に市川幾之進という旗本がありました。大身というわけではありませんが、二百五十石ほどの家柄で、持明院流の字をよく書くところから、前に云ったように手跡指しゆせき南をすることになりました。この人はまことに心がけの宜しい方で、それを出世の蔓にしようなどという野心があるでも無し、蔵前取りくらまえどで知行所を持たないのでから、それを口実に余分のものを取立てるといふあて的があるでも無し、つまりは自分の好きで、自分の身錢を切つて大勢の弟子の面倒をみていると云うわけでした。

市川さんはその頃四十前後、奥さんはお絹さんと云って三十五六、似たもの夫婦という譬の通り、この奥さんも深切に弟子たちの世話を焼くので、まことに評判がよろしい。お照さんという今年十六の娘があつて、これも女中と一緒に稽古場の手伝いをしていました。市川さんの屋敷はあまり広くないので、十六畳ほどのところを稽古場にしています。勿論、それを本業にしている町の師匠とは違いますから、弟子はそんなに多くない。町の師匠ですと、多いのは二百人ぐらい、少くも六七十人の弟子を取っていますが、市川さんなどの屋敷へ通つてくるのは大抵二三十人ぐらいでした。

そこで鳥渡^{ちよつと}お断り申して置きますが、こういう師匠の指南をうけに来るものは、かならず武家の子どもに限ったことはありません。町人職人の子どもでも弟子に取るのが習いでした。師匠が旗本であろうが、御家人であろうが、弟子師匠の関係はまた格別で、そのあいだに武家と町人との差別はない。已に手跡を指南するという以上は、大工や魚屋の子どもが稽古に来て、旗本の殿様がよろこんで教えたものです。それですから、こういう屋敷の稽古になると、武家の息子や娘も来る、町人や職人の子供も来るというわけで、師匠によつては武家と町人との席を区別するところもあり、又は無差別に坐らせるところもありましたが、男の子と女の子とは必ず別々に坐らせることになっていました。市川さん

の屋敷では武家も町人も無差別で、なんでも入門の順で天神机を列べさせることになっていたそうです。

一体、町家の子どもは町の師匠に通うのが普通ですが、下町と違って山の手には町の師匠が少いという事情もあり、たといその師匠があつても、御屋敷へ稽古に通わせる方が行儀がよくなると云つて、わざ／＼武家の指南所へ通わせる親達もある。痩せても枯れても旗本の殿様や奥様が涎れくりの世話を焼いてくれて、しかもそれが無月謝というのだから有難いわけです。その代りに仕付方しつけかたはすこし厳しい。なにしろ御師匠さまは刀をさしているのだから怖い。それがまた当人の為にもなると、喜んでいる親もあるのです。市川さんのところにも町の子どもが七八人通っていました。市川さんも奥さんも真直な気性の人でしたから、武家の子供も町家の子供もおなじように教えます。そのあいだに些ちっとも分け隔てがない。それですから、町家の親達はいよく喜んでいました。

それだけならば、至極結構なわけで、別にお話の種になるような事件も起らない筈ですが、嘉永二年の六月十五日、この日は赤坂の総鎮守氷川神社の祭礼だったので、市川さんの屋敷では強飯こわめしをたいて、なにかの煮染めにしものを取添えて、手習子たちに食べさせました。きょうは御稽古は休みです。土地のお祭りですから、どこの家うちでも強飯ぐらいは拵

えるのですが、子供たちはお師匠さまのお屋敷で強飯の御馳走になって、それから勝手に遊びに出る。それが年々の例になつていたので、今年もいつもの通りにあつまつて来る。

奥さんやお嬢さんや女中が手伝つて、めい／＼の前に強飯とお煮染めをならべる。いくら行儀がいゝと云つても、子供たちのことではあり、殊にきようはお祭りだというのですから、大勢がわあ／＼騒ぎ立てる。それでも不断の日とは違うから、誰も叱らない。子供たちは好い氣になつて騒ぐ。そのうちに、今井健次郎という今年十二になる男の児が三河屋綱吉という同い年の児の強飯のなかへ自分の箸を突つ込んだ。それが喧嘩のはじまりで、ふたりがとう／＼組討になると、健次郎の方にも四五人、綱吉の方にも三四人の加勢が出て、畳の上でどたばたという大騒ぎが始まりました。

健次郎はこの近所に屋敷を持つてゐる百石取りの小さい旗本の忤で、綱吉は三河屋という米屋の忤です。師匠はふだんから分け隔てのないように教えていても、屋敷の子と町家の子とのあいだには自然に隔てがある。さあ喧嘩ということになると、武家の子は武家方、町家の子は町家方、たがいに党を組んでいがみ合うようになります。きようも健次郎の方には武家の子どもが加勢する。綱吉の方には町家の子どもが味方するというわけで、奥さんや女中が制してもなか／＼鎮まらない。そのうちに健次郎をはじめ、武家の子供たちが

木刀をぬきました。子供ですから木刀をさしている。それを抜いて振りまわそうとするのを見て、師匠の市川さんももう捨て置かれなくなりました。

「これ、鎮まれ、鎮まれ。騒ぐな。」

いつもならば叱られて素直に鎮まるのですが、きようはお祭で気が昂^たっているのか、どっちもなか／＼鎮まらない。市川さんは壁にかけてあるたんぼ槍を把^とつて、木刀をふりまわしている二三人を突きました。突かれた者はばた／＼倒れる。これで先ず喧嘩の方は鎮まりました。突かれた者は泣顔をしているのを、奥さんがなだめて帰してやる。町家の組も叱られて帰る。どっちにも係り合わなかった者は、おとなしいと褒められて帰る。壁にかけてあるたんぼ槍は単に嚇しの為だと思っていたら、今日はほんとうに突かれたので、子供たちも内々驚いていました。

その日はそれで済みましたが、あくる朝、黒^{くろくわ}鋤の組屋敷にいる大塚孫八という侍がたずねて来て、御主人にお目にかゝりたいと云い込みました。黒^{くろくわ}鋤組は円通寺の坂下にありまして、御家人のなかでも小身者が多かったのです。市川さんは兎もかくも二百五十石の旗本、まるで格式が違います。殊に大塚の忤孫次郎はやはりこゝの屋敷へ稽古に通っているのですから、大塚は一層丁寧に挨拶しました。さて一通りの挨拶が済んで、それから大

塚はこんなことを云い出しました。

「せがれ孫次郎めは親どもの仕付方が行きとゞきませぬので、御覽の通りの不行儀者、さだめてお目にあまることも数々であろうと存じまして、甚だ赤面の次第でござります。」

それを序開きに、彼はきのうの一条について師匠に詰問をはじめたのです。前にもいう通り、身分違いの上に相手が師匠ですから、大塚は決して角立ったことは云いません。飽までも穩かに口をきいているのですが、その口上の趣意は正しく詰問で、今井の子息健次郎どのが三河屋のせがれ綱吉と喧嘩をはじめ、武家の子供、町家の子供がそれに加勢して挑み合つた折柄に、師匠の其許はたんぼ槍を繰り出して、武家の子ども二三人を突き倒された。本人の健次郎どのは云うに及ばず、手前のせがれ孫次郎もその槍先にかゝつたのである。それがために孫次郎は脾腹を強く突かれて、昨夜から大熱を発して苦しんでいる。勿論、一旦お世話をねがいましたる以上、不行儀者の御折檻は如何ようなされても、かならずお恨みとは存じないのであるが、喧嘩両成敗という掟にはずれて、その砌りに町家の子どもには何の御折檻も加えられず、武家の子供ばかりに嚴重の御仕置をなされたのは如何なる思召でござろうか。弟子の仕付方はそれで宜しいのでござろうか。念のためにそれを伺いたいと云うのでした。

市川さんは黙って聴いていました。

二

質のわるい弟子どもを師匠が折檻するのはめずらしくはない、町の師匠でも弓の折れや竹切れで引っぱたくのは幾らもあります。かみなり師匠のあだ名を取っているような怖い先生になると、自分の机のそばに薪ぎつぽうを置いているのさえある。まして、武家の師匠がたんぼ槍でお見舞い申すぐらいのことは、その当時としては別に問題にはなりません。大塚もそれを兎やこう云うのではないが、なぜ町家の子供をかばって、武家の子どもばかりを折檻したかと詰問したいのです。どこの親もわが子は可愛い。現に自分のせがれは病人になるほどの酷い目に逢っているのに、相手の方はみな無事に帰されたという。それはいかにも片手落ちの捌きではないかという不満が胸一ぱいに漲っているのです。もう一つには、なんと云つても相手は町人の子どもである。町人の子どもと武士の子どもが喧嘩をした場合に、武家の師匠が町人の鼻肩をして、武士の子供を手ひどく折檻するのは其意を得ないという肚もあります。かた／＼して大塚は早朝からその掛合いに來たのでした。

相手に云うだけのことは云わせて置いて、それから市川さんはその当時の事情をよく説明して聞かせました。自分は師匠として、決してどちらの鼻肩をするのでもないが、この喧嘩は今井健次郎がわるい。他人の強飯のなかに自分の箸を突つ込むなどは、あまりに行儀の悪いことである。子供同士であるから喧嘩は已むを得ないとしても、稽古場でむやみに木刀をぬくなどはいよゝゝ悪い。お手前はなんと心得てわが子に木刀をさゝせて置くか知らぬが、子供であるから木刀をさしているの、大人の真剣もおなじことである。わたしの稽古場では木刀をぬくことは固く戒めてある。それを知りつゝ妄りに木刀をふりまわした以上、その罪は武家の子供等にあるから、わたしは彼等に折檻を加えたので、決して町人の子どもの鼻肩をしたのではない。その辺は思い違いのないようにして貰いたいと云いました。

「御趣意よく相判りました。」と、大塚は一応はかしらを下げました。「町人の子どもは仕合せ、なんにも身に着けて居りませぬのでなあ。」

かれは忌^{いや}な笑いをみせました。大塚に云わせると、所詮は子ども同士の喧嘩で、武家の子どもは木刀をさしていたから抜いたのである。町家の子供はなんにも持っていないから空手で闘ったのである。町家の子供とても何かの武器を持っていれば、やはりそれを振り

まわしたに相違ない。木刀をぬいたのは勿論わるいが、それらの事情をかんがえたら、特に一方のみを厳しく折檻するのは酷である。こう思うと、かれの不満は依然として消えないのです。

もう一つには、こゝへ稽古にくる武家の子どもは、武士と云つても、貧乏旗本や小身の御家人の子弟が多い。町家の子どもとの親達は、彼の三河屋をはじめとして皆相当の店持ですから、名こそ町人であるがその内証は裕福です。したがって、その親たちが平生から色々の附届けをするので、師匠もかれらの鼻屑をするのであろうという、一種の僻^{ひが}みも幾分かまじっているのです。それやこれやで、大塚は市川さんの説明を素直に受け入れることが出来ない。仕舞にはだん／＼に忌味^{いやみ}を云い出して、当世は武士より町人の方が幅のきく世の中であるから、せい／＼町人の御機嫌を取る方がよからうと云うようなことを仄^{ほの}めかしたので、市川さんは立腹しました。

くどくも云うようですが、黒鍬というのは御家人のうちでも身分の低い方で、人柄もありよくないのが随分ありました。大塚などもその一人で、表面はどこまでも下手に出ているながら、真綿で針を包んだようにちくり／＼と遣りますから、正直な市川さんはすっかり怒ってしまったのです。

「わたしの云うことが判つたならば、それで好し。判らなければ以後は子供をこゝへ遣すな。もう帰れ、帰れ。」

こうなれば喧嘩ですが、大塚も利口ですからこゝでは喧嘩をしません。一旦はおとなしく引揚げましたが、その足で近所の今井の屋敷へ出向きました。今井のせがれは喧嘩の発頭人ですから、第一番にたんぼ槍のお見舞をうけたのですが、家へ帰つてそんなことを云うと叱られると思つて、これは黙っていましたから、親たちも知らない。そこへ大塚が来てきのうの一件を報告して、手前のせがれはそれが為に寝付いてしまったが、御当家の御子息に御別条はござらぬかという。今井は初めてそれを知つて、せがれの健次郎を詮議すると、当人も隠し切れないで白状に及びましたが、幸いにこれには別条はなかった。しかし大塚の話をきいて、今井も顔の色を悪くしました。

今井の屋敷の主人は佐久馬と云つて、今年は四十前後の分別盛り、人間も曲つた人ではありませんでしたが、今日の詞でい^{ことば}えば階級思想の強い人で、武士は食わねど高楊枝、貧乏旗本と輕しめられても武士の家ということを非常の誇りとしている人物。したがつて平生から町人どもを眼下に見下している。その息子が町人の子と喧嘩をして、師匠が町人の方の鼻根をして、わが子にたんぼ槍の仕置を加えたと云うことを知ると、どうも面白くな

い。おまけに大塚が色々の尾鰭をつけて、そばから煽るようなことを云いましたから、今井はいよ／＼面白くない。しかし流石に大塚とは違いますから、子どもの喧嘩に親が出て、自分がむやみに市川さんの屋敷へ掛合いにゆくようなことはしませんでした。

「幾之進殿の仕付方、いさゝか残念に存ずる廉がないでもござらぬが、一旦その世話をたのんだ以上、兎やこう申しても致方があるまい。」

今井は穩かに斯う云つて大塚を帰しました。しかし倅の健次郎をよび付けて、きょうから市川の屋敷へは稽古にゆくなと云い渡しました。大塚のせがれは病中であるから、無論に行きません。これで武家の弟子がふたり減ったわけです。今井を煽動しても余り手堪^{ごた}えがないので、大塚は更に自分の組内をかけまわつて、市川の屋敷では町家の子供ばかりを大切に、武家の子どもを疎略にするのは怪しからぬと触れてあるいたので、黒鍬の組内の子供達はひとりも通つて来なくなりしました。今井は流石に触れて歩くようなことはありませんが、何かのついでには其話をして、市川の仕付方はどうも面白くないと云うような不満を洩すので、それが自然に伝わつて、武家の子どもはだん／＼に減るばかり。二月三月の後には、市川さんと特別に懇意にしている屋敷の子が二三人通つて来るだけで、その他の弟子はみな町家の子になつてしまいました。なんと云つても武家の師匠ですから、武

家の子どもがストライキを遣つて、町家の子供ばかりが通つて来るのでは少し困ります。それでも市川さんは無頓着に稽古をつゞけていました。

一ツ木辺は近年あんなに繁華になりましたが、昔は随分さびしいところで、竹藪などが沢山にありました。現に太田蜀山人の書いたものをみると、一ツ木の藪から大蛇があらわれて、三つになる子供を呑んだと云うことがあります。子供を呑んだのは嘘かほんとうか知りませんが、兎も角もそんな大蛇も出そうなどころでした。その年の秋のひるすぎ、市川さんの屋敷から遠くないところの路ばたに、四五人の子供が手習草紙をぶら下げながら草花などをむしっていました。それはみな町家の弟子で、帰りに道草を食つていてはならぬ、かならず真直に家へ帰れよ、と師匠から云い渡されているのですが、やはり子供ですから然うは行きません。殊にきようは天氣がいゝので、稽古の帰りに遊んでいる。そのなかには三河屋の綱吉もいました。ほかにもこの間の喧嘩仲間が二人ほどまじっていました。

この子供たちが余念もなしに遊んでいると、竹藪の奥から五六人の子供が出て来ました。どれもみな手拭で顔をつゝんで、その上に剣術の面をつけているので、人相は鳥渡ちよつとわかない。それが木刀や竹刀を持って飛び出して来て、町家の子供達をめちやゝになぐり

付けました。そのなかでも三河屋の綱吉は第一に目指されて、殆ど正気をうしなうほどに打ち据えられてしまいました。

子供達はおどろいて泣きながら逃げまわる。それでも素疾^{ばし}つこいのが師匠の屋敷へ逃げて帰って、そのことを訴えたので、居あわせた仲間ふたりと若党とがすぐに其場へ駆けつけると、乱暴者はもう逃げてゆくところでした。そのなかに餓鬼大將らしい十六七の少年が一人まじっている。そのうしろ姿が彼の太塚孫次郎の兄の孫太郎らしく思われたが、これは真先に逃げてしまったので、確かなことは判りませんでした。

こういうわけで、相手はみな取逃してしまったので、撲られた方の子供たちを介抱して屋敷へ一旦連れて帰ると、三河屋の綱吉が一番ひどい怪我をして顔一面に腫れあがっている。次は伊丹屋という酒屋の倅で、これも半死半生になっている。その他は幸いに差したることでもないのです、それ／＼に手当をして送り帰しましたが、三河屋と伊丹屋からは釣台をよこして子供を引取ってゆくという始末。どちらの親たちも工面が好いので、出来るだけの手当をしたのですが、やはり運が無いとみえて、三河屋の倅はそれから二日目の朝、伊丹屋のせがれは三日目の晩に、いずれも息を引取ってしまいました。

さあ、そうなる事と事が面倒です。いくら子供だからと云って人間ふたりの命騒ぎですか

ら、中々むずかしい詮議になったのですが、なにを云うにも相手をみな取逃したので、確かな証拠がない。前々からの事情をかんがえると、その下手人も大抵は判っているのですが、無証拠では何うにも仕様がなない。且は町人の悲しさに、三河屋も伊丹屋も結局泣寝入りになってしまったのは可哀そうでした。

それから惹いて、市川さんも手習の指南をやめなければならぬ事になりました。市川さんは支配頭のところへ呼び出されて、お手前の手跡指南は今後見合わせるようにとの諭達を受けました。理窟を云つても仕様がなないので、市川さんはその通りにしました。

それで済んだのかと思っていると、市川さんはやがて又、小普請入りを申付けられました。これも手跡指南の問題にかゝり合があるのか無いのか判りませんが、なにしろお気の毒のことでした。いつの代にもこんなことはあるのでしようね。

刺青の話

一

そのころの新聞に、東京の徴兵検査に出た壮丁のうちに全身に見ごとな刺青ほりものをしている者があつたという記事が掲げられたことがある。それが話題となつて、三浦老人は語つた。

「今どきの若い人にはめずらしいことですね。昔だつて無暗むやみに刺青をしたものではありませんが、それでも今とは違いますから、銭湯にでも行けば屹きつと一人や二人は背中うしろに墨や朱を入れたのが泳いでいたものです。中には年の行かない小僧などをつかまえて、大供が面白半分に彫るのがある。素人に彫られては堪らない。小僧はひい／＼云つて泣く。実に乱暴なことをしたものです。刺青をしているのは仕事師と駕籠屋、船頭、職人、遊び人ですが、職人も堅気な人間は刺青などをしません。刺青のある職人は出入りをさせないなどと云う家うちもありますから、好い職人になろうと思うものは迂濶に刺青などは出来ないわけで

す。武家の仲間ちゅうげんなどにも刺青をしているものがありました。堅気の商人あきんどのせがれで、
 ありながら、若いときの無分別に刺青をしてしまつて、あとで悔んでいるものもある。いや、
 それについて可笑いおかしお話があります。なんでも浅草辺のことだそうですが、祭礼のときに
 何か一趣向ひとしようというので、町内の若い者たちが評議の末に、三十人ほどが背中をなら
 べて一匹の大蛇を彫ることになったのです。三十人が鱗うろこのお揃いを着ていて、それが肌ぬ
 ぎになつてずらりと背中を列べると、一匹の大蛇の刺青になるという趣向、まったく奇抜
 には相違ないので、祭礼の当日には見物人をあつと云わせたのですが、さあ其後が困つた。
 三十人が一度に列んでいれば一匹の形になるが、ひとり一人に離れてしまふと何うにもな
 らない。それでも蛇のあたまを彫つた者はまあ可いいのですが、そのほかの者はみんな胴ば
 かりだから困る。背中 of まん中を蛇の胴が横ぎつてゐるだけでは絵にも形にもならない。
 と云つて、一旦彫つてしまったものは仕方がない。図柄によつて何とか彫り足して誤魔か
 すことも出来ませんが、大蛇の胴ではどうも困ると洒落れたいくらいで、これらは一生の失
 策でしょう。併しこんな可笑いお話ばかりではない、刺青の為には又こんな哀れなお話
 もあります。わたくしは江戸時代に源七という刺青師ほりものしを識つていまして、それから聴い
 たお話ですが……。その源七というのは見あげるような大坊主で、冬になると河豚ふぐをさげ

て歩いているという、いかにも江戸っ子らしい、面白い男でしたよ。」

老人が源七から聴いたという哀話は大体こういう筋であった。

あれはたしか文久……元年か二年頃のこと、おぼえています。申すまでもなく、電車も自動車もない江戸市中で、唯一の交通機関というのは例の駕籠屋で、大伝馬町の赤岩、芝口の初音屋、浅草の伊勢屋と江戸勘、吉原の平松などと云うのが其中で幅を利かしたものでした。多分その初音屋の暖簾下か出店かなんかだろうと思いますが、芝神明の近所^はに初島^{つしま}という駕籠屋がありました。なか／＼繁昌する店で、いつも十五六人の若い者が転がっていて、親父は清蔵、むすこは清吉と云いました。清吉は今年十九で、色の白い、細面の粋^{いき}な男で、こういう商売の息子にはおあつらえ向きに出来上っていたんですが、唯一つの瑕^{きず}というのは身体^{からだ}に刺青^{ほりもの}のないことでした。なぜというのに、この男は子供のときから身体が弱くって、絶えず医者と薬の御厄介になっていたので、両親も所詮こゝの家の商売は出来まいと諦めて、子供の時から方々へ奉公に出した。が、どうも斯ういう道楽稼業の家に育つたものには、堅気の奉公は出来にくいものと見えて、どこへ行っても辛抱がつかず、十四五の時から家へ帰って清元のお稽古かなんかして、唯ぶら／＼遊んでいるうち

に、蛙の子は蛙で、やっぱり親の商売を受け嗣ぐようになってしまった。年は若し、男は好し、稼業が稼業だから相当に金まわりは好し、先ず申分のない江戸っ子なんです、裸稼業には無くてならぬ刺青が出来ない。刺青をすれば死ぬと、医者から固く誠められているのです。

前にも申す通り、この時代の職人や仕事師には、どうしても喧嘩と刺青との縁は離れない。とりわけて裸稼業の駕籠屋の背中に刺青がないと云うのは、亀の子に甲羅が無いのと同じようなもので、先ず通用にはならぬと云つても好いくらいです。いくら大きい店の息子株でも、駕籠屋は駕籠屋で、いざと云うときには、お客に背中を見せなければならぬ。裸稼業の者に取つては、刺青は一種の衣服きもので、刺青のない身体をお客の前に持出すのは、普通の人が衣服を着ないで人の前に出るようなものです。まあ、それほど無いとしても、刺青のない駕籠屋と、掛声の悪い駕籠屋というものは、甚だ幅の利かないものに数えられる。清吉は好い男で、若い江戸っ子でしたが、可哀そうに刺青がないから、どうも肩身が狭い。掛声なまみなんぞは練習次第でどうにでもなるが、刺青の方はそうは行かない。体質の弱い人間が生身なまみに墨や朱を注さすと、生命にかゝわると昔からきまっているんだから、どうにも仕様がな

背中一面の刺青ほりものをみて、威勢が好いとか粹いきだとかいう人は、その威勢の好い男や粹な大哥あにいになるまでの苦しみを十分に察してやらなければなりません。同じく生身をいじめるのでも、灸を据えるのとは少し訳が違います。第一に非常に金がかゝる。時間がかゝる。銭の二百や三百持つて行つたつて、物の一寸と彫つてくれるものではありません。又、どんなに金を積んだからと云つて、一度に八寸も一尺も彫れる訳のものではありません。そんな乱暴なことをすれば、忽ちに大熱を発して死んでしまうと伝えられているのです。要するに少しずつ根気よく彫つて行くのが法で、いくら焦つても急いでも、半月や一月で俱利迦羅紋々の立派な阿哥おあにいさんが無造作に出来上るといふわけにも行かないのです。

刺青師は無数の細い針を束ねた一種の簞さくらのようなものを用いて、しずかに叮嚀に人の肉を突き刺して、これに墨や朱をだんぐに注さして行くのですが、朱を注すのは非常の痛みで、大抵の強情我慢の荒くれ男でも、朱入りの刺青を仕上げるまでには、鬼の眼から涙を幾たびか零こぼすと云います。しかも大抵の人は途中で屹きつと多少の熱が出て、飯も食えないような半病人になる。こんな苦しみを幾月か辛抱し通して、こゝに初めて一人前の江戸っ子になるのですから、どうして中々のことではありません。

こんなわけだから、生きた身体に刺青などと云うことは、とても虚弱な人間のできる芸

ではない。清吉も近來はよほど丈夫になったと人も云い、自分もそう信じているのですが、土台の体格が孱弱かよわく出来ているのですから、逆とこも刺青などという荒あらぎ行ようの出来る身体ではない。勿論、方々の医師いしやにも診て貰ったが、どこでも申合わしたように、お前のからだには決して刺青なぞをしてはならぬ、そんな乱暴なことをすると命がないぞと、脅おどかすように誠められるのですが、当人はどうも思い切れないので、方々の刺青師にも相談してみましたが、これも一応は清吉の身体をあらためて、お前さんはいけねえとかぶりを掉ふるのです。医師にも誠められ、刺青師にも断られたのだから、もう仕様がない。あたは江戸っ子も日蔭の花のように、明るい世界へは出られない身の上、これが寧いっろそがない半端人足だったら、どうも仕方がないと諦めてしまいかも知れないが、なまじい相当の家に生れて、立派な大哥株あにさんで世間が渡られる身体だけになおく辛いわけです。

店に転がっている大勢の若い者は、みんなその背中を墨や朱で綺麗に彩色している。ある者は雲に竜を彫つてある。ある者は巖いわに虎を彫っている。ある者は義経を背負しよっている。ある者は弁慶を背負っている。ある者は天狗を描いている。ある者は美人を描いている。こういうのが沢山ごろ／＼しているなかで、大哥と呼ばれる清吉ひとりが、生れたまゝの生白い肌を晒していると云うのは、幅の利かないことおびたゞしい。若い者だから無理は

ありません。清吉はひとに内証で涙を拭いていることもあつたそうです。

この初島の近処に梅の井とかいう料理茶屋があつて、これも可なり繁昌していたようですが、その娘にお金きんちゃんという美い女がいました。清吉とは一つ違いの十八で……と云つてしまえば、大抵まあお話は判つてゐるでしょう。まあ、なにしろそんなことで、お金清吉という相合傘が出来たと思つてください。両方の親達も薄々承知で、まあ出来たものならばゆく／＼は一緒にしてやろう位に思つていたのです。芝居するように、こゝで敵役の悪侍わるなんぞが邪魔に這入らないんですから、お話が些ちつと面白くもないようですが、どうも仕方ありません。ところが、こゝに一つのもん捌ちやく着やくが起つた。と云うのは、なんでも或日のこと、その梅の井の門口で酔つ払いが二三人で喧嘩を始めたところへ、丁度に彼の清吉が通りあわせて、見てもいられないから留男に這入ると、相手は酔つてゐるので何かぐず／＼云つたので、清吉も癪あにいに障つて肌をぬいだ。すると、相手はせ／＼笑つて、「へん、刺青もねえ癖に、乙う大哥あにいぶつて肌をぬぐな。」とか、なんとか云つたそうです。それを聞くと清吉は赫かつとなつて、まるで氣ちがいのようになつて、穿ういている下駄を把つかつて相手を滅茶々になぐり付けたので、相手も少し氣を吞まれたのでしょう、おまけに酔つてゐるから逆もかなわぬ。這々の体で起きつ転びつ逃げてしまったので、まあその

場は納まりました。梅の井の家内の者も門に出て、初めからそれを見ていたのですが、その時に家の女房、即ちお金のおふくろがなんの気なしに、「あゝ、清さんも好い若い者だが、ほんとうに刺青のないのが瑕きずだねえ。」と、こう云った。それがお金の耳にちらりと這入ると、これもなんだか赫として、自分の可愛い男に刺青のないと云うことが、恥かしいような、口惜いような、云うに云われない辛さを感じたのです。

二

勿論、清吉が堅気の人でしたら、刺青のないと云うことも別に問題にもならず、お金もなんとも思わなかったのですが、相手が駕籠屋の息子だけにどうも困りました。お金のおふくろも固もとより悪気で云ったわけではない、ゆくゝは自分の娘の婿になろうという人を嘲弄するような料簡で云ったのではない、なんの気も無しに口が滑っただけのことで、それはお金もよく知っていたのですが、それでもなんだか口惜いような、きまりが悪いような、自分の男と自分とが同時に嘲弄されたように感じられたのです。それもおとなしい娘ならば、胸に思っただけのことで済んだのかも知れませんが、お金は頗る勝気の女で、

赫となるとすぐに門口へかけ出して、幾らかおふくろに面当ての気味もあつたのでしよう、「清ちゃん、なぜお前さんは刺青をしないんだねえ。」と、今や肌を入れようとする男の背中を、平手でびしやりと叩いたのです。

事件は唯それだけのことで、惚れている女に背中を叩かれたと云うだけのことですが、何うもそれだけのことで済まなくなつた。前にもいう通り、梅の井の家内の者も大勢そこに出ている。喧嘩を見る往来の人もあつまっている。その大勢が見ているまん中で、自分の惚れている女に「刺青がない。」と云われたのは、胸に焼鉄やきがねと云おうか、眼のなかに錐と云おうか、兎にかくに清吉にとつては急処を突かれたような痛みを感じました。

お金のおふくろは清吉やお金を嘲弄するつもりで云つたのではなかったが、お金の耳にはそれが一種の嘲弄のよういきこえる。お金も亦、清吉を侮辱するつもりでは無かつたのですが、清吉の身にはそれが嘲弄のように感じられる。つまりは感情のゆき違いと云つたようなわけで、左さらでも逆上のぼせている清吉はいよく赫となりました。そうなると男は気が早い。物をも云わずにお金の島田をひつ掴んで、往来へ横つ倒しに捻じ倒すと、あいにくに水が撒いてあつたので、お金は可哀そうに帯も着物も泥まぶれになる。それでも、利かない気の女だから倒れながら怒鳴りました。

「清ちゃん、あたしをどうするんだえ。腹が立つなら寧ろ男らしく殺しておくれ。」

清吉はもう逆上せ切つていたと見えて、勿論、ほんとうに殺す気でもなかったのでしょうが、うぬつと云いながら又ぞろ自分の下駄を把つたので、梅の井の人達もおどろいて飛び出して、右左から清吉を抱き縮めてしまったが、こうなると又おふくろが承知しない。

「清ちゃん、なんだって家の娘をこんなひどい目に逢わせたんだえ。刺青が無いから無いと云つたのがどうしたんだ。お前さんはなんと思っているか知らないが、これはあたしの大事の娘なんだよ。指でも差すと承知しないから……。巫山戯た真似をおしでないよ。」

お金と清吉との關係を万々承知ではあるけれども、自分の見る前で可愛い娘をこんな目に逢わされては、母の身として堪忍ができない。こつちも江戸つ子で、料理茶屋のおかみさんです。腹立ちまぎれに頭から罵倒するように怒鳴り付けたから、いよく事件は面倒になって来ました。清吉も黙つてはいられない。

「えゝ、撲ろうが殺そうが俺の勝手だ。この阿魔はおれの女房だ。」

「洒落たことをお云いでない。おまえさんは誰を媒妁人に頼んで、いつの幾日に家のお金を女房に貰ったんだ。神明様の手洗い水で顔でも洗つておいでよ。ほんとうに馬鹿々々しい。」

おふくろは畳みかけて罵倒したのです。いくら口惜がっても清吉は年が若い、口のさきの勝負では逆もこゝのおふくろに敵わないのは知れている。それでも負けない気になって二言三言云い合っているうちに、周囲^{まわり}にはいよく人立ちがして来たので、おふくろの方でも焦れつたくなって来た。

「お前さんのような唐人を相手にしちやあいられない。なにしろ、お金はあたしの娘なんだからね。当人同士どんな約束があるか知らないが、お金を貰いたけりやあその背中へ立派に刺青をしておいでよ。」

おふくろは勝鬨のような笑い声を残して、奥へずん／＼這入ってしまうと、お金はなんにも云わずに、つゞいて行ってしまった。取残された清吉は身顫いするほどに口惜がりました。

「うぬ、今に見ろ。」

その足ですぐに駈け込んだのが源七老爺^{じい}さんの家でした。老爺さんはその頃宇田川横町に住んでいて、近所の人ですからお互いに顔は知っていたのです。

おなじ悪口でも、いつそ馬鹿とか白痴^{たわけ}とか云われたのならば、清吉も左ほどには感じなかったかも知れないのですが、ふだんから自分も苦^やに患^まんでいる自分の弱味を真正面から

突かれたので、その悪口が一層手ひどくわが身に堪えたのでしよう。源七にむかつて、なんでも可いから是非刺青ほりものをしてくれと頼んだのですが、老爺じいさんも素直に諾うんとは云わなかったそうです。

「お前さんはからだが弱いので、刺青をしないと云うことも予て聞いている。まあ、止したほうが可いでしょうよ。」

こんな一通りの意見は、逆上のぼせ切っている清吉の耳に這入ろう筈がありません、邪じゃが非ひでも刺青をしてくれ、それでなければ男の一分ぶんが立たない。死んでも構わないから彫ってくれと、斯う云うのです。源七も仕方がないから、まあ兎も角も念のためにその身体をあらためて見ると、なるほど不可いけない。こんな孱弱かよわいからだに朱や墨を注さすのは、毒を注すようなものだと思つたが、当人は死んでも構わないと駄々を捏ねているのですから、この上にもうなんとも云いようがない。それでも商売人は馴れているから、先ずこんなことを云いました。

「それほどお望みなら彫つてあげても可いが、きようはお前さんが酔っているようだからおよしなさい。」

清吉は酔っていないと云いました。今朝から一杯も酒を飲んだことはないと言つたので

すが、源七はその背中の肉を撫でて見て、少しかんがえました。

「いえ、酒の気があります。酒を飲まないにしても、味淋の這入ったものを何か喫べたでしょう。少しでも酒の気があつては、彫れませんよ。」

酒と違つて、味淋は普通の煮物にも使うものですから、果して食つたか食わないか、自分にもはつきりとは判らない。これには清吉も些と困つた。

「味淋の気があつても不可ませんか。」

「不可ません。すこしでも酔つているような気があると、墨はみんな散つてしまいます。」
刺青師が無分別の若者を扱うには、いつも此の手を用いるのだそうです。この論法で、きょうも不可ない、あしたも不可ないと云つて、二度も三度も追い返すと、しまいには相手も飽きて、来なくなる。それでも強情に押掛けてくる奴には、先ず筋彫りをする云つて、人物や花鳥の輪廓を太い線で描く。その場合にはわざと太い針を用いて、精々痛むようにちくり／＼と肉を刺すから堪らない。大抵のものは泣いてしまします。縦令ば歯を食い縛つて堪えても、身体の方が承知しないで、きつと熱が発る、五六日は苦しむ。これで大抵のものは降参してしまうのです。源七もこの流儀で、味淋の気があるを口実にして、一旦は先ず体よく清吉を追い返したのですが、なか／＼この位のことで諦めるのではない。

あくる日もその明くる日も毎日毎日根よく押掛けて来るので、源七老爺じいさんも仕舞には根負けをしてしまつて、それほど執心ならば兎もかくも彫つてみましょうという事になりました。

そこで源七は先ず筋彫りにかゝつた。一体なにを彫るのかと云つて雛形の手本をみせると、清吉は「嵯峨や御室」おむろの光国と滝夜叉を彫つてくれと云う注文を出しました。おなじ刺青でも二人立と来ては大仕事で、殊に滝夜叉は傾城けいせいの姿ですから、手数がなか／＼かゝる。無論、手間賃は幾らでもいゝと云うのですが、この男の痩せた生白い背中に、それほど手の込んだ二人立が乗る訳のものではないので、もう少しちっと軽いものと色々に勧めたのですが、清吉はどうしても肯かない。是非とも「嵯峨や御室」を頼むと強情を張るので、源七はまた弱らせられました。併しあとで考えると、それにも一応理窟のあることで、彼のお金は一昨年のお祭に踊屋台に出た。それが右の「嵯峨や御室」で、お金は滝夜叉を勤おとしめて大層評判が良かったのだそうです。そう云う因縁があるので、清吉は自分の背中にも是非その滝夜叉を彫つて貰いたいと望んだわけでした。

源七もいよ／＼根負けがして、まあなんでも可い、当人の注文通りに滝夜叉でも光国でも彫ることにして、例の筋彫りで懲りさしてしまおうと云う料簡で、先ず下絵に取りかゝ

りました。それから例の太い針でちくりくと突つ付きはじめたが、清吉は眼を瞑つて、歯を食いしばって、じつと我慢をしている。痛むかと訊いても、痛くないと答える。それでも元来無理な仕事をするのですから、強情や我慢ばかりで押通せる訳のものではありません。半月も立たないうちに幾度もひどい熱が出て、清吉は殆ど半病人のようになってしまったが、それでも根よく通つて来しました。

当人の親たちも大変心配して、そんな無理をすると身体に障るだろうと、たびたび意見をしましたが、清吉はどうしても肯かない。例の通り、死んでもかまわないと強情を張り通しているのだから、周囲の者も手^{まわり}を付けることが出来ない。親たちも店の者もたゞ心配しながら日を送っているうちに、清吉はだん／＼に弱つて来しました。顔の色は真蒼になって、今年十九の若い者が杖をついて歩くようになった。それでも毎日かゝさず通つて来るので、源七はその強情におどろくと云うよりも、なんだか可哀そうになって来しました。この上につづけて彫つていれば、どうしても死ぬよりほかはない。最初からもう一月の余になるが、滝夜叉の全身の筋彫りがよう／＼出来上ったぐらいのもので、これから光国の筋彫りを済まして、更に本当の色ざしを終るまでには、幾日かゝるか判つたものではない。清吉がその総仕上げまで生きていられないことは知れきっているもので、なんとかしてこゝ

らで思い切らしたものだ、源七も色々に考えていると、なんでも冬のなかばで、みぞれ霏まじりの寒い雨が降る日だったそうです。清吉はもう歩く元気もない、殊に雨が降っているせいでもありません、自分の家の駕籠に乘せられて源七の家へ来ました。なんぼなんでも最^もう見てはいられないので、半分死んでいるような清吉にむかって、わたしは医者ではないから、ひとの身体のこととはよく判らないが、多年の商売の経験で大抵の推量は付く。おまえさんがこの上無理に刺青をすれば、どうしても死ぬに決まっているが、それでも構わずに遣る気か、どうだと云って、噛んで含めるように意見を見ると、当人ももう大抵覚悟をしていたとみえて、今度はあまり強情を張りませんでした。

この時に清吉は初めて彼のお金的一条をうちあけて、自分はどうしてもこの身体に刺青をして、梅の井の奴等に見せてやろうと思ったのだが、それももう出来そうもない。滝夜叉も光国も出来上らないうちに死んでしまうらしい。ついては「嵯峨や御室」の方を中止して、左の腕に位牌、右の腕に石塔を彫って貰いたいと、やつれた顔に涙をこぼして頼んだそうです。源七老爺さんも「その時にはわたしも泣かされましたよ。」とわたしに話しました。

どうで死ぬと覚悟をしている人の頼みだから、源七も否とは云わなかった。その後も清

吉は駕籠で通つて来るので、源七も一生懸命の腕をふるって、位牌と石塔とを彫りました。それがようやく出来あがると、清吉は大変によろこんで、あつく礼を云って帰ったが、それから二日ほど経って死んでしまいました。初島の家から報せてやると、梅の井のお金もおふくろも駄けつけて来ましたが、今更泣いても謝つても追っ付くわけのものではありません。菩提寺の和尚様は筆を執つて、仏の左右の腕に彫られている位牌と石塔とに戒名をかいて遣つたということです。

雷見舞

一

六月の末であつた。

梅雨の晴間をみて、二月ぶりで大久保をたずねると、途中から空の色がまた怪しくなつて、わたしが向つてゆく甲州の方角から意地わるくごろ／＼云う音がきこえ出した。どうしようかと少し躊躇したが、大したこともあるまいと多寡をく／＼つて、そのまゝに踏み出すと、大久保の停車場についた頃から夕立めいた大粒の雨がざつとふり出して、甲州の雷はもう東京へ乗込んだらしく、わたしの頭のうえで鳴りはじめた。

傘は用意して来たが、この大雨を衝いて出るほどの勇氣もないので、わたしは停車場の構内でしばらく雨やどりをすることにした。そのころの構内は狭いので、わたしと同じような雨やどりが押合っているばかりか、往来の人たちまでが屋根の下へどや／＼と駈け込んで来たので、ぬれた傘と湿れた袖とが摺れ合うように混雑していた。

わたしの額には汗がにじんで来た。

わたしのそばには老女が立っていた。老女はもう六十を越えているらしいが、あたまには小さい丸鬘をのせて、身なりも貧しくない、色のすぐれて白い、上品な婦人であった。かれはわたしと肩をこすり合うようにして立っているのです、なんとも無しに一種の挨拶をした。

「どうも悪いお天気でございますね。」

「そうです。急にふり出して困ります。」と、わたしも云った。

「きょう一日はどうにか持つだろうと思っていましたのに……。」

こんなことを云っているうちにも、雷は^{らい}かなりに強く鳴って通った。その一つは近所へ落ちたらしかった。老女は白い顔を真蒼にそめ換えて、殆どわたしのからだへ倒れかゝるように^よ寄りかゝって眼をとじていた。雷の嫌いな女、それはめずらしくもないので、わたしはたゞ気の毒に思つたばかりであつた。実はわたし自身もあまり雷は好きでないので、いゝ加減に通り過ぎてくれゝばいゝと内心ひそかに祈っていると、雨は幸いに三十分を過ぎないうちに小降りになつて、雷の音もだんぐに東の空へ遠ざかったので、気の早い人達はそろゝ動きはじめた。わたしもやがて空をみながら歩き出すと、老女もつゞいて出

て来た。かれも小さい洋傘こうもりを持っていた。

構外へ出ると、雲の剥げた隙間から青い空の色がところ／＼に洩れて、路ばたの草の露も明るく光っていた。わたしも他の人達とあとや先になって、雨あがりの路をたどってゆくと、一台の人車くるまがわたしたちを乗り越して通り過ぎた。雨ももう止んで、その車には幌がおろしてなかったので、車上の人が彼の老女であることはすぐに判った。老女はわたしに黙礼をして通った。

三浦老人の家は往来筋にあたっていないので、その横町へまがる時には、もう私と一緒にあるいている人はなかった。往来が少いだけに、横町は殊に路が悪かった。そのぬかるみを注意して飛び渡りながら、ふと向うをみると、丁度彼の家の門前から一台の空車が引返して来るところであつた。客はもう門をくゞってしまったので、そのうしろ姿もみえなかつたが、車夫の顔には見おぼえがあつた。かれは彼の老女をのせて来た者に相違なかつた。

あの女も三浦老人の家へ来たのか。

わたしは鳥渡ちよつと不思議なようにも感じた。停車場で一緒に雨やどりをして、たとい一言でも挨拶した女が、やはり同じ家をたずねてゆく人であろうとは思わなかつた。勿論そん

な偶然はあり勝のことではあるが、この場合、かれと我とのあいだに何か一種の糸が繋がってゐるように思われなこともなかった。かれはどういう人であろうかと、私はあるきながら想像した。かれは老人の親戚であろうか、知人の細君か未亡人であろうか。それとも——老人がむかしの恋人ではあるまいか——斯うかんがえて来たときに、わたしは思わず微笑して自分の空想を嘲あざけった。

いずれにしても、来客のあるところへ押掛けてゆくのは良くない。いつそ引返そうかとも思ったが、雨にふり籠こもめられ、雷らいにおびやかされ、ぬかるみを辿たどつてこゝまで来たことを考えると、このまゝ空しく帰る気にもなれなかったので、わたしは邪魔をするのを承知の上で、思い切つてそのあとから門をくくることにした。雨もやみ、傘を持っているにも拘らず、停車場から僅かの路を人車くるまに乗つてくるようでは、かの老女もあまり生活に困らない人であろうなどと、わたしは又想像した。

門を這入つて案内を求めると、おなじみの老婢ばあやが出て来た。いつもは笑つて私を迎える彼女が、きようは少し迷惑そうな顔をして、その返事に躊躇ちゅうちよしているようにもみえるので、わたしは今更に後悔して、やはり門前から引返せばよかったと思つたが、もう何うすることも出来ないので、奥へ取次ぎにゆく彼女のうしろ姿を氣の毒のような心持で見送つてい

ると、やがて彼女^{かれ}は再び出て来て、いつもの通りにわたしを案内した。

「御用のお客様じゃないのでしょうか。お邪魔のようならば又うかゞいますが……。」「と、わたしは遅まきながら云った。

「いいえ、よろしいそうでございます。どうぞ。」「と、老婢は先に立つて行つた。

いつもの座敷には、あるじの老人と客の老女とが向い合っていた。老女はわたしの顔を見て、これも一種の不思議を感じたように挨拶した。停車場で出逢つた話をきいて、三浦老人も笑い出した。

「はゝあ、それは不思議な御縁でしたね。むかしから雨宿りなぞというものは色々の縁をひくものですよ。人情本なんぞにもよくそんな筋があるじゃありませんか。」「

「それでもこんなお婆さんではねえ。」「

老女は声をあげて笑つた。年にも似合わない華やかな声がわたしの注意をひいた。

「先刻^{さつき}はまことに失礼をいたしました。」「と、女はかさねて云つた。「わたくしはかみなり様が嫌い、ごろ／＼と云うとすぐに顔の色が変わりますくらいで、若いときには夏の来るのが苦になりました。それに、当節とちがひまして、昔はかみなり様が随分はげしく鳴りましたから、まったく半病人で暮す日がたび／＼ございました。」「

「ほんとうにお前さんの雷^{らい}嫌いは格別だ。」と、三浦老人も笑った。「なにしろ、それがために侍ひとり玉無しにしたんだからね。」

「あゝ、もうその話は止しましょうよ。」と、女は顔をしかめて手を振った。

「まあ、いゝさ。」と、老人はやはり笑っていた。「こちらはそういう話が大好きで、麴町からわざ／＼この大久保まで、時代遅れのじいさんの昔話を聴きにおいでなさるのだ。おまえさんも罪ほろぼしに一つお聞かせ申したら何うだね。」

「是非聴かして頂きたいものですね。」と、わたしも云った。この老女の口から何かのむかし話を聞き出すということが、一層わたしの興味を惹いたからであつた。

「だって、あなた。別に面白いお話でもなんでも無いんですから。」と、女は迷惑そうに顔をしかめながら笑っていた。

「どうしても聴かして下さいるわけには行かないんでしょうか。」と、私も笑いながら催促した。

「困りましたね。まったく詰まらないお話なんですから。」

「詰まらなくてもようござんすから。」

「だって、いけませんよ。ねえ、三浦さん。」と、かれは救いを求めるように老人の顔を

みた。

「そう押合っていては果てしがない。」と、老人は笑いながら仲裁顔に云った。「じゃあ、一旦云い出したのが私の不祥で、今更何うにも仕様がなから、わたしが代理で例のおしやべりをすることにしましょうよ。おまえさんも係り合だから、おとなしくこゝに坐つていて、わたしの話の間違つているところがあつたら、一々そばから直してください、逃げてはいけませんよ。」

いよく迷惑そうな顔をしている女をそこに坐らせて置いて、老人はいつもの滑らかな調子で話しはじめた。

二

どこかに迷惑がる人がいますから、店の名だけは堪忍してやりますが、場所は吉原で、花魁おいらんの名は諸越もろこしとおぼえていて下さい。安政の末年のことで、その諸越のところへ奥州のある大名——と云つても、例の仙台様ではありません。もっと江戸に近いところの大名が通つていたのです。仙台や尾張や、それから高尾をうけ出した榊原などは、むかし

ら有名になつていますが、まだその外にも廓通いをした大小名は沢山あります。しかも遠い昔ばかりでなく、文化、文政から天保以後になつても、廓へ入込んだ殿様は幾らもありましたから、敢てめずらしいことでもないのですが、その諸越という女がおそろしく雷を嫌つたということがお話の種になるのです。そのつもりでお聴きください。

その大名は吹けば飛ぶような木葉大名こっばでなく、立派に大名の資格を具えている家柄の殿様でしたが、それがしきりに諸越のところへ通つてゆく。勿論、大名のお忍びですから、頻りにと云つたところで、月に二三度ぐらいのことでしたが、それでも殿様は大執心で、相方あいかたの女に取つても、その店に取つても、大変にいゝお客様であつたのです。

諸越が雷を嫌うということは、殿様もよく知っている。そこで、雷が鳴ると、その屋敷から諸越のところへ御見舞の使者が来ることになつていました。随分ばかりくしいようなお話で、今日の人たちは嘘のように思うかも知れませんが、これは擬まがいなしの実録です。勿論小さい雷ならば構わないでしょうが、少し強い雷が鳴り出すと、屋敷の侍が早駕籠に乗つてよし原へ駈けつけて、お見舞の菓子折か何かをうやくしく花魁ちいに献上するといふわけです。いかに主命でも、兎もかくも一人の武士が花魁のところへ雷見舞にゆくと云うのですから、重々難儀の役廻りで、相当の年配のものは御免を蒙つて引き下りますから、

この役目はいつも若侍がうけたまわることになっていました。

ところで、その年の夏は先ず無事に済んでいたのですが、どういう陽気の加減か、その年は十月の末に颶風はやてのような風がふき出して、石ころのような大きい雹こが雨まじりに降る。それと一緒にひどい雷が一時ときあまりも鳴りひびいたので、江戸中の者もびっくりしました。この屋敷でもおどろきました。もう大丈夫と油断していると、この大雷が不意に鳴り出したのです。殊に時ならぬ雷というのですから、猶さらお見舞を怠つてはならぬと、殿さまの御指図を待つまでもなく、屋敷からは倉田大次郎という若侍を走らせて、諸越花魁の御機嫌を伺わせることにしました。

大次郎はすぐに支度をして、さすがに袴かみしもは着ませんけれども、紋付の羽織袴というこしらえて、干菓子の大きい折をさゝげて、駕籠をよし原へ飛ばさせました。大次郎は今年二十二で、ふだんから殿さまのお供をして吉原へゆく者ですから、廓内の勝手はよく心得ています。たゞ困ったことには、この人も雷嫌いで、稲妻がぴかりと光ると、あわてゝ眼をつぶるという質ですから、雷見舞のお使にはいつも相役の村上という男をたのんでいたのですが、きょうは生憎にその村上が下屋敷の方へ行つて、屋敷に居あわせない。今日とちがいますから、電話をかけて急に呼び戻すというわけには行かないので、よんどころなく

自分が引受けて出るようになりました。大次郎も侍ですから、雷が怖いと云って役目を辞退することは出来ません。風が吹く、雨がふる、雹が降る、雷が鳴る、実にさん／＼な天氣の真最中に、大次郎は駕籠でのり出しました。本人に取っては、羅生門に向う渡辺綱よりも大役でした。

屋敷を出たのは、夕七つ（午後四時）少し前で、雨風はまだやまない。とき／＼に大きい稲妻が飛んで、大地もゆれるような雷がなりはためく。駕籠のなかにいる大次郎はもう生きている心地もないくらいで、眼をふさぎ、耳をふさいで、おそらく口のうちでお念仏でも唱えていたことでしょう。本人の雷ぎりいと云うことは、屋敷でも大抵知っていたでしょうが、場所が場所だけに無暗の者を遣るわけには行かなかったのかも知れません。いずれにしても、雷ぎらいの人間を雷見舞に遣ろうというのですから、^{いざり}甕を火事見舞に遣るようなもので、どうも無理な話です。その無理からこゝに一つの事件が^{しゅったい}出来したのは、まことによんどころないことでした。

浅草へかゝつて、馬道の中ほどまで来ると、雷は又ひとしきり強くなって、なんでも近所へ一二カ所も落ちたらしい。雹はやんだが、雨風が烈しいので、駕籠屋も思うように駈けられない。駕籠のなかでは大次郎がふるえ声を出して、早く遣れ、早くやれと急ぎたて

ます。いくら急かれても、駕籠屋はいそぐわけには行かない。そのうちに大きい稲妻が又ひかる。大次郎はもう堪らなくなつて、一生懸命に怒鳴りました。

「どこでもいゝから、そこらの家へ着けてくれ」^{うち}

どこでもと云つても、まさか米屋や質屋へかつぎ込むわけにも行かないので、駕籠屋はそこらを見まわすと、五六軒さきに小料理屋の行燈がみえる。駕籠屋は兎もかくもその門口へおろすと、大次郎は待ちかねたように転げ出して、その二階へ駆けあがりました。駕籠に乗った侍が飛び込んで来たのですから、その家でも疎略にはあつかいません。女中共もすぐに出て来て、お世辞たら／＼で御注文をうけたまわろうとしても、客は真蒼になつて座敷のまん中に俯伏していて、しばらくは何にも云いません。急病人かと思つて一旦はおどろいたが、雷が怖いので逃げ込んで来たということが判つて、家でも気をきかして時候はずれの蚊帳を吊つてくれる。線香を焚いてくれる。これで大次郎もすこし人ごちが付きしました。そのうちに雷の方もすこし収まつて来たので、大次郎もいよ／＼ほつとしていると、わかい女中が酒や肴を運んで来ました。なにを誂えたのか、誂えないのか、大次郎も夢中でよく覚えていませんが、こういう家の二階へあがつた以上、そのまゝに帰られないくらいのことは心得ていますから、大次郎は別になんにも云わないで、その酒や肴

を蚊帳のなかへ運ばせました。

「あなた。虫おさえに一口召上れよ。」

女中も蚊帳のなかへ這入つて来ました。大次郎も飲める口ですし、まったく虫おさえに一杯飲むのもいゝと思つたので、その女の酌で飲みはじめました。吉原の酒の味も知つている人ですから、まんざらの野暮ではありません。その女にも祝儀を遣つて、冗談の一つ二つも云つていゝうちに、雨風もだん／＼に静まつて雷の音も遠くなりましたから、大次郎はいよ／＼元気がよくなりました。相手も鳥渡ちよつと踏めるような御面相の女で、頻りにちやほやと御世辞をいう。それに釣り込まれて飲んでいゝうちに、大次郎もよほど酔がまわつて来ました。しかし生酔本性違わずで、雷見舞の役目のことが胸にありますから、大次郎もあまり落ちついて御神輿おみこしを据えているわけには行きません。好い加減に切りあげて帰ろうとすると、女はなんとか彼とか云つて頻りにひき止めました。

三

大次郎は悪い家へ這入つたので、こゝの家の表看板は料理屋ですが内実は淫売屋じんぐやでした。

江戸時代に夜鷹は黙許されていましたが、淫売じごくはやかましい。とき／＼お手が這入って処分をうけるのですが、やはり今日とおなじことで狩り尽せるものではありません。大次郎は無論にそんな家うちとは知らないで、夢中で飛び込んだのです。駕籠屋もおそらく知らないで普通の小料理屋と思って担ぎ込んだのでしようが、家には首の白いのが四五人も屯とんしていて、盛に風紀をみだしている。そこへ身綺麗な若い侍が飛び込んで来たので、向うでは好い鳥いいござんなれと手ぐすね引いて持ちかけると云うわけです。大次郎はふり切って帰ろうとする。女は無理にひきとめる。それがだん／＼露骨になって来たので、大次郎も気がついて、あゝ飛んだところへ引つかかったと思つたが、今更どうすることも出来ない。あやまるようにして勘定をすませて、さて帰ろうとすると、自分の大小がみえない。

「これ、おれの大小をどうした。」

「存じませんよ。」と、女は澄ましていました。

「存じないことはない。探してくれ。」

「でも、存じませんもの。あなた、お屋敷へお忘れになったのじゃありませんか。」

「馬鹿をいえ。侍が丸腰で屋敷を出られるか。たしかに何処かにあるに相違ない。早く出してくれ。」

女は年こそ若いが、なか／＼人を食った奴で、こつちが焦れるほどいよく落ちつき払って、平氣にかまえているのです。小面^{こづら}が憎いと思うけれど、こゝで喧嘩も出来ない。淫売屋というなかにも、こゝの家はよほど風のわるい家で、大次郎の足どめに大小を隠してしまつたらしい。いよく憎い奴だと思うものゝ、こゝへ飛び込んで来たときは半分夢中であつたので、いつ何うして大小を取りあげられたのか些^{ちつ}とも覚えがない。こうなると水かけ論で、いつまで押問答をしても果てしが付かないことになるので、大次郎も困りました。

勿論、たしかに隠してあるに相違ないのでから、表向きにすれば取返す方法がないことはない。町内の自身番へ行つて、その次第をとゞけて出れば、こゝの家の者どもは詮議をうけなければならぬ。武士が大小をさゝずに来たなどというのは、常識から考えても有りそうもないことですから、こゝの家で隠したと云う疑いはすぐにかゝる。まして隠し売女を置いているということまでが露顕しては大変ですから、こゝで大次郎が「自身番へゆく」と一言いえば、相手も兜をぬいで降参するかも知れないのですが、残念ながらそれが出来ない。表向きにすれば、第一に屋敷の名も出る。ひいては雷見舞の一件も露顕しないとも限らないので、大次郎はひどく困りました。相手の方でも真逆に雷見舞などとは気

がつきませんでしたろうが、たといどっちが悪いにせよ、侍が大小を取られたの、隠されたのと云って、表向きに騒ぎ立てるのは身の恥ですから、よもや自身番などへ持出しはしまいと多寡をくゝって、どこまでも平氣であしらっている。こんな奴等に出逢ってはかありません。

こうなったら仕方がないから、金でも遣つて大小を出して貰うか、それとも相手の云うことを肯いて遊んでゆくか、二つに一つより外はないのですが、可哀そうに大次郎はあまり沢山の金を持つていない上に、こゝで祝儀を遣つたり、法外に高い勘定を取られたりしたので、紙入れにはもう幾らも残つていないのです。ほかの品ならば、打っちゃった積りで諦めて帰りますが、武士の大小、それを捨てゝ丸腰では表へ出られません。大次郎も困り果てゝ、嚇したり賺すかしたりして色々にたのみましたが、相手は飽までもシラを切つていのです。年のわかい大次郎はだんゝに焦れ込んで来ました。

「では、どうしても返してくれないか。」

「でも、無いものを無理じやありませんか。」

「無理でもいゝから返してくれ。」

「まあ、ゆつくりしていращしやいよ。そのうちには又どっかから出て来ないとも限りま

せんから。」

「それ、みろ。おまえが隠したのじゃないか。」

「だって、あなたがあんまり強情だからさ。あなたがわたしの云うことを肯いてくれなければ、わたしの方でもあなたの云うことを肯きませんよ。そこが、それ、魚心に水心とか云うんじゃないか。」

「だから、また出直してくる。きようは堪忍してくれ。もう七つを過ぎている。おれは急いで行かなければならない。」

「七つ過ぎには行かねばならぬ——へん、きまり文句ですね。」

大次郎はいよく焦れて来ました。

「これ、どうしても返さないか。」

「返しません。あなたが云うことを肯かなければ……。。」

云いかけて、女はきやつと云つて倒れました。そこにあつた徳利で眉間をぶち割られたのです。大次郎は徳利を持ったまゝで突つ立ちました。

「さあ、どこに隠してある。案内しろ。」

女の悲鳴をきいて、下から亭主や料理番や、ほかに三四人の男どもが駈けあがつて来ま

した。どうでこんな家うちですから、亭主はごろつきのような奴で、丁度仲間の木葉こつばごろが
 つまって奥で手なぐさみをしているところでしたから、すぐにどや／＼と駈けつけて来た
 のです。来てみると、この始末ですから承知しません。大事の玉を疵物にされては、侍で
 もなんでも容赦は出来ない。取っ捉まえて自身番へ突き出せと、腕まくりをして掴みかゝ
 る。それを突き倒して次の間へ飛び出すと、そこには夜具でも入れてあるらしい押入れが
 ある。もしやと思つて明けて見ると、果して自分の大小が夜具のあいだに押込んでありま
 した。手早くひき摺り出して腰にさすと、又うしろから掴み付く奴がある。なにしろ多勢
 に無勢ですし、こっちも少し逆上のぼせていますから、もうなんの考えもありません。大次郎
 は掴みつく奴を力まかせに蹴放して、また寄つて来ようとするところを抜撃ちに斬りまし
 た。

「わあ、人殺しだ。」

騒ぎまわる奴等をつゞいて二三人斬り倒して、大次郎は二階からかけ降りました。
 びっくりしている駕籠屋にむかつて、大次郎は叱るように云いました。

「いそいで吉原へやれ。」

駕籠屋も夢中でかつぎ出しました。

「実に飛んだことになったものですよ。」と、三浦老人はため息をついた。「大次郎という人はその足で吉原へ飛んで行つて、諸越花魁に逢つて、式のごとくに雷見舞の口上をのべて帰りました。帰つただけならはいゝのですが、屋敷へ帰つてから切腹したそうです。

相手が相手ですから、あるいは殺し得で済んだかも知れなかったのですが、兎も角それだけの騒ぎを仕出来したので、世間の手前、屋敷でも捨てゝ置かれなかったのか。それともお使に出た途中で、こんなことを仕出来しては申訳がないというので、当人が自分から切腹したのか。それとも表向きになつては雷見舞の秘密が露顕するといふので、当人に因果をふくめて自滅させたのか。そこらの事情はよく判りませんが、いずれにしても一人の侍がよし原へ雷見舞にやられて、結局痛い腹を切るようになったのは事実です。料理屋の方でも二人は即死、ほかの怪我人は助かったそうです。」

「まったく飛んだことになったものでした。」と、わたしも溜息をついた。「その後もその大名はよし原へ通つていたのですか。」

「いや、それに懲りたとみえて、その後は一切足踏み無しで、諸越花魁も大事のお客をとり逃してしまつたわけです。」

云いながら老人は老女の顔を横目にみた。わたしも思わず彼女の顔をみた。三人の眼が一度に出逢うと、老女はあわてゝ俯向いてしまった。しばしの沈黙の後に、老人は庭をみながら云った。

「さっきの雷で梅雨もあけたと見えますね。」
庭には明るい日が一面向にかゞやいていた。

下屋敷

一

その次に三浦老人をたずねると、又もや一人の老女が来あわせていた。但し彼女はこの間の「雷見舞」の女主人公とは全く別人で、若いときには老人と同町内に住んでいた人だと云うことであつた。

老人はかれを私に紹介して、この御婦人も色々の面白い話を知っているから、ちつと話して貰えと云うので、わたしはいつもの癖で、是非なにか聴かしてくださいと幾たびか催促すると、この老女もやはり迷惑そうに辞退していたが、とう／＼私に責め落されて、丁寧な口調でしずかに語り出した。

はい。年を取りますと、近いことはすぐに忘れてしまつて、遠いことだけは能く覚えているとか申しますけれど、矢張りそうも参りません。わたくし共のように年を取りますと、

近いことも遠いこともみんな一緒に忘れてしまいます。なにしろもう六十になりますんですもの、そろ／＼耄碌しましても致方がございません。唯そのなかで、今でもはつきり覚えて居りまして、雨のふる寂しい晩などに其時のことを考え出しますとなんだかぞつとずるようなことが唯^たつた一つございます。はい、それを話せと仰しやるんですか。なんだか忌^{いや}なお話ですけれども、まあ、わたくしの懺悔ながらに、これからぼつ／＼お話し申しましようか。

それは安政五年——午^{うま}年のことでございます。わたくしは丁度十八で、小石川巢鴨町の大久保式部少輔様のお屋敷に御奉公に上っております。お高は二千三百石と申すのですから、御旗本のなかでも歴々の御大身でございました。今のお若い方々はよく御存じでございますまいが、千石以上のお屋敷となりますと、それはそれは御富貴なもので、御家来にも用人、給人、中小姓、若党、中間のたぐいが幾人も居ります。女の奉公人にも奥勤めもあれば、表勤めもあり、お台所勤めもあつて、それも大勢居りました。わたくしは十六の春から奥勤めにあがりまして、あしかけ三年のあいだ先ず粗相も無しに勤め通して居りました。

安政午年——御承知の通り、大コロリの流行った怖ろしい年でございました。併しそれ

は重^{おも}に下町のことで、山の手の方には割合に病人も少のうございましたから、お屋敷勤めのわたくし共はその怖ろしい噂を聞きますだけで、そんなに怯えるほどのこともございせんでした。勿論、八月の朔^{ついたち}日から九月の末までに、江戸中で二万八千人も死んだと云うのでございますから、その噂だけでも実に大変で、さすがの江戸も一時は火の消えたように寂しくなりました。そう云うわけでございますから、その十一月には例年の通り猿若町の三芝居に役者の入替りはありましたが、顔見世狂言は見合せになりました。これから申上げますのは、その役者のお話でございます。

一体わたくしのお屋敷では、殿様を別として、どなたもお芝居が好きでございました。殿様は御養子で今年丁度三十でいらつしやるように承つて居りました。奥様は七つ違いの二十三で、御縁組になつてから既^もう六年になるそうですが、まだ御子様は一人もございせんでした。御先代の奥様は芳桂院様と仰せられまして、目黒の御下屋敷の方に御隠居なすつていらつしやいましたが、このお方が歌舞伎を大層好きでございまして、殊に御隠居遊ばしてからは世間に御遠慮も少いので、三芝居を替り目毎にかならず御見物なさると云うほどの御鼯^も肩でございました。そのお血をお引きになったのかも知れませんが、奥様もやはりお芝居が好きで、いつも芳桂院様のお供で御見物にお出掛けなさいました。殿様

は苦々しいことに思召していたに相違ありませんが、なにぶんにも家柄の低い家から御養子にいらつしやつたと云う怯味ひけみがあるので、まあ大抵のことは黙って大目に見ていらしたようでございます。それでも、芳桂院様は一度こんなことを仰せられたことがございました。

「わたしの生きている中うちはよろしいが、わたしの亡い後には女どもの芝居見物は一切止めさせたい。」

鳥渡ちよつとうけたまわりますと、なんだか手前勝手のお詞ことばのようにも聞えます。自分の生きているうちは芝居を見ても差支えないが、自分の死んだあとには誰も芝居を見てはならぬ——それほどに見て悪いものならば、御自分が先ずお見合せになったら好きそうなものだと、誰もまあ云いたくなります。まして芝居見物のお供を楽しみにしている女中達ですもの、誰だつてそれをありがたく聞くものではありません。わたくしにしても、恐れながら御隠居様が手前勝手の仰せのように考えて居りましたのは、全くわたくしどもの考えが至らなかつたのでございます。

芳桂院様は四月の末におなくなり遊ばして、目黒の方はしばらく空屋敷あきになつて居りましたが、その八月の末頃から奥様が一時お引移りということになりました。それは例のこ

ロリがだん／＼に本郷小石川の方へも拡がつてまいりましたので、今日で申せば転地というような訳で、御下屋敷おしもの方へお逃げになったのでございます。その当時、目黒の辺はまるで片田舎のようでもございましたから、流石のおそろしい流行病もそこまでは追掛けて来なかつたのでございます。奥様にはお氣に入りの女中が二人附いてまいりました。それはお朝あさという今年二十歳の女と、わたくしとの二人で、さびしい御下屋敷へ参るのはなかなか島流しにでも逢つたような心持も致しましたが、御上屋敷おかみよりも御下屋敷の方が御奉公もずっと氣樂でございます、万事が窮屈ありません。もう一つには、例のコロリの噂を聞かないだけでも心持がようございます。かたがたして、わたくし共も別に厭だとも思わないで、奥様のお供をしてまいりました。御下屋敷には以前からお留守居をしている稲瀬十兵衛という老人のお侍夫婦のほかにも、お竹とお清きよという二人の女中が居りました。そこへわたくし共がお供をして参つたのですから、御下屋敷の女中は四人になったわけで、急に賑やかになりました。

併しそのお竹とお清とは、どちらも御知行所ごちぎやうしよから御奉公に出ましたもので、江戸へ出るとすぐに御下屋敷の方へ廻されたのですから、まあ山出しも同様で江戸の事情などはなんにも知らないようでした。大勢の女中の中からわたくしども二人がお供に選ばれました

のは、前にも申上げた通り、奥様のお気に入り、いつも芝居のお供をしていたからでございましょう。目黒へまいってからも、奥様はわたくし共をお召しなすって、毎日芝居のお話をなすっていらつしやいました。わたくし共も喜んで役者の噂などをいたして居りました。

わたしの亡い後は——と、芳桂院様が仰しやつても矢はりそうはまいりません。芳桂院様がおなくなりになった後でも、奥様はたび／＼お忍びで猿若町へお越しになりました。わたくし共もそれを樂みに御奉公致して居るようなわけでございました。目黒へまいりましてから、一月ばかりは何事もございせんでしたが、忘れも致しません、九月の二十一日の夕方でございました。わたくしがお風呂を頂いて、身化粧みじまいをして、奥へまいりますと、奥様は御縁の端はなに出て、虫の声でも聞いていらつしやるかのように、じっと首をかしげていらつしやいました。なにしろ、あの辺のことでございますし、御下屋敷の方は御手入れも自然怠り勝ほのになつて居りますので、お庭には秋草が沢山にしげっていて、芒すすきの白い花がゆう闇のなかに仄かに揺れていたのが、今でもわたくしの眼に残っております。

「町や。」と、奥様はわたくしの名をお呼びになりました。「朝はどうしています。」

「わたくしと入れ替つて、お風呂を頂いて居ります。」

奥様はだまつて首肯いていらつしやいましたが、やがて低い声で、こう仰しやいました。
「町や、お前は浅草に知合いの者が多かるう。踊の師匠も識っていますね。」

「はい、存じて居ります。」

わたくしは花川戸の坂東小翫という踊の師匠に七年ほど通いまして、それを云い立てに御奉公にあがつたくらいでございますから、勿論その師匠をよく存じて居ります。師匠はもう四十二三の女で、弟子も相当にございました。その弟子のうちに市川照之助という若い役者のあることを、わたくしから奥様にお話し申上げたこともございました。奥様は今夜それを不意に仰せ出されまして、お前はその照之助を識っているかと云うお訊ねでございましたが、実のところ、わたくしはその照之助をよく識らないのでございます。いえ、舞台の上ではたび／＼見て居りますけれども、わたくしが師匠をさがる少し前から稽古に来た人ですし、男と女ですから沁々と口を聞いたこともありませんし、唯おたがいに顔をみれば挨拶するくらいのこと、同じ師匠の格子をくゞりながらも、ほんの他人行儀に付き合っていたのですから、先方ではもう忘れているかも知れないくらいです。で、わたくしは其通りのことを申し上げますと、奥様は黙つて少し考えていらつしやいましたが、又こう仰しやいました。

「お前はよく識らないでも、その師匠は照之助をよく識っていきましょうね。」

「それは勿論のことでございます。」

奥様はわたくしを頤でお招きになりまして、御自分のそばへ近く呼んで、その照之助に一度逢うことは出来まいかという御相談がありました。わたくしも一時は返事に困って、なんと申上げてよいか判りませんでした。唯今とは違ひまして、その時分の人間は主命ということは大変に重いものと考えて居りましたのと、わたくしもまだ年が若し、根が浅^あ薄^さな生れ附きでございますのと、とう／＼其役目を引受けてしまったのでございます。約^つりわたしから師匠の小翫^{つま}にたのんで、師匠から照之助に話して貰つて、照之助をこの御下屋敷へ呼ぼうと云うのでございます。

照之助というのは、そのころ二十一^{おやま}二の女形で、二町目——市村座でございます——に出て居りましたが、年が若いのと家柄が無いせいでございましょう。余り目立った役も付きませんで、いつもお腰元か茶屋娘ぐらいが関の山でしたが、この盆芝居の時にどうしてか、おなじお腰元でも少し性根のある役が付きまして、その美しい舞台顔がわたくしどもの眼に初めてはつきりと映りました。奥様も可愛らしい役者だと褒めておいでになりました。今になつて考えますと、この御下屋敷へ御引移りになりましたのも、コロリの為ばかり。

りではなかったのかも知れませんが。全くその照之助と申しますのは、少し下膨れの、眼つきが美しい、まるでほんとうの女かと思われるような可愛らしい男でございました。

奥様は手文庫から二十両の金を出して、わたくしにお渡しになりました。これは照之助に遣るのではない、その橋渡しをしてくれる師匠に遣るのだと云うことでございました。そこへお朝が風呂から帰ってまいりましたので、お話はそのままになりました。

わたくしはその明る日、すぐに浅草の花川戸へまいりまして、むかしの師匠の家をたずねました。そうして、ゆうべの話を竊^{そく}といたしますと、小翫も一旦は首をかしげていました。それは相手が武家の奥方であるのと、もう一つには、わたくしの年がまだ若いので何をいうのかと疑っているのです、すぐにはなんとも挨拶をしないらしく見えましたから、わたくしは袱紗につゝんだ金包みを出して師匠の眼の前に置きました。二十両——その時分には実に大金でございます。師匠もそれをみて安心したのでしょうか。安心というよりもその大金をみて急に慾心が起つたのでしょうか。わたくしの云うことを信用して、それから真面目に相談相手になってくれました。

「照之助さんもこれから売出そうと云うところで、懐がなか／＼苦しいんですからね。そこを奥様によくお話してください。」

どうせ金の要るのは判り切っていることですから、わたくしも承知して別れました。今おもえば実に大胆ですが、そのときには使者の役目を立派につとめ負^{おお}せたという手柄自慢が胸一杯になって、わたくしは勇ましいような心持で目黒へ帰りました。帰って奥様に申上げると、奥様も大層およろこびで、その御褒美に縮緬のお小袖を下されました。

「朝に申しても宜しゅうございますか。」と、わたくしは奥様にうかがいました。ほかの女中は兎もあれ、お朝には得心させて置かないと、照之助を引き込むのに都合が悪いと思つたからでございます。奥様もそれを御承知で、朝にだけは話してもよいと仰しいました。お朝も奥様の前へ呼ばれまして、幾らかのお金を頂戴しました。

二

それから五日ほど経つて、わたくしが花川戸へ様子を訊きにまいりますと、師匠はもう照之助に吹き込んで置いてくれたそうで、いつでも御都合のよい時にお屋敷へうかがいますと云う返事でございました。では、あしたの晩に来てくれという約束をいたしまして、わたくしは今日も威勢よく帰って来ました。すぐに奥様にそのお話をして、それから自分

の部屋へ退つてお朝にも竊^{そつ}と耳打ちを致しますと、お朝はなぜだか忌^{いや}な顔をしていました。その明る日——わたくしは朝からなんだかそわ／＼して気が落着きませんでした。奥様は勿論ですが、自分も髪をゆい直したり、着物を着かえたり、よそ行きの帯を締めたりして、一生懸命にお化粧^{つくり}をして、日の暮れるのを待つていました。お朝はきょうも厭な顔をしていました。

「わたしはなんだか頭痛がしてなりません。もしやコロリにでもなつたんじや無いかしら。」

「まさか。」と、わたくしは笑いました。「今夜は照之助が来るんじやありませんか。おまえさんも早く髪でも結い直してお置きなさいよ。照之助はおまえさんの御鼈^{かめ}肩役者じやありませんか。」

お朝は黙っていました。お朝も盆芝居から照之助を大変に褒めていることを知っていますから、わたくしも笑いながら斯う云つたのですが、お朝は莞爾^{にこり}ともしませんでした。お朝はどちらかと云えば大柄の、小ぶとりに肥つた女で、色も白し、眼鼻立もまんなざら悪くないのですが、疱瘡のあとが顔中に薄く残つて、俗に薄いもという顔でした。とりわけて眉のあたりにその痕が多く残っているの、眉毛は薄い方でした。ほんとうのあばた面さ

え沢山にある時代ですから、薄いもぐらいはなんでもありません。誰も別に不思議には思っていないんですけど、当人はひどくそれを気にしているらしく、時々鏡を見つめて悲しそうに嘆息ためいきをついていることがあるので、わたくしもなんだか可哀そうに思ったことも度々ありました。お朝は今日も、その鏡を見つめたときと同じような悲しい顔をして、いつまでも黙っていました。

「おまえさん。今夜は照之助が来るんですよ。」と、わたくしは少しはしゃいだ調子で、お朝の肩を一つ叩きました。なんとという蓮葉なことでございましょう。今考えると冷汗が出ます。

「奥様のところへ来るんじゃないやありませんか。」と、お朝は口のうちで云いました。

「そりやあたりまえさ。可いじやありませんか。」と、わたくしは又笑いました。わたくしは朝から無暗に笑いたくって仕様がなかったので、お朝をその相手にしようと思って、さつきから色々に誘いかけるのですが、お朝はどうしても口脣くちびるを解ほぐしませんでした。わたくしが笑えば笑うほど、お朝の顔はだんくに陰くもって来て、碌々に返事もませんでした。

「今夜は四つ（午後十時）を相図に、照之助はお庭の木戸口へ忍んで来るから、木戸をあけてすぐに奥へ連れて行くんですよ。よござんすか。」と、わたくしは低い声で話しました。

「わたしは気分が悪くっていけないから、今夜の御用は勤められないかも知れません。お前さん、何分たのみます。」と、お朝は元氣のない声で云いました。

気分が悪いと云うのですからどうも仕方ありません。わたくしもよんどころなしに黙ってしまいました。秋の日は短いと云いますけれども、きょうの一日はなか／＼暮れませんでした、わたくしは起ったり居たりして、日のくれるのを待っていました。どうも自分の部屋にじつと落着いていられないので、わたくしはお庭口から裏手の方へふら／＼出て行きますと、うら手の井戸のそばにお朝がぼんやりと立っていました。時刻はもう七つ（午後四時）下りでしたらう。薄いゆう日が丁度お朝のうしろに立っている大きい柳の瘦せた枝を照らして、うす白く枯れかゝったその葉の影がいよ／＼白く寂しくみえました。そこらの空地には色のさめた葉鶏頭が将棋倒しに幾株も倒れていて、こおろぎが弱い声で鳴いていました。お朝は深い井戸を覗いているらしゆうございましたが、その澄んだ井戸の水には秋の雲が白く映ることをわたくし共は知っています。お朝も屹きつとその雲の姿をながめているのであらうと推量しましたので、別に嚇おどかして遣らうという積りでもありませんでしたが、わたくしはなんとこの気もなしに拔足をして、そつと井戸の方へ忍んで行きますと、お朝は気がついて振向きました。薄いものの白い顔が洗われたように夕日に光っている

のは、今まで泣いていたらしく思われたので、わたくしもびっくりしました。まさか身を投げる積りでもありませんまい。第一になぜ泣いているのか、その理窟が呑み込めませんでした。お朝はわたくしの顔をみると、すぐに眼をそむけて、黙って内へ這入ってしまいました。わたくしは少し呆氣あつけに取られて、そのうしろ姿を見送っていました。

どうにか斯うにか長い日が暮れて、わたくしはほっとしました。併しこれから大切な役目があるのですから、どうしてなか／＼油断はなりませんでした。わたくしはお風呂へ這入って、いつもよりも白粉を濃く塗りました。だん／＼暗くなるに連れて、わたくしは自然に息が喘はづんで、なんだか顔が熱ほてつて来ました。照之助が来る——それが無暗に嬉しいのですが、なぜ嬉しいのか判りませんでした。自分のところへお婿が来る——その時には丁度こんな心持ではないかと思われました。お朝はいよく／＼気分が悪くなったと云って、夕方からとう／＼夜具をかぶってしまいました。ほかの女中——お竹とお清とは、前にも申した通りの山出しですから心配はありませんが、ただ不安心なのは留守居の侍の稲瀬十兵衛夫婦でございます。女房の方は病身で、その上に至極おとなしい人間ですから、あまり気を置くこともないのですが、夫の方は——これも正直一方で、眼先の働く人間ではあり

ませんが、それでも一人前の侍ですから、うつかり氣を許すわけには行きません。わたくしは唯それを心配していますと、その十兵衛は宵からどこへか出て行ってしまうました。女房の話によると、なにか親類に不幸が出来たとかいうのです。なんという都合の好いことでしょう。わたくしは手をあわせて遠くから浅草の観音様を拝みました。そのことを奥様に申し上げますと、奥様も黙って笑っておいでになりました。奥様はどんなお心持であつたか知りませんが、わたくしは襟許がぞくぞくして、生れてから今夜ぐらい嬉しいことはないように思われました。

そのうちに約束の刻限がまいりました。生憎に宵から陰くもって、今にも泣き出しそうな暗い空模様になりましたが、たとい雨が降つても照之助は来るに相違ありませんから、天氣のことなどは余り深く考えてもいませんでした。不動様の四つの鐘のきこえるのを相図に、わたくしは竊そつとお庭に出て、木戸の口に立番をしていますと、旧曆の九月ももう末ですから、夜はなか／＼冷えて来て、広いお庭の闇のなかで竹藪が時々にがさ／＼と鳴る音が寒そうにきこえます。お屋敷の屋根の上まで低く掩いかゝった暗い大空に、五位鷺の鳴いて通るのが物すごく聞えます。これがふだんならば、臆病なわたくしには迎とても辛抱は出来そうもないのですが、今夜はいつもと違って氣が一ぱいに張りつめています。幽霊

の冷たい手で一度ぐらい顔を撫でられても驚くものではありません。わたくしは息をつめて、その人の来るのを今か今かと待設けていました。

振返つてみますと、奥様の御居間の方には行燈の灯がすこし黄く光っていました。その行燈の下で奥様はなにか草雙紙でも御覧になっている筈ですが、どんなお心持でその草雙紙を読んでいらつしやるか、わたくしにも大抵思いやりが出来ます。それにつけても、照之助が早く来てくれゝば可いと、わたくしも顔を長くして耳を引立てゝいますと、どこやらで犬の吠える声が時々にかええますが、人の跽音らしいものは聞えません。勿論、日が暮れてからは滅多に往來のある所ではございせんから。

そのうちに、低い跽音——ほんとうに遠い世界の響きを聞くような、低い草履の音が微かに聞えました。わたくしははつと思うと、からだか急に赫^{かつ}と熱^{ほて}つてまいりました。些^{ちつ}とも油断しないで耳を立てゝいますと、案の通りその跽音は木戸の外へひたゝと寄つて来ましたので、さつきから待兼ねていたわたくしは、すぐに木戸をあけて暗いなかを透して視ますと、そこには人が立っているようでした。

「照之助さんでございますか。」

わたくしは低い声で訊きました。

「左様でございます。」

外でも声を忍ばせて云いました。

「どうぞこちらへ。」

照之助は黙つて竊^{そつ}と這入つて来ましたので、わたくしは探りながらその手を把^とつて、お居間の方へ案内してまいりました。照之助もなんだか顫えているようでしたが、わたくしは全く顫えまして、胸の動悸がおそろしいほどに高くなつてまいりました。五位鷺がまた鳴いて通りました。

奥様はわたくしに琴を弾けと仰しやいました。それは十兵衛の女房や、ほかの女中二人に油断させる為でございます。わたくしはあとの方に引き退つて、紫縮緬の羽織の襟から抜け出したような照之助の白い頸筋を横目にみながら、おとなしく琴をひいて居りましたが、なんだか手の先がふるえて、琴爪が糸に付きませんでした。奥様は照之助と差向いで、芝居のお話などをしていらつしやいました。

唯それだけのことでございます。全くそれだけのことでございました。それが物の半時とは経ちません中に、大変なことが出^{しゅったい}来いたしました。いつの間にどうして忍んで来

たのか知りませんが、彼の稲瀬十兵衛が真先に立つて、ほかの四人の侍や若党がこのお居間へつか／＼と踏み込んでまいりました。それはみんな御上屋敷の人達でございます。わたくしは眼が眩むほどに驚きまして、思わず畳に手をついてしましますと、侍達は無言で照之助の両手を押さえました。もうどうする事も出来ません。わたくしは竊そつと眼をあげてうかゞいますと、奥様は真蒼な顔をして、口脣くちびるをしつかり結んで、たゞ黙つて坐つておいでになりました。照之助の顔色はもう土のようになって、身動きも出来ないように竦んでいますのを、侍達はやはり無言で引立てゝ行きました。出てゆく時に、照之助は救いを求めるような悲しい眼をして、奥様とわたくしの方を二度見かえりましたが、わたくし共にも今更どうすることも出来ないのです、唯だまつて見送つていますと、侍たちは照之助を引立てゝ縁伝いにお庭口へ降りて、横手の方へ連れて行くようでございました。わたくしも不安心で堪りませんから、そつと起ち上つてお庭へ降りました。照之助がどうなるのかその行末が見とゞけたいので、跽音をぬすんで怖々にそのあとをつけて行きますと、なにしろ外は真暗なので、侍達もわたくしには気が注つかないらしゅうございました。

御座敷の横手には古い土蔵が二棟つゞいて居ります。照之助はその二番目の土蔵の前へ連れてゆかれますと、土蔵の中にはさつきから待受けている人があるとみえて、手燭の灯

が小さくぼんやりと点っていました。わたくしも奥様の御用で二三度この土蔵のなかへ這入ったことがございますが、御屋敷の土蔵だけに普通の町家のよりもずっと大きく出来て居りまして、昼間でも暗い冷たい厭なところでございます。中には大きい蛇が棲んでゐるとか云つて、お竹やお清に嚇されたこともありましたが、その暗い隅にはまったく蛇でも棲んでいそうに思われました。照之助はその土蔵のなかへ引き摺り込まれたので、わたくしは少し不思議に思いました。

もしこの河原者を成敗するならば、裏手の空地へでも連れ出しそうなものです。なぜこの土蔵の中までわざわざ連込んだのかと見ていますと、侍のひとりが奥にある大きい長持の蓋をあけました。その長持はわたくしも知つて居ります。全体が溜塗りのようになつていて、角々には厚い金物が頑丈に打付けてございます。わたくしも正面から平氣でのごく訳にはまいりません、壁虎やもりのように扉のかけに小さく隠れて、そつと隙見を致しているのですから、暗い土蔵の中はよく見えません。唯ただつた一つの手燭の灯が大勢の袖にゆれて、時々に見えたり隠れたりしているかと思ううちに、その長持の蓋を下す音が高くきこえました。つゞいて錠を下すらしい金物の音ががちくと響きました。そのおそろしい音がわたくしの胸に一々強くひびいて、わたくしはもう息も出ないようになりました。そのうち

に侍達は自分の仕事を済ませて、奥からだんくに出て来るようですから、わたくしは顫える足を引き摺って早々に逃げて帰りました。そうして、もとの御居間の縁さきから這い上つて、怖々に内を覗いてみますと、燈火は瞬きもしないで静かに御座敷を照らしているばかりで、そこに奥様のお姿は見えませんでした。あとで聞きますと、奥様は彼の十兵衛が御案内して、御門の外に待つてゐる御駕籠に乗せられて、すぐに御上屋敷の方へ送り帰されたのだそうでございます。

照之助は長持に押込まれて、土蔵の奥に封じ籠められてしまいました。奥様は上屋敷へ送られてしまいました。その次にはわたくしの番でございます。どうなることかとその晩はおちく／＼眠られませんでした。その怖ろしい一夜があげますと、又こゝに一つの事件がしゅったい出しゅ来たいしていました。お朝が裏手の井戸に身を投げて死んでいたのでございます。いっどうして死んだのか判りません。ひよつとすると、照之助のことが露顕したのは、お朝が十兵衛に密告したのではないかとも思われますが、証拠のないことですから、なんとも申されません。

わたくしはなんの御咎めも無しに翌日長のお暇になって、早々に親許へ退りましたが、照之助はどうになりましたか、それは判りません。生きたまゝで長持に封じ籠められて、そ

れぎり世に出ることが出来ないとすれば、あまりに酷たらしいお仕置です。わたくしが奥様のお使さえ勤めなければ、こんなことも出来しなかったのでございましょう。ほんとうに飛んでもない罪を作ったと一生悔んでおります。それ以来、芝居というものがなんだか怖ろしくなりまして、わたくしはもう猿若町へ一度も足を踏み込んだことはございませんでした。師匠の小翫の話によりますと、照之助の美しい顔はそれぎり舞台に見えないと申します。

それから三年ほどの後に、わたくしは不動様へ御参詣に行きましたので、そのついでに御下屋敷の近所まで竊^{そつ}と行ってみますと、御屋敷は以前よりも荒れまさっているようでしたが、二棟の土蔵はむかしのまゝに大きく突つ立つて、古い瓦の上に鴉が寒そうに啼いていました。その土蔵の長持の底には、美しい歌舞伎役者が白い骨^{こつ}になって横わっているかと思うと、わたくしは身の毛がよだつて逃げ出しました。

こゝまで話して、老女はひと息つくと、三浦老人は代つて註を入れてくれた。

「いつぞや梅暦のお話をしたことがあるでしょう。筋は違うが、これもまあ同じようなきさつで、むかしの大名や旗本の下屋敷には色々の秘密がありましたよ。」

矢がすり

一

ある時に、三浦老人は又こんな話をして聴かせた。それは近ごろ矢場やばというものがすっかり廃れて、それが銘酒屋や新聞縦覧所に変ってしまったという噂が出たときのことである。明治以後でも矢場は各所に残っていて、いわゆる左り引きの姐さん達が白粉の匂いを売物にしていたのであるが、日清以後からだん／＼に衰えて、このごろでは殆どその後を絶ったなどという話も出た。その末に、老人はこう云った。

矢場女と一口に云いますけれど、江戸のむかしは、矢場女や水茶屋の女にもなか／＼えらいのがありまして、何処の誰といえど世間にその名を知られているのが随分あったものです。これは慶応の初年のことですが、そのころ芝の神明の境内にお金きんという名代の矢場女がありました。店の名を忘れましたが、当人は矢がすりという綽名をつけられて、容貌きりよのいゝのと、腕があるのとで近所は勿論、浅草あたりの矢場遊びの客までも吸いよせ

るという人気はすさまじいものでした。

この女がなぜ矢飛白やがすりという綽名をつけられたかと云うと、すぐれて容貌がよく、こんな稼業にはめずらしい上品な女なのですが、玉に疵きずというのは全くこのことでしよう。右の頬に薄いかすり疵のあとがあるのです。当人の話では、射塚あすちの下へ矢を拾いに行つたときに、悪戯いたづらか粗相か、客の射出した矢がうしろから飛んで来て、なにごころなく振向いたお金の頬をかすつたのでこんな疵になつたと云うのでした。矢とりの女の尻を射るのは時々遣る悪戯ですが、顔を射るのはひどい。たとい小さい擦り疵にしても、あの美しい顔に疵をつけるとはとんだ罪を作つたものだ、と、蟲眞連はしきりに同情する。それがまた人氣の一つになつて、誰が云い出したともなく、矢がすりという綽名をつけられるようになったのです。

そのうちに、当人が自分でかんがえ出したのか、それとも誰かが智恵をつけたのか、お金は矢飛白の着物を年中着ていることになりました。つまりは顔の矢がすりを着物の矢飛白こじつけに附つ会ひてしまつたわけで、矢飛白の着物をきているから矢飛白お金というのだらうと、早呑込みをする人もだん／＼多くなつて、顔の矢がすりか、着物の矢飛白か、あだ名の由来もはつきりとは判らなくなつてしまいました。いずれにしても、矢がすりお金といえ

神明第一の売っ子で、この店はいつも大繁昌、楊弓ようきゆうの音の絶える間がないくらいでした。

そうになると又おせっかいに此女の身許を穿せんさく索するものがある。お金のおやじはこゝらの矢場や水茶屋へ菓子を売りにくる安兵衛という男で、そのひとり娘、そういう因縁から自分も肩あげの取れない時分から矢取女になったのだそうで、おやじは二三年前に世を去って、今ではおふくろだけが残っている。お金は今年二十歳だと云っているが、ほんとうは一つ二つぐらいも越しているだろうという評判。いや、年の方は一つや二つ違つたところで、差したる問題でもないのですが、一体このお金に亭主があるか無いか、勿論、表面向きの亭主は無いにきまつているが、いわゆる内縁の亭主とか、色男とか旦那とかいうようなものがあるか無いか、それを念入りに探索する人もあつたのですが、どうも確かなことは判らない。ところが、この慶応元年の正月頃から一人のわかい侍がこの矢場へ時々遊びに来ました。

侍も次三男の道楽者などは矢場や水茶屋這入りをするのはめずらしくない。唯それだけでは別に問題にもならないのですが、その侍はまだ十八九で、人品も好い、男振りもすぐれて好い。そうして、彼のお金となんだか仲好く話しているというのですから、これは何

うしても見逃されません。朋輩の女もすぐに眼をつける、出入りの客や地廻り連も黙ってはいない。あいつは何うも可怪^{おか}しいという噂がたちまちに拡まってしまいました。

「あのお客はどこのお屋敷さんだえ。」と朋輩が岡焼半分に訊いても、お金は平気でいました。

「どこの人だか知るものかね。」

こう云つて澄ましているのですが、どうも一通りの客ではないらしいという鑑定で、お金はあの若い侍と訳があるに相違ないと決められてしまつて、「あん畜生、うまく遣つていやあがる。」とか、「あの野郎、なま若え癖に、太え奴^{ふて}だ。」とか、地まわり連のうちには随分憤慨しているのもありました。なにしろ相手は侍ですから無暗に喧嘩を吹つかけるわけにも行かないので、横眼で睨んで店さきを通りながら何か当てこすりの鼻唄でも歌つて行くぐらいのことでした。そのうちにお金が神明から姿を消してしまつたので、近所の騒ぎはまた大きくなりました。主人の家でもおどろいて、取りあえず片門前に住んでいるおふくろの所へ聞きあわせに遣ると、おふくろも知らないで、唯おどろいているばかりです。

「お金の奴め、とう／＼あの侍と駈落をきめやあがつた。」

近所ではその噂で持切っていました。なにしろ神明で評判者の矢飛白が不意に消えてなくなつたのですから、やれ駈落だの心中だのと、それからそれへと尾鰭をつけて色々のことを云いふらす者もあります。とりわけて心配したのは矢場の主人^{あるじ}で、呼び物のお金がいなくなつては早速に商売に障るので、心あたりをそれ／＼に詮議しましたが何うも判らない。勿論その若侍もそれぎり姿をみせない。それから考えると、どうしてもその若侍がお金をさそい出したものと思われるのも無理はありません。

それから一月あまりも過ぎて、三月はじめの暖かい晩のことです。彼の若侍がふらりと遣つて来て、神明の境内をひやかして歩いて、お金の矢場の前に立つたのを、地廻り連が見つけたので承知しません。殊にそのなかには二三人のごろつきもまじっていたから、猶たまりません。

「ひとの店の女を連れ出せば 拐^{かどわかし}引^ひだ。二本指でも何でも容赦が出来るものか。」

こんなことを云つて喉^{けし}かけるから、いよく騒ぎは大きくなります。大勢は侍を取り囲んで、お金の店のなかへ引摺り込みました。侍はおとなしい人でしたが、町人の手籠め同様に逢つては、これも黙つてはいません。

「これ、貴様たちは何をするのだ。」

「なにをするものか。さあ、こゝの店の矢がすりを何処へ隠した。正直にいえ。」

「矢飛白をかくした……。それはどういうわけだ。」

「えゝ、白ばつくれるな。正直に云わねえと、侍でも料簡しねえぞ。早く云え、白状しろ。」

「白状しろとは何だ。武士にむかつて無礼なことを申すな。」

「なにが無礼だ。かどわかし野郎め。ぐず／＼していると袋叩きにして自身番へ引渡すぞ。」

相手が若いので、幾らか馬鹿にする気味もある。その上に大勢をたのんで頻りにわや／＼騒ぎ立てるので、若い侍はだん／＼に顔の色をかえました。店のおかみさんも見かねたように出て来ました。

「まあ。どなたもお静かにねがいます。店のさきで騒がれては手前共が迷惑いたします。」
口ではこんなことを云っていますが、その実は自分がごろつき共を頼んでこの若侍をひき摺り込ませたのですから、騒ぎの鎮まる筈はありません。大勢は若侍を取り囲んで、矢飛白のありかを云え、お金のゆくえを白状しろと責めるのです。そのうちに弥次馬がだん／＼にあつまつて来て、こゝの店さきは黒山のような人立になりました。

「あいつが矢飛白をかどわしたのだそうだ。見かけによらねえ侍じゃあねえか。」

「おとなしそうな面をしていて、呆れたものだ。」

色々の噂が耳に這入るから、侍ももう堪らなくなりました。身分が身分、場所が場所ですから、初めはじつと我慢していたのですが、なにを云うにも年が若いから、斯うなると幾らか逆上^{のぼせ}しても来ます。侍は眼を据えて、自分のまわりを取りまいてゐる奴等を睨みつけました。

「場所柄と存じて堪忍していれば、重々無礼な奴。もう貴様たちと論は無益だ。道をひらいて通せ、通せ。」

持つてゐる扇で眼さきの二三人を押退けて、そのまゝ店口から出て行こうとすると、押退けられた一人がその扇をつかみました。侍はふり払おうとする。そのうちに誰かうしろから侍の袖をつかむ奴があるから、侍は又それを振払おうとする。そのなかに悪い奴があつて、侍の刀を鞘ぐるみに抜き取ろうとする。侍もいよく堪忍の緒を切つて、持つてゐる扇をその一人にたゞき付けたかと思うと、いきなりに刀をひきぬいて振りまわした。

「それ抜いたぞ。」

抜いたらば早く逃げればいゝのですが、大勢の中にはごろつきもいる。喧嘩好きの奴も

いるので、相手が刀をぬいたと見てその腕をおさえ付けようとする者がある。下駄をぬいで撲ろうとする者がある。ひどい奴はどこからか水を持って来て、侍の顔へぶっかけるのがある。こうなると、若い侍は一生懸命です。もう何の容赦も遠慮もなしに、抜いた刀をむやみに振りまわして、手あたり次第に斬りまくる。たちまちに四五人はそこに斬り倒されたので、流石の大勢もぱつと開く。その隙をみて侍は足早にそこを駆け抜けてしまいました。

「人殺しだ、人殺しだ。」

たゞ口々に騒ぎ立てるばかりで、もうその跡を追う者もない。侍のすがたが見えなくなつてから、騒ぎはいよゝ／＼大きくなりました。なにしろ即死が三人手負が五人で、手負のなかにもよほど手重いのが二人ほどあるのですから大変です。勿論、式の通り^{かた}に届けて検視をうけたのですが、その下手人は誰だか判らない。場所が場所ですから、神明の八人斬というので、忽ち江戸中の大評判になりました。

お金のおふくろのお幸こうというのが今度の事件について先ずお調べを受けました。神明の境内で起った事件ですから、寺社奉行の係です。彼の若侍がお金を連れ出したという疑いから、こんな騒動が持ちあがったのですから、どうしてもお金とその侍との関係を詮議する必要があります。そうすれば、自然にお金のゆくえも判り、侍の身許もわかるに相違ないというので、お金のおふくろは片門前の裏借家から家主いえぬし同道で呼び出されました。

お金の主人から問い合せがあつた時には、お幸はなんにも知らないようなことを云つていました。今度の呼び出しを受けても、最初はやはり曖昧のことを云つていたのですが、だん／＼に吟味が重なつて来ると、もう隠してもいられないので、とう／＼正直に申立てました。お金は桜井衛守えもりという三百五十石取りの旗本のむすめで、彼の矢がすりには斯ういう因縁があるのでした。

桜井衛守というのは本所の石原に屋敷を持つていて、弓の名人と云われた人でした。奥さまはお睦むつと云つて夫婦のあいだにお金と庄之助という子供がありました。衛守という人も立派な男振り、お睦も評判の美人、まことに一对の夫婦と羨まれていたのですが、どういふ魔がさしたのか、その奥様が用人神原伝右衛門のせがれ伝蔵と不義を働いていることが主人の耳にも薄々這入つたらしいので、ふたりも落ちついてはいられません。伝蔵の

身よりの者が奥州白河にあるので一先ずそこへ身を隠すつもりで、内々で駈落の支度をしていました。その時、伝蔵は二十歳、奥さまのお睦は二十三で、むすめのお金は年弱の三つ、弟の庄之助はこの春生れたばかりの赤ん坊であつたそうです。

年下の家来と駈落をするほどの奥様でも、ふだんから姉娘のお金をひどく可愛がつっていたので、この子だけは一緒に連れて行きたいという。これには伝蔵もすこし困つたでしょうが、なにしろ主人で年上の女のことですから、結局承知してお金だけを連れ出すことになりました。十二月の十三日、きようは煤はきで屋敷中の者も疲れて眠っている。その隙をみて逃げ出そうという手筈で、男と女は手まわりの品を風呂敷づつみにして、お金の手をひいて夜なかに裏門からぬけ出しました。年弱の三つという女の児を歩かせてゆくわけには行きませんから、表へ出るとお睦はお金を背中に負いました。伝蔵は荷物を背負しよいました。大川づたいに綾瀬かみの上へまわつて、千住から奥州街道へ出るつもりで、男も女も顔をつゝんで石原から大川端へ差しかゝると、生憎に今夜は月があかるいので、駈落をするには都合のわるい晩でした。おまけに筑波おろしが真向まともに吹きつけて来る。ふたりは一生懸命にいそいでゆくと、うしろで犬の吠える声がきこえる。人の跣音もきこえました。脛に疵持もつふたりは若もや追手かと胸を冷したが、なにぶんにも月が明るいので何うする

ことも出来ない。むやみに急いで多田の薬師の前まで来ると、うしろから弦の音が高くきこえて、伝蔵は背中から胸へ射徹されたから堪りません。そのまゝぱったり倒れました。お睦はおどろいて介抱しようとするところへ、二の矢が飛んで来てその襟首から喉を射ぬいたので、これも二言と云わずに倒れてしまいました。

不義者ふたりを射留めたのは、主人の桜井衛守です。かねて二人の様子がおかしいと眼をつけていたので、弓矢を持つてすぐに追いかけて来て、手練の矢先で難なく二人を成敗してしまつたのです。伝蔵もお睦も急所を射られて、ひと矢で往生したのですが、おふくろに負われていたお金だけは助かりました。しかしお睦の襟首に射込んだ矢がお金の右の頬をかすつたので、矢疵のあとが残りしました。お金が真直に負おふわれていたら、おふくろと一緒に射徹されてしまつたかも知れなかつたのですが、子供のことでですから半分眠つて、首を少しく一方へかしげていた為に、かすり疵だけで済んだのでした。

不義者を成敗したのですから、桜井さんには勿論なんの咎めありません。用人の神原伝右衛門はわが子の罪をひき受けて切腹しました。これでこの一件も落着いたので、さてそのお金という娘の始末です。わが子はあるが、不義の母が連れ出した娘であると思うと、桜井さんはどうも可愛くない。殊にその頬に残っている矢疵を見るたびに忌いやな心

持をさせられるので、思い切って屋敷から出してしまふことにしました。表面は里子に出すということにして、その実は音信不通の約束で、出入りの植木屋の万吉というものに遣ったのですが、その万吉も女房のお幸も氣だての善い^い者で、すべての事情を承知の上でお金を引き取って、うみの娘のように育てゝいるうちに、亭主の万吉が早く死んだので、お幸はお金を連子にして神明の安兵衛のところへ再縁しました。安兵衛は神明の矢場や水茶屋へ菓子を売りにゆくので、その縁でお金も矢場へ出るようになった。それは前にも申し上げた通りです。

お幸は亭主運のない女で、前の亭主にも早く死別れ、二度目の亭主の安兵衛にも死別れて、今では娘のお金ひとりを頼りにしていましたが、昔の約束を固く守って、彼の矢疵の因縁はお金にも話したことはありません。子供のときに吹矢で射られたなどと好い加減のことを云い聞かせて置いたので、お金も自分の素性を夢にも知らなかったのです。そのうちに、今年の春になつて突然彼の若侍がたずねて来ました。若侍はお金の弟の庄之助で、その当時はまだ当歳の赤児でしたが、だん／＼生長するにつれて、母のことや姉のことを知りましたが、植木屋の万吉はもう此世を去り、その女房はどこへか再縁してしまつたというので、姉のありかを尋ねる手がかりも無かつたのです。この庄之助という人は姉弟思

いで、子供のときに別れた姉さんに一度逢いたいと祈っていると、今年十九の春になって、神明の矢場に矢がすりお金という女があることを、不図聞き出しました。

類に矢疵があると云い、その名前といい、年頃といふ、もしやと思つて竊^{そつ}と見にゆくと、どうもそれらしく思われたが、迂濶にそんなことを云い出すわけにも行かないので、たゞ一通りの遊びのように見せかけて、幾たびか神明通いをした上で、だん／＼にお金とも馴染になつて、その実家は片門前にあることや、おふくろの名はお幸ということなどを確かめたので、ある日片門前の家へたずねて行つて、おふくろのお幸に逢いました。お幸も最初はあやぶんでいたのですが、庄之助の方から自分の屋敷の名をあかし、併せて一切の秘密をうち明けたので、お幸もはじめて安心して、これも正直に何も彼も打ちあけることになりました。お金は初めて自分の素性を知つて驚いたわけです。そこで庄之助は姉にむかつて云いました。

「お父さまは近ごろ御病身で、昨年の夏から御隠居のお届けをなされまして、若年ながら手前が家督を相続しております。つきましてはひとりのお姉様^{あねえ}を唯今のようなお姿にして置くことはなりません。表向きに屋敷へお連れ申すことは出来ませずとも、どこぞに相当の世帯をお持ちなされて、義理の母御と御不自由なくお暮しなさるゝように、手前が屹と

お賄い申します。」

そうなればまことに有難い話で、お幸に勿論異存のあろう筈はありませんでしたが、お金はすこし返事に困りました。矢場女をやめて、弟の仕送りで気楽に暮して行かれるのは結構ですが、お金には内緒の男がいる。上手に逢曳をしているので今まで誰にも覺られなかったのですが、お金には新内松しんないまつという悪い男が附いているのです。以前は新内の流しを遣つていて、今の商売は巾着切り、そこで綽名を新内松という苦味走つた大哥あにさんに、お金はすっかり打込んでいます。新内松と矢飛白おきん、その頃ならば羽左衛門に田之助とでも云いそうな役廻りですが、この方には大した芝居もなくて済んでいたところへ、十九年ぶりで弟の庄之助が突然にたずねて来て、自分の姉として世話をして遣ろうという。お金に取つては有難迷惑です。

たとい本所の屋敷へ引取られないでも、今の商売をやめて弟の世話になるのは、いかにも窮屈であり、又自分の男のかゝり合いから、どんなことで弟に迷惑をかけないとも限らない。さりとて新内松と手を切つて、堅氣に暮すなどという心は微塵もないので、お金はなんとかして庄之助の相談を断りたいと思つたが、まさかに巾着切りを男に持っていますと正直に云うことも出来ない。よんどころなく好い加減の挨拶をして其場は別れたのです

が、もとより矢場の稼ぎを止めるでもなく、その後も相変らず神明の店に通っていると、庄之助はその後たび／＼尋ねて来て、早く神明の方をやめてくれと催促する。おふくろのお幸も傍から勧める。お金ももう断り切れなくなつて、男と相談の上で一旦どこへか姿を隠してしまつたのです。

そんなことゝは知らないで、庄之助は又もや片門前の家へたずねてゆくと、姉はこの間から家出して行方が知れないということをお幸から聞かされて、庄之助もおどろきました。新内松のことはお幸も薄々知つていたのですが、そんなことを庄之助にうつかり云つていか悪いかと遠慮していたので、何がどうしたのか庄之助には些ちつとも判りません。それでも神明へ行つて訊いてみたら、なにかの手がかりもあろうかと、何気ない風でお金の店へ出かけてゆくと、いきなり地廻りやごろつき共に取りまかれて、前に云つたような大騒動を仕し出来でしたのです。桜井庄之助という若い侍は姉思いから飛んだことになつて気の毒でした。

すべての事情が斯うわかつてみると、庄之助の八人斬にも大いに同情すべき点があります。斬られた相手は皆ごろつきや地廻りで、事の実否もよく糺さず、武士に対して狼藉を働いたのですから、云わば自業自得の斬られ損ということになつてしまいました。殊に幕

末で、徳川幕府の方でも旗本の侍は一人でも大切にしている時節でしたから、庄之助にはなんの咎めも無くて済みました。稼ぎ人に逃げられたお幸は、桜井の屋敷から内々の扶助をうけていたとか云います。

新内松は品川の橋向うで御用になりました。お金はその時まで一緒にいたらしいのですが、そのゆくえは判りませんでした。それから一年ほど経ってから、神奈川の貸座敷に手取りの女がいて、その右の頬にかすり疵のあとがあると云う噂でしたが、それが彼の矢がすりであるか無いか、確かなことは知った者ありませんでした。くどくも申す通り、新内松に矢がすりお金——この方に一向面白いお芝居がないので、まことに物足らないようですが、実録は大抵こんなものかも知れませんね。

青空文庫情報

底本：「大衆文学大系」 岡本綺堂 菊池寛 久米正雄 集」 講談社

1971（昭和46）年10月20日第1刷

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：林田清明

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三浦老人昔話

岡本綺堂

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>